鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（82）

加世田停車場線街路事業（加世田市川畑地内）
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

加治屋（かじや）遺跡

（加世田市川畑）

2005年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（82）

加治屋遺跡

二〇〇五年三月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序　　文

この報告書は加世田停車場線街路事業に伴って，平成１６年度に実施した加世田市川畑に所在する加治屋遺跡発掘調査の記録です。

加世田市は国指定史跡である草創期の栫ノ原遺跡や，草創期の土器としては日本最大ともいわれる土器の出土した志風頭遺跡，晩期の土器型式に名のある上加世田遺跡など縄文時代の著名な遺跡が存在しています。また，中世後半には島津家再興の租ともいわれる日新公の居た歴史的な地でもありました。

今回調査したのは狭い範囲であったため，出土品はそれほど多くありませんでしたが，縄文時代草創期から古代まで遺跡内において居住地がどのように変遷していったのかという問題，多く出土した縄文時代早期・後期における土器型式の問題など，加世田市だけにとどまらず，鹿児島県における人びとの生活を考えるうえに，大切な資料が多く発見されました。これらは今後，他の遺跡を調査・研究するうえに大いに参考になることと思います。

最後になりましたが，調査にあたり御協力いただいた鹿児島県土木部及び加世田市教育委員会，並びに発掘調査に従事された地元の方々に厚くお礼申しあげます。

平成17年３月

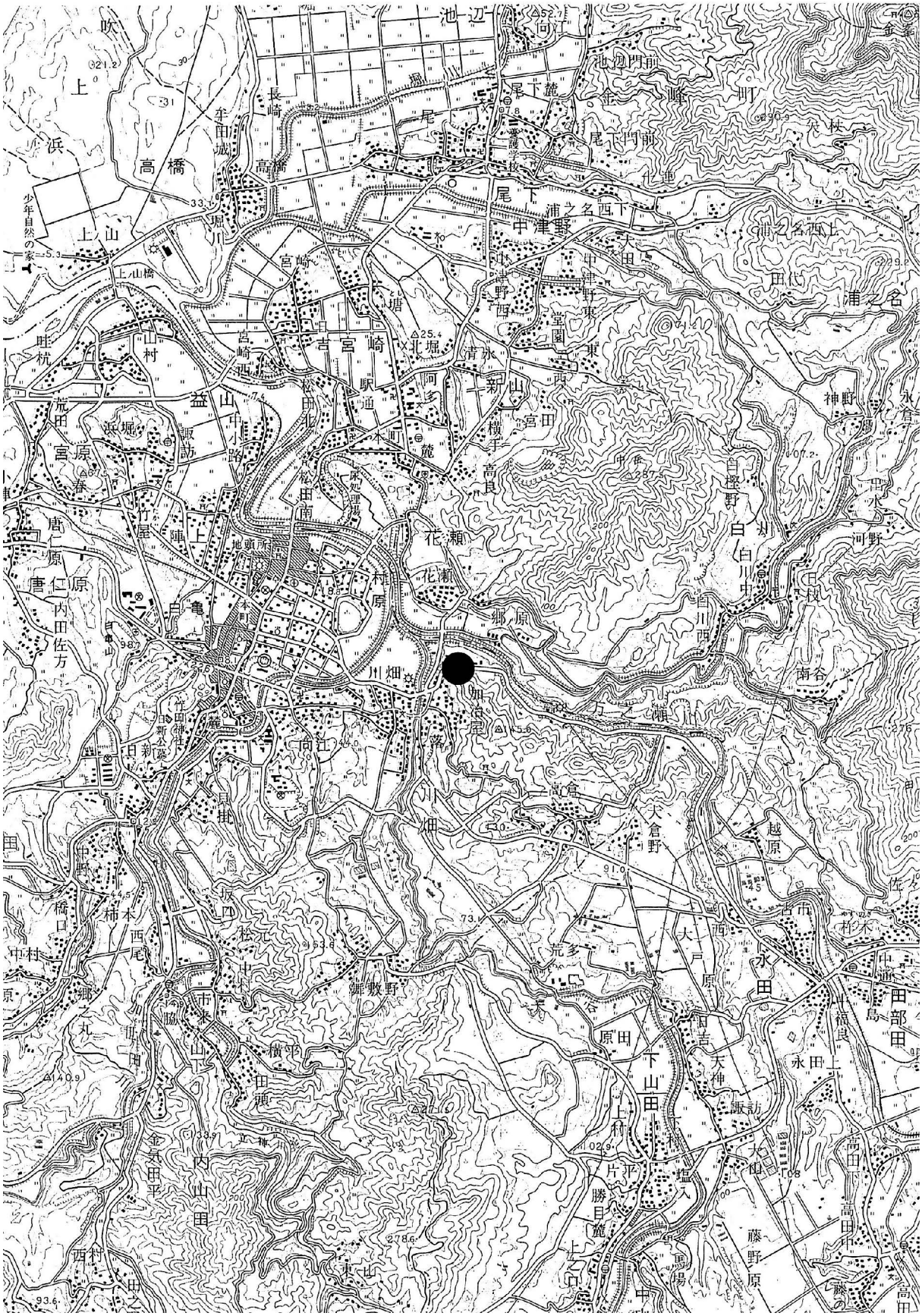
鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　　木　原　俊　孝

報　告　書　抄　録

ふりがな	かじやいせき
書名	加治屋遺跡
副書名	加世田停車場線街路事業（加世田市川畑地内）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第　82　集
編著者名	池畑耕一
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-4461　鹿児島県国分市上之段1175番地1　　TEL0995-48-5811
発行年月日	西暦2005年3月11日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
かじやいせき 加治屋遺跡	かごしまけん 鹿児島県 かせだしかわばた 加世田市川畑 あざいわやま 字岩山	46211	4-12	31度 25分	130度 21分	確認調査 2003 1022 本調査 2004 506 ～ 2004 525	24 550	街路事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
加治屋遺跡	集落	縄文時代早期 縄文時代後期 縄文時代晩期 古墳時代 古代 中世	土坑1 集石3 土坑1	桑ノ丸式土器・押型文土器 塞ノ神A式土器・石皿 礫器 出水式土器 石鏃・スクレイパー・礫器 石皿 入佐式土器・石鏃 成川式土器 土師器 青磁	


池辺
向江
池辺門前
尾下麓
尾下門前
尾下
中津野
浦之名西下
浦之名西上
浦之名
田代
高橋
上山
宮崎
宮崎西
宮崎吉
北堀
新山
宮田
益山
荒田
宮原
唐仁原
内田佐方
竹屋
上
白亀
松田南
駅通
本町
横手
高良
花瀬
郷原
川畑
向江
白樫野
白川中
白川西
南谷
神野
水倉
河野
高倉
大倉野
越原
荒多
舞敷野
大戸原
吉天神
永田
田部田
福良
下山田
上村
飯訪
大山
塩入
片平
勝目麓
藤野原
高田
内山田
金谷田平
西村
中村
柿本
西尾
橋口
横田
市来山下
東山
上山橋
堀川
少年自然の家

遺跡位置図

例　　言

1　本報告書は鹿児島県土木部（都市計画課）が行う加世田停車場線街路事業（加世田市川畑地内）に伴う加治屋遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は，鹿児島県土木部都市計画課から鹿児島県教育委員会が受託し実施した。

3　発掘調査は平成16年5月6日～5月25日に実施し，整理作業及び報告書作成も平成16年度に実施した。

4　遺物番号は通し番号とし，本文・挿図・図版の番号は一致する。

5　挿図の縮尺は，各図面にスケールで示した。

6　本書で用いたレベル数値は，現地工事に用いる仮水準点を基準にした。

7　現場での実測・写真撮影，遺物の実測・写真撮影，浄書等は池畑・横手・岩屋が分担して行った。

8　本書の執筆・編集は池畑が行ったが，第Ⅰ章第2節は岩屋が執筆した。

9　出土した遺物は，県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用する予定である。なお，本遺跡の遺物注記の略号は「ＫＡＪＩ」である。

目　　次

序文
報告書抄録
例言
目次

第Ⅰ章　調査の経過 …… 1
　第１節　本調査に至るまでの経過 …… 1
　第２節　本調査の経過 …… 1
　第３節　発掘調査及び整理作業の組織 …… 3

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 4
　第１節　地理的環境 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 4

第Ⅲ章　層位 …… 8
　第１節　第１地点の基本層位 …… 8
　第２節　第２地点の基本層位 …… 8

第Ⅳ章　調査の概要 …… 9
　第１節　確認調査の概要 …… 9
　第２節　第１地点の調査 …… 9
　　１　遺構 …… 11
　　２　遺物 …… 12
　第３節　第２地点の調査 …… 14
　　１　縄文時代草創期 …… 14
　　２　縄文時代早期 …… 15
　　３　縄文時代前期 …… 24
　　４　縄文時代後期 …… 25
　　５　古墳時代以降 …… 42

第Ⅴ章　まとめ …… 49
　第１節　万之瀬川下流域の遺跡変遷と加治屋遺跡の位置づけ …… 49
　第２節　縄文時代草創期・早期の土器について …… 50
　第３節　縄文時代後期の土器について …… 51

挿　図　目　次

第１図　周辺の遺跡 …… 6
第２図　地層図 …… 8
第３図　確認トレンチ配置図 …… 9
第４図　調査区域図 …… 10
第５図　第１地点検出の柱穴 …… 11
第６図　第１地点出土の石皿 …… 12
第７図　第１地点の土坑と遺物 …… 13
第８図　縄文時代早期の遺物分布図 …… 14
第９図　集石 …… 16
第10図　縄文時代草創期の土器と早期の土器⑴ …… 17
第11図　縄文時代早期の土器⑵ …… 18
第12図　縄文時代早期の土器⑶ …… 19
第13図　縄文時代早期の土器⑷ …… 21
第14図　縄文時代早期の土器⑸ …… 22
第15図　縄文時代早期の土器⑹ …… 23
第16図　縄文時代早期の土器⑺ と前期の土器 …… 24
第17図　縄文時代後期の土坑と出土土器 …… 25
第18図　縄文時代後期の土器集中状況 …… 26
第19図　縄文時代後期の土器⑴ …… 27
第20図　縄文時代後期の土器･石器出土状況 …… 28
第21図　縄文時代後期の土器⑵ …… 30
第22図　縄文時代後期の土器⑶ …… 31
第23図　縄文時代後期の土器⑷ …… 32
第24図　縄文時代後期の土器⑸ …… 34
第25図　縄文時代後期の土器⑹ …… 35
第26図　縄文時代後期の土器⑺ …… 36
第27図　縄文時代後期の土器⑻ …… 37
第28図　第２地点出土の石器⑴ …… 38
第29図　第２地点出土の石器⑵ …… 39
第30図　第２地点出土の石器⑶ …… 40
第31図　第２地点出土の石器⑷ …… 41
第32図　古墳時代以降の遺物 …… 42
第33図　第２地点の溝状遺構 …… 44

表　目　次

第１表　周辺遺跡地名表 …… 7
第２表　縄文土器観察表⑴ …… 45
第３表　縄文土器観察表⑵ …… 46
第４表　縄文土器観察表⑶ …… 47
第５表　縄文土器観察表⑷ …… 48

図　版　目　次

図版１　第１地点近景（東から）
土坑（掘り上げ前）
土坑（掘り上げ後）
図版２　礫器出土状況
第１地点柱穴検出状況（西から）
図版３　第２地点近景（東から）
第２地点遺物出土状況（東から）
図版４　第２地点近景（西から）
第２地点土坑
図版５　集石２
集石３
図版６　縄文時代後期の土器集中状況
縄文土器出土状況
塞ノ神式土器出土状況
図版７　縄文時代草創期・早期の土器
図版８　縄文時代早期の土器
図版９　縄文時代早期の土器
図版10　縄文時代後期の土器
図版11　縄文時代後期の土器
図版12　石器

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　本調査に至るまでの経過

昭和53年７月，加治屋遺跡の一部に加世田市営住宅を建築予定なので分布調査をして欲しいとの要望が加世田市教育委員会にあった。

当時，加世田市教育委員会では県教育委員会の支援を得て加世田運動公園建設に伴う上ノ城遺跡の確認調査を実施することになっていたため，この調査に先立って７月10日に現地調査をしたところ，建築予定地も遺跡であることが判明した。そこで，上ノ城遺跡の調査に先立って７月18日から21日までの４日間，建築予定地の予備調査を行った。さらに，上ノ城遺跡の確認調査が終った８月７日から９月８日までの26日間，加治屋遺跡の本調査を行った。当初は3,000㎡を対象としたが，このうち建物の建築予定地1,500㎡について本調査を実施し，縄文時代から古代までの遺構・遺物が発見された。縄文時代は後期と晩期の遺物が出土したが，特に上加世田式土器を主とする晩期のものが多く，土器の他に打製石斧などが出土した。古墳時代の土器も多かったが，遺構はなかった。平安時代の遺構は礫などを多く含む竪穴住居状の土坑，合せ口の土師甕が発見され，土師器・須恵器が多く出土した。

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて協議し，諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき，鹿児島県土木部都市計画課（加世田土木事務所）が計画していた県単道路整備加世田停車場線街路事業に先立って，対象地内における埋蔵文化財の有無について，平成９年に鹿児島県教育庁文化財課（以下文化財課）に照会した。これを受けて文化財課が平成９年４月22日に分布調査を実施したところ，当該年度部分（加治屋台地の東側部分）には遺跡はないものの，事業区域の延長部分に加治屋遺跡が所在することが判明した。

事業はそれに続いて行われず中断していたところ，平成15年10月14日に，加世田市教育委員会から加治屋遺跡で工事が行われているとの通報が県教育委員会へはいった。文化財課は10月15日に現地へ出かけ加世田土木事務所と調整したのち，10月22日に確認調査を実施した。その結果550㎡について本調査の必要なことがわかった。

この結果を受けて，都市計画課・県文化財課・県立埋蔵文化財センター（以下埋文センター）は協議し，現状保存や設計変更が不可能であることから，記録保存のための緊急発掘調査（本調査）を実施することとなった。

第２節　本調査の経過

本調査は平成16年５月６日から５月25日まで，550㎡を対象として，埋文センターが実施した。

調査の経過については，調査日誌から略述する。

５月６日（木）

調査機材搬入。電話の取り付け。重機で第１地点のバラス除去と表土剥ぎ。

５月７日（金）

第１地点掘り下げ。東側はⅢ層が残っており，土器，石鏃，礫器等が出土。出土状況を写真撮

影。トレンチ跡を掘り上げ。落ち込み見当たらず。発掘範囲を平板実測。

第２地点を重機で掘り下げ。

５月10日（月）

第１地点東側掘り下げ。縄文時代晩期の土器数点出土。柱穴あり。トレンチ南側で土坑を確認したため，トレンチ側面の写真撮影及び実測。土坑掘り下げ。残存度は少ない。

５月11日（火）

第１地点東側の柱穴の掘り下げ。写真撮影と平板実測。完掘した土坑の写真撮影・実測。第１地点の調査終了。第２地点作業開始。土器等が多量出土。

以下，第２地点の調査経過

５月12日（水）

１～３Ａ・Ｂ区　Ⅲ層掘り下げ。縄文土器，土師器等が多く出土。溝状の遺構が南北方向に３条，埋土は新しい。４区付近は，アカホヤ層の可能性あり。

５月13日（木）

雨天のため，作業中止。

５月14日（金）

第２地点２－Ａ・Ｂ区を中心に掘り下げ。１・２区の遺物出土状況の写真撮影と平板実測。１区遺物取り上げ。３・４区掘り下げ。土器数点出土。

５月17日（月）

３．４区掘り下げ。４区東側にある段の表土を取り除き，アカホヤ層上面の状況を出す。３区ではチョコ層が出ている。アカホヤ層には，土器が包含されている。

１区掘り下げ。縄文時代後期の土器が出土。アカホヤ層の遺物出土状況と溝・段等の測量。

２－Ａ区・２－Ｂ区集石２基の実測。２－Ａ区で土器群出土。３－Ａ区の土器群実測。

５月18日（火）

午前中，雨天のため作業中止。午後から１区Ⅲ層掘り下げ。土器多し。遺物の出土状況実測。

３・４区Ⅲ層と１－Ａ区Ⅲ層の遺物の取り上げ。

５月19日（水）

雨天のため，作業員休み。午後から土器散布状況実測。

５月20日（木）

雨天のため作業中止。

５月21日（金）

第２地点掘り下げ。１・３・４区から縄文時代後期の土器が出土。２区から縄文時代早期の土器が出土。２－Ｂ区で土器群と散礫出土。２－Ａ区の土器群実測。１－Ａ区の集石実測。１区と４区のアカホヤ層遺物出土状況の平板実測と遺物取り上げ。

５月24日（月）

１～４区掘り下げ。１・２区で縄文時代早期の土器出土。３・４区終了。トレンチ地層の写真撮影と実測。２－Ｂ区の土器群と散礫の写真撮影と平板実測。遺物取り上げ。

５月25日（火）

１・２－Ａ・Ｂ区掘り下げ。平板実測。遺物の取り上げ。１－Ｂ区土坑の写真撮影と実測。全景完掘状況の写真撮影を行い調査終了。調査用機材撤収。

なお，報告書作成事業は平成16年７月から11月まで埋文センターで実施した。一部の水洗いを終了していただけだったため，残りの水洗いをしてから，注記・接合・復元，分類，実測・拓本，レイアウト，トレース，原稿執筆と進めた。

第３節　発掘調査及び整理作業の組織

事業主体	鹿児島県土木部都市計画課（加世田土木事務所道路建設課）			
調査主体	鹿児島県教育委員会			
企画調整	鹿児島県教育庁文化財課			
調査責任者	県立埋蔵文化財センター	所長		木原俊孝
調査企画者	県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長		賞雅　彰
	〃	調査課	課長	新東晃一
	〃	〃	課長補佐	立神次郎
	〃	〃	主任文化財主事兼第一調査係長	池畑耕一
	〃	〃	主任文化財主事	中村耕治
調査担当者	〃	〃	主任文化財主事兼第一調査係長	池畑耕一
	〃	〃	文化財主事	岩屋高広
	〃	〃	文化財研究員	横手浩二郎
調査事務担当	〃	総務課	総務係長	平野浩二
	〃	〃	主事	福山恵一郎
報告書作成検討委員会	平成16年12月９日	所長ほか	９名	
報告書作成指導委員会	平成16年12月５日	調査課長ほか	４名	
企画委員				宮田栄二
				堂込秀人

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

加治屋遺跡は加世田市の東側にある川辺町境に近い川畑に位置し，万之瀬川を北側眼下に望む標高27～29ｍほどのシラス台地上に位置する。

加世田市は薩摩半島の西海岸部に位置し，東は川辺郡川辺町，西は川辺郡大浦町，南は枕崎市，南西は川辺郡坊津町，北東は日置郡金峰町に接し，北西は東シナ海に面している。

枕崎市との市境には標高約475ｍの蔵多山があり，ここに源を発する加世田川は加世田市街地を北流し，大きく東へ蛇行しながら当遺跡の北西側で川辺町に源を発する万之瀬川に合流している。万之瀬川はそのあと日本三大砂丘のひとつである吹上砂丘を抜けて東シナ海に注いでいる。吹上浜は串木野市から加世田市まで南北約30㎞にわたる遠浅海岸で，冬は北西の風が強いため，海岸の砂は内陸部に吹きだまり，最大幅２㎞，最高所47ｍという砂丘ができた。河川は長年にわたって土砂を運び沖積地を形成しているが，加世田市街地はこの沖積地に立地している。

第２節　歴史的環境

加世田地方では，旧石器時代から近世に至る各時代の遺跡が多数発見されており，発掘調査の実施された遺跡も少なくない。ここでは周辺地域とあわせて主な遺跡を時代順に紹介していく。

旧石器時代　祝原遺跡ではナイフ形石器・石核などが，栫ノ原遺跡では剥片尖頭器・三稜尖頭器などが出土し，当地方では最も古い時期の遺跡である。平田尻遺跡では，薩摩火山灰層より下の層で細石刃核が出土し，礫群１基も発見された。祝原遺跡でも細石刃・細石刃核・スクレイパーなどが出土している。

縄文時代　この周辺では縄文時代の遺跡が多い。

草創期の遺跡として国指定史跡の栫ノ原遺跡や，志風頭遺跡などがある。栫ノ原遺跡では連穴土坑・集石など各種の遺構とともに多くの隆帯文土器や石器（石鏃・石匙・磨製石斧・磨石・石皿など）が発見されているが，そのうちのひとつである丸ノミ形磨製石斧は「栫ノ原型石斧」と名づけられている。志風頭遺跡では連穴土坑や集石とともに隆帯文土器や石鏃・石皿などが発見されている。連穴土坑の上で見つかった隆帯文土器はほぼ完形のものであるが，これは日本ではこの時期のものとしてはもっとも大型のものであるとされている。ヘゴノ原遺跡では土器が細石器・石鏃と共伴しており，この時期ではもっとも古いものである。愛宕Ｂ遺跡でも土器と石鏃が出土しており，この周辺における草創期の遺跡の集中度は県内でも密なほうである。

志風頭遺跡は早期の円筒形土器や石鏃・石皿なども出土しているが，多量に出土している磨製石鏃は石器製作技術を知る上に貴重である。栫ノ原遺跡でも多くの前平式土器が出土し，神山遺跡などでは押型文土器が採集されている。加治屋遺跡では早期後半の土器が比較的多く出土している。

前期には金峰町側に阿多貝塚・上焼田遺跡・上水流遺跡などがあるが，加世田市ではほとんどない。万之瀬川流域の上水流遺跡では曽畑式土器が出土している。中期になると，津貫の石堂遺跡で阿高式土器・並木式土器が，万之瀬川流域の上水流・芝原遺跡で春日式土器が出土している。

後期には栫ノ原遺跡で岩崎上層式土器・市来式土器，石堂遺跡で出水式土器，富が岡遺跡で御領式土器が出土している。芝原遺跡では指宿式土器・市来式土器とともに集石・伏甕・埋甕などが発見され，石鏃・石匙・磨製石斧・磨石・石皿などの石器，円盤形土製品などの土製品も多く出土している。加治屋遺跡でも多くの土器が出土している。

晩期になると，上加世田遺跡で上加世田式土器に伴う大型土坑が発見され，土器の他に石鏃・石匙・磨製石斧・打製石斧・磨石・石皿・異形石器など多種多量の石器や，軽石製石偶・石棒，管玉・勾玉・小玉などの石製品，土偶など多種多様の出土品がある。上加世田式土器期から黒川式土器期にかけては加治屋・遠見が丘・上ノ城・栫ノ原・上水流・持躰松などの遺跡でも多くの土器・石器が出土しており，遺跡の拡大が推測できる。とともに大きな集落群となっている。

弥生時代　弥生時代の遺跡は少なく，ほとんどない。後期になると，芝原遺跡では鏡４面が出土するなど特殊な集落となっており，安国寺式土器などを含む多量の土器の出土などからみて大きなムラの存在が予測できる。栫ノ原遺跡では同じ頃の３軒の竪穴住居跡が見つかっている。

古墳時代　この時期の生活跡として栫ノ原・上加世田・上水流・芝原・中小路などの遺跡がある。なかでも上水流・芝原遺跡では多くの土器とともに竪穴住居跡も見つかっている。中小路遺跡あたりまで含めて拠点集落としての位置付けができる。栫ノ原遺跡では３軒の竪穴住居跡が見つかっており，須恵器・刀子なども出土している。また，相星の旧万之瀬川河口近くの山地から南へ突出する舌状台地の先端部には六堂会箱式石棺墓がある。組合式箱式石棺で，２枚の板石で蓋をしている。石棺の内側には丹が塗られ，副葬品として長さ180㎝の鉄剣と刀子・小玉がある。

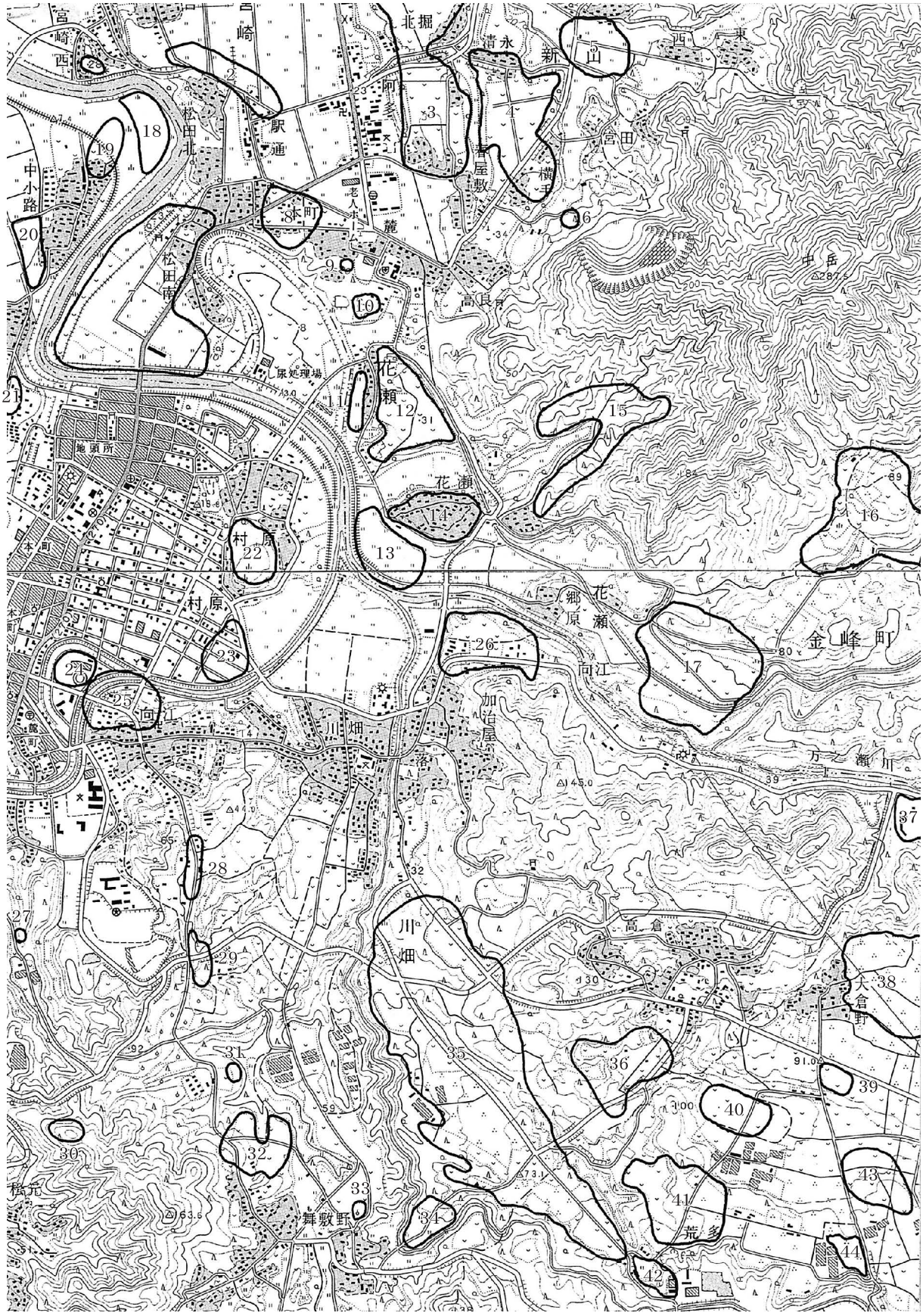
古代　加世田地方は，鷹屋・葛例・田水・阿多の四郷からなる阿多郡に属しているが，加世田市はこのうちの鷹屋郷に該当すると考えられている。郡衙の所在地は金峰町小中原遺跡が有力とされている。現在の加世田市役所が建っている場所は杉本寺遺跡であり，土師器・灯明皿・坩と共に奈良時代の蔵骨器が発見されている。また，上加世田遺跡からは「久米」と墨書された奈良時代の土師器が出土しているが，「久米」は中央の豪族である久米氏を表わしているといわれている。

中世　別府城を中心として多くの山城が所在する。別府城は福寿城・尼ヶ城・中の城からなり，その周囲に尾守城（栫ノ原遺跡）・花牟礼城・諏訪ヶ尾・内田城・荒瀬城と呼ばれる６か所の支城があった。これらは別府氏の居城であったが，天文７年（1538）には島津中興の祖，忠良がこの城を攻略して居城とした。

上ノ城遺跡では炉跡・大型土坑・窯などの遺構が見つかり，中国産陶磁器などが多く出土している。上加世田遺跡でも溝や大型土坑などが発見され，製鉄関係の遺構と考えられている。

参考文献

１）加世田市教育委員会　『村原（栫ノ原）遺跡』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書　⑴　1977
２）加世田市教育委員会　『上ノ城遺跡』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書　⑵　1980
３）加世田市教育委員会　『上加世田遺跡－１』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書　⑶　1985
４）加世田市教育委員会　『上加世田遺跡－２』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書　⑷　1987
５）加世田市教育委員会　『村原（栫ノ原）遺跡』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書　⑸　1987



第１図　周辺の遺跡（２万５千分の１図）

第１表　周辺遺跡地名表

番号	遺　跡　名	所　在　地	地　形	時　　代	遺　　物　　等	備　　考
1	古城跡	金峰町宮崎西	台地	中世（室町）		別称「古ノ城」
2	白糸原	金峰町宮崎	台地	縄文～古墳，中世	押型文土器・成川式土器・須恵器・青磁	平成7･8年発掘調査
3	小中原（北の堀）	金峰町新山小中原ほか	台地	旧石器～中世	弥生土器・土師器	
4	立野原	金峰町新山	台地	古墳	成川式土器	
5	三反田	金峰町新山	低地	弥生，古墳	弥生土器・成川式土器	
6	新山南	金峰町新山南	台地	弥生（後）	弥生土器	
7	松田南（渡畑・芝原・持躰松）	金峰町宮崎	台地･低地	縄文～近世	縄文土器・石器・弥生土器・鏡・陶磁器	
8	市薗	金峰町宮崎	台地	縄文，中世		
9	阿多城跡	金峰町阿多	低地	中世（室町）		
10	鶴之城跡	金峰町花瀬鶴之城	台地	中世（室町）		阿多城の出城か
11	大迫田	金峰町花瀬	低地	中世	陶磁器	
12	花瀬今城原(今城跡)	金峰町花瀬今城原	台地	縄文～古墳，中世	土器片	
13	上水流（森山）	金峰町花瀬	低地	縄文～近世	春日式・深浦式・土師器	
15	中岳山麓古窯跡群	金峰町花瀬	山麓	平安	須恵器	「古文化談叢」14･15号
16	宇治野原	金峰町白川西	台地	旧石器,縄文(早),古墳	尖頭器，前平式土器	
17	郷ノ原（鮎受）	金峰町花瀬	台地	縄文・古墳	入佐式・成川式土器	
18	松ヶ鼻	加世田市益山松ヶ鼻	平地	古墳・近世	土器	
19	東柳原	加世田市益山東柳原	平地	弥生・古墳	土器	
20	中小路	加世田市益山中小路・屋郷	低地	弥生，古墳，中世，近世	松木薗式・成川式土器 貿易陶磁器	市埋文報(19)
21	掛ノ上	加世田市益山掛ノ上	台地	縄文～古墳・中世	縄文土器（早・晩）・磨製石鏃	市埋文報(21)
22	栫ノ原（尾守城跡）	加世田市村原栫ノ原	台地	旧石器～古墳，中世，近世	剥片尖頭器･隆帯文･縄文土器･須恵器･土師器･砥石･石斧･岩偶･叩き石	国指定史跡 市埋文報(1)(5)(15)(17)(20)
23	永田	加世田市川畑永田	低地	古墳	成川式土器	
24	杉本寺跡	加世田市川畑杉本寺	低地	弥生・古代	弥生土器・蔵骨器	消滅
25	上加世田	加世田市川畑上加世田	河岸段丘	縄文～中世	土器･石器･岩偶･石棒･石斧･ヒスイ	市埋文報(3)(4)(13)
26	加治屋	加世田市川畑岩山・加治屋	台地	縄文～古代	縄文土器（草創～晩期）・土師器・須恵器・石斧・砥石他	本報告書
27	屋地	加世田市武田屋地	台地	弥生	弥生土器	
28	二頭	加世田市川畑二頭	台地	古墳	成川式土器	
29	遠見ヶ岡	加世田市川畑遠見ヶ岡	丘陵	縄文，弥生	黒川式・石斧・弥生土器	
30	荒瀬城跡	加世田市武田池ノ上	山頂	中世	山城	
31	みかきの	加世田市川畑見掛野	丘陵	弥生	弥生土器	
32	祝原	加世田市川畑湯開原	丘陵	旧石器～古代	ナイフ形石器・細石刃核 縄文土器(早･前･晩)･弥生土器	市埋文報(11)
33	神山	加世田市川畑神山	台地	縄文（早）	押型文土器	
34	平田尻	加世田市川畑平渡瀬	河岸段丘	旧石器～古墳	細石刃核・縄文土器（前・晩）・石匙	市埋文報(11)(18)
35	上長迫（荒多迫・松尾迫・入道ヶ野）	加世田市川畑上長迫 川辺町下山田荒多迫他	台地	縄文～古墳	縄文土器・石匙・成川式土器	
36	深田ノ迫	加世田市川畑深田ノ迫	台地	縄文・弥生	土器	
37	兎ヶ城跡	川辺町下山田兎ヶ城	台地	古墳，中世		
38	津フジ	川辺町下山田津フジ	台地	縄文，古墳		
39	西之平	川辺町下山田西之平	台地	中世		
40	水ヶ元	川辺町下山田水ヶ元	台地	弥生（後）～古墳	松木薗式・中津野式土器	
41	荒多	川辺町下山田荒多	台地	縄文	石斧・土器片	
42	上桑持野	川辺町下山田上桑持野	台地	弥生	弥生土器	
43	供養塚	川辺町下山田供養塚	台地	縄文～中世		
44	西供養塚	川辺町下山田西供養塚	台地	古墳	土器	

第Ⅲ章　層位

当遺跡は中央を道路で分断され，さらに緩斜面の台地を一部は畑作のため段々畑としてあるので，各地点によってそれぞれの層序，厚さなどには相違がみられる。

第１節　第１地点の基本層位

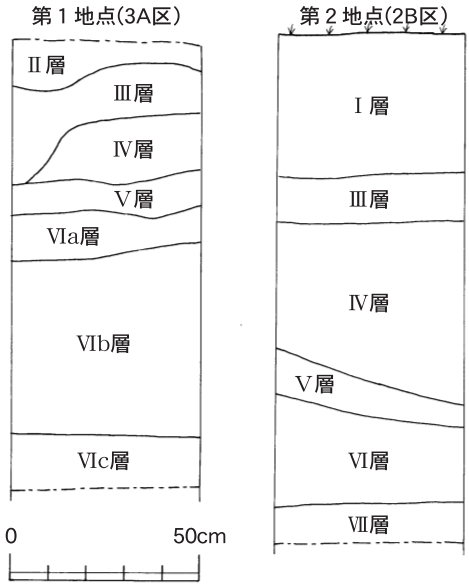
第１地点はアカホヤ層あるいはチョコ層まで削平を受けているため，周辺（用地外）の壁面も参考としながら層序を記す。

表層は黒褐色砂質土（耕作土）で，約20㎝ある。その下はアカホヤ層の２次堆積層（Ⅱ層）である。厚いところは40㎝ほどある。その下に20～50㎝ある淡い黒褐色土（Ⅲ層）がある。その下のⅣ層は20～40㎝の厚さがある黒色土でパミスがまざっている。その下のⅤ層が薩摩火山灰層で厚く残っている所は12～25㎝ある。Ⅵ層は暗茶褐色粘質土で３層に分かれ，中央が強く粘質をおび，その上下はやや砂質である。中央の粘土層は90～100㎝と厚く堆積している。その下は不明であるが，台地の基盤はシラスである。

第２節　第２地点の基本層位

表土は黒褐色砂質土となる耕作土で，約20㎝ある。その下には本来黒ニガと呼ばれる黒色砂質土があるはずだが，ここでは見られなかった。Ⅲ層はふかふかした黄褐色砂質土で，一般的にアカホヤと呼ばれている。縄文時代後期，古墳時代の包含層で厚さが15～20㎝ある。Ⅲ層とⅣ層の間には黄褐色パミスが散在している。約6400年前の鬼界カルデラ噴出の火山噴出物である。Ⅳ層は淡茶褐色砂質土でⅢ層との区別はつきにくいが，Ⅲ層に比べて密な土になっている。縄文時代早期の包含層で，厚さが20～50㎝ある。Ⅴ層は暗茶褐色の砂質をおびた粘質土で，いわゆるチョコ層と呼ばれる層である。厚さが10～20㎝で，この上部が縄文時代草創期の包含層となる。なお，この上にいわゆる薩摩火山灰と呼ばれる約12000年前の黄褐色パミス層があるはずだが，ここでは検出されていない。

Ⅵ層は暗茶褐色粘土で，粘質が強く砂岩・泥岩などの小石が多く含まれている。20～50㎝ほどの厚さがある。Ⅶ層は角礫などが多くはいった黄色みの強い砂質土である。なお，本地点の近くの工事によって削られた壁面をみると，粘土層の下は水成砂層の互層となっている。すなわち，小石・軽石の多い層，砂だけの層，軽石の層などの互層である。さらにその下は細砂質砂層となっている。これらは万之瀬川の古い河床地を示しているものと思われる。



第２図　地層図

第Ⅳ章　調査の概要

本調査の対象地は大きく２か所に分かれている。道の北東側にある，従来から遺跡のエリアに含まれていたほうを第１地点，道の南西側にある遺跡の隣接地にあたるほうを第２地点とする。

第１節　確認調査の概要

調査は平成15年10月22日に加治屋遺跡400㎡と，その隣接地800㎡を対象として，文化財課文化財主事井ノ上秀文が加世田市教育委員会上東克彦・福永裕暁らの協力を得て行った。

加治屋遺跡では２か所にトレンチを設けた。

１トレンチはⅡ層（アカホヤ層）までが削平されていた。Ⅶ層上面まで1.5ｍを掘り下げ，Ⅲ層下部から掘り込まれたと思われる落し穴状の土坑が壁面に確認された。

２トレンチは上部がかなり削平され，Ⅵ層下部から残存していた。Ⅶ層上面まで約0.4ｍ掘り下げたが，遺構・遺物は発見されなかった。

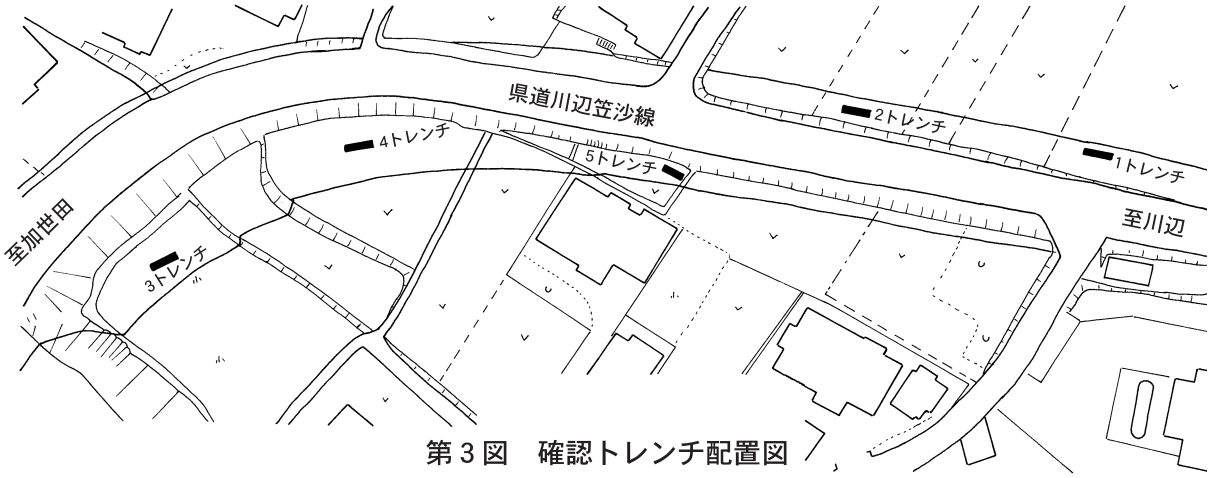
加治屋遺跡の南側の高いほうに３か所のトレンチを設けた。

３トレンチは最高所に設定し，Ⅶ層上面まで約1.5ｍ掘り下げた。地層は安定しておらず，Ⅱ～Ⅶ層の境が明確でなく，薩摩火山灰層もはっきりしていない。遺構は確認できなかったが，Ⅲ層上部で土器片が１点，Ⅳ層上部で数点の土器片が出土した。

４トレンチはⅥ層途中まで約2.2ｍ掘り下げたが，遺構・遺物とも確認されなかった。

５トレンチはⅦ層上面まで約1.9ｍ掘り下げたが，遺構・遺物とも確認できなかった。

約24㎡の調査の結果，１トレンチの周辺200㎡と，３トレンチの周辺350㎡について本調査を実施することにした。

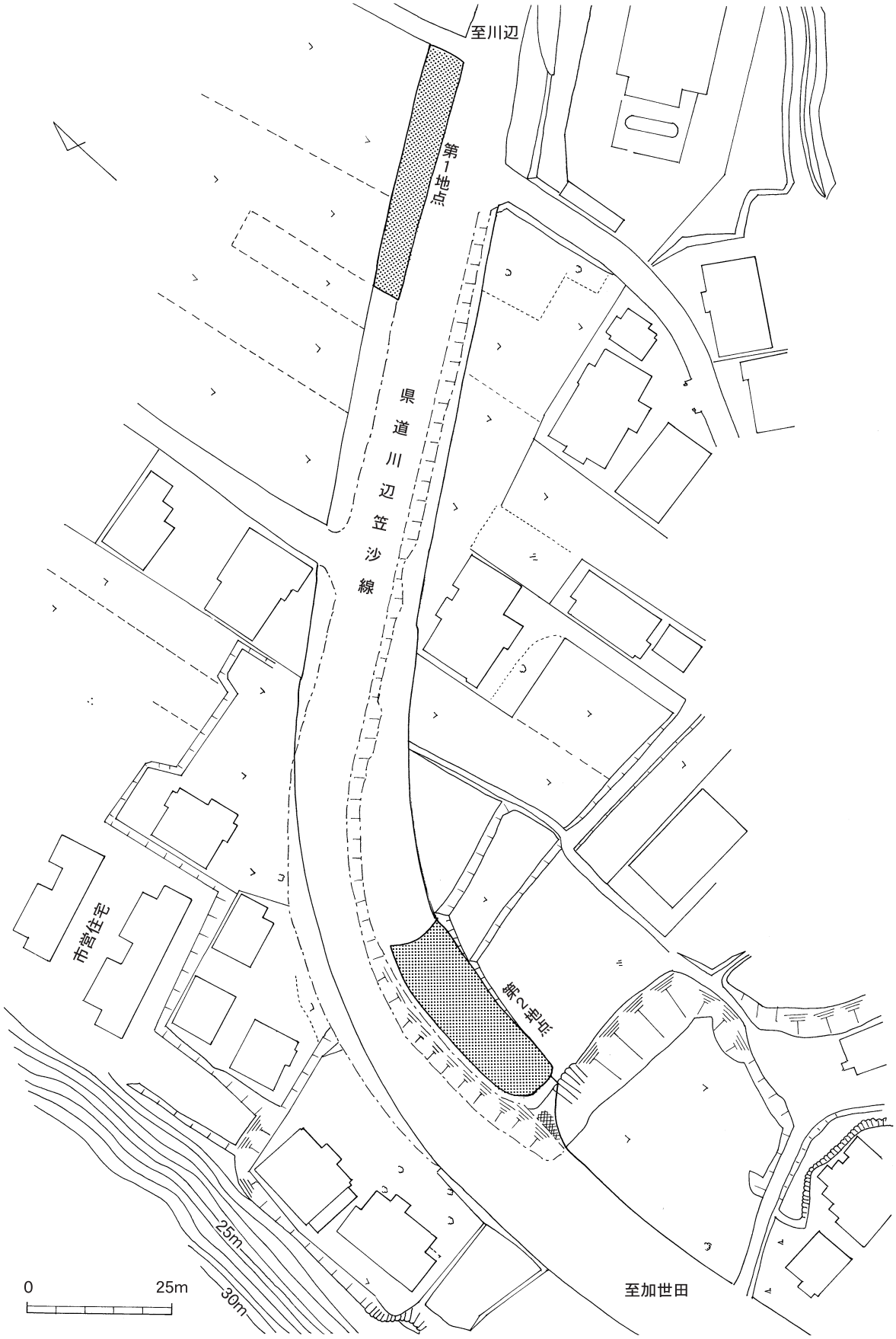


第３図　確認トレンチ配置図

第２節　第１地点の調査

第１地点は加治屋台地の中央付近に位置し，北へわずかに下降しているが，標高が約28.7ｍのほぼ平坦な地形にある。調査部分はすでに表層からⅢ層までの深さ50～130㎝ほどが工事によって削られており，一部を除き縄文時代前期以降の包含層はなくなっていた。

調査区は幅５～７ｍ，長さ40ｍの道路拡幅部約260㎡にあたる。調査は調査区と平行して任意に中心線をもうけ，10ｍごとに東から１・２・３区とし，道側（南側）をＡ区，その反対側をＢ区



第４図　調査区域図

とした。各区は１Ａ区・１Ｂ区などと呼称した。撹乱部をバックホーによって削り，その下，つまりⅢ層あるいはⅣ層から下を人力で掘り下げた。

Ⅲ層もほとんど下部しか残っていなかったため，遺物の出土は少なく，12点だけだった。

１　遺構

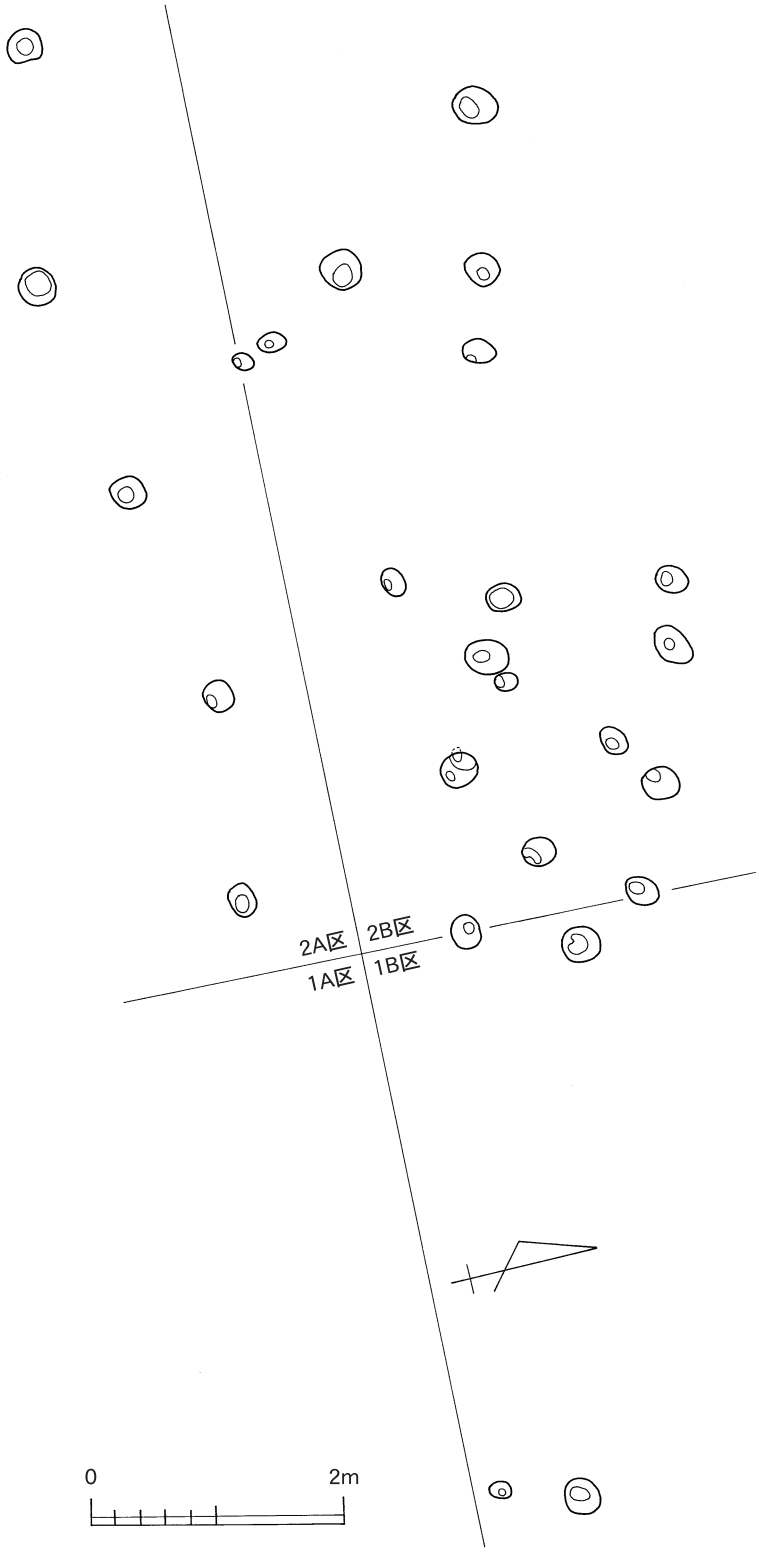
遺構は土坑１基と柱穴26が発見された。

⑴　土坑（第７図）

確認調査でトレンチにかかった土坑で，上面で幅が1.6ｍ，下面で幅が80㎝あった。淡い黒色土の下面から掘り込み，薩摩火山灰の粒子を多く含んだ淡黒褐色砂質土が単一にはいっている。床面は砂まじりのチョコ層である。残存規模は上部が1.5ｍ×0.2ｍ，下部が1.3ｍ×0.2ｍ，深さ0.6ｍとほぼ直に近く掘られており，底の隅はやや丸みをもつものの角ばっている。中に遺物は全く含まれていないため，はっきりした時期は不明だが，掘り込み面の高さから考えて縄文時代早期のものと思われる。性格等は不明である。

⑵　柱穴（第５図）

淡黒褐色土のはいった柱穴が１・２－Ａ・Ｂ区で26発見された。直径が13～30㎝，深さが20～50㎝あり，底が狭くなっているものが多い。建物としてまとまるものはなく，中から遺物の出土したものもない。時期・性格とも不明である。



第５図　第１地点検出の柱穴

2　遺物

表採資料を含めて42点の資料があり，うち土器は39点，石器が３点である。土器は縄文土器10点（うち早期２点，後期５点，晩期３点），成川式土器28点，土師器１点である。Ⅲ層から縄文時代後期・晩期，古墳時代の土器と石鏃が，Ⅳ層から縄文時代早期の土器・石皿・礫器が出土している。

⑴　土器（第７図１～５）

１・２は縄文時代早期の貝殻条痕文土器である。１は外面が横あるいは斜方向の貝殻条痕文，内面がていねいなナデ整形をして仕上げ，黄色っぽい淡茶褐色を呈している。２は外面が押引文風の貝殻条痕文，内面がていねいなナデ整形をして仕上げ，茶褐色を呈している。胎土はともにこまかい長石・白色石を多く含んでおり，ほかに茶色石などもある。２の焼成度は良い。

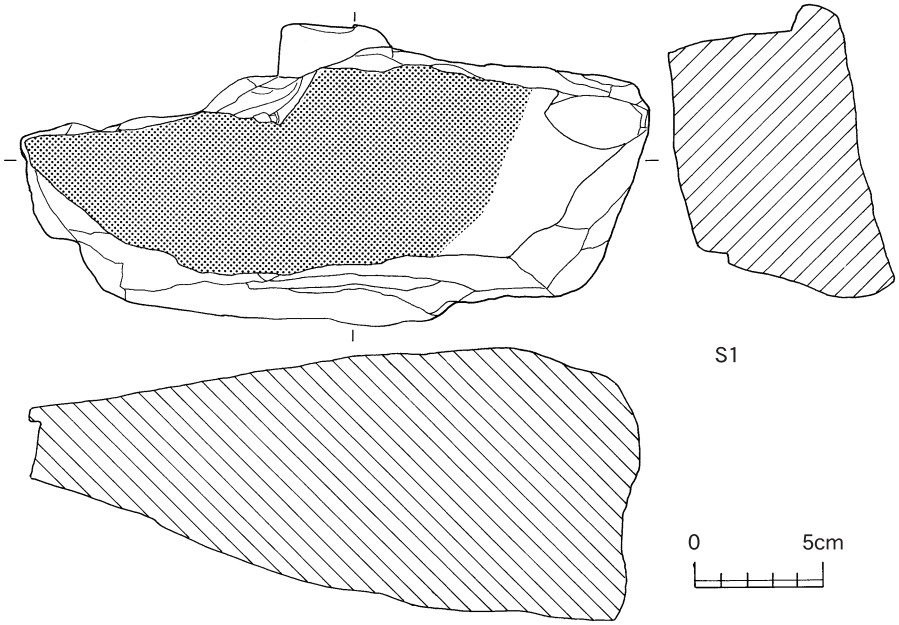
３・４は縄文時代後期の土器である。３は内外とも横方向の貝殻条痕文で仕上げており，黒褐色を呈している。４は内外ともていねいなナデ整形で，外に一条の沈線がみられる。淡茶褐色を呈している。ともにこまかい白色石・長石を多く含んだ砂質土を用いている。

５は成川式土器の甕形土器口縁部である。くの字状に外反するもので，口唇部はややくぼんだ矩形を呈している。内側はやや黒っぽいが，外側はやや赤みがかった淡茶褐色で，内外ともていねいなヘラナデ仕上げである。こまかい白色石・長石・石英などを含んだ砂質土を用いている。１・３・５が表採資料，２が１Ｂ区Ⅳ層，４が２Ｂ区Ⅲ層の出土である。１は前平式土器，２は吉田式土器である。他に縄文時代晩期の入佐式土器磨研土器もある。

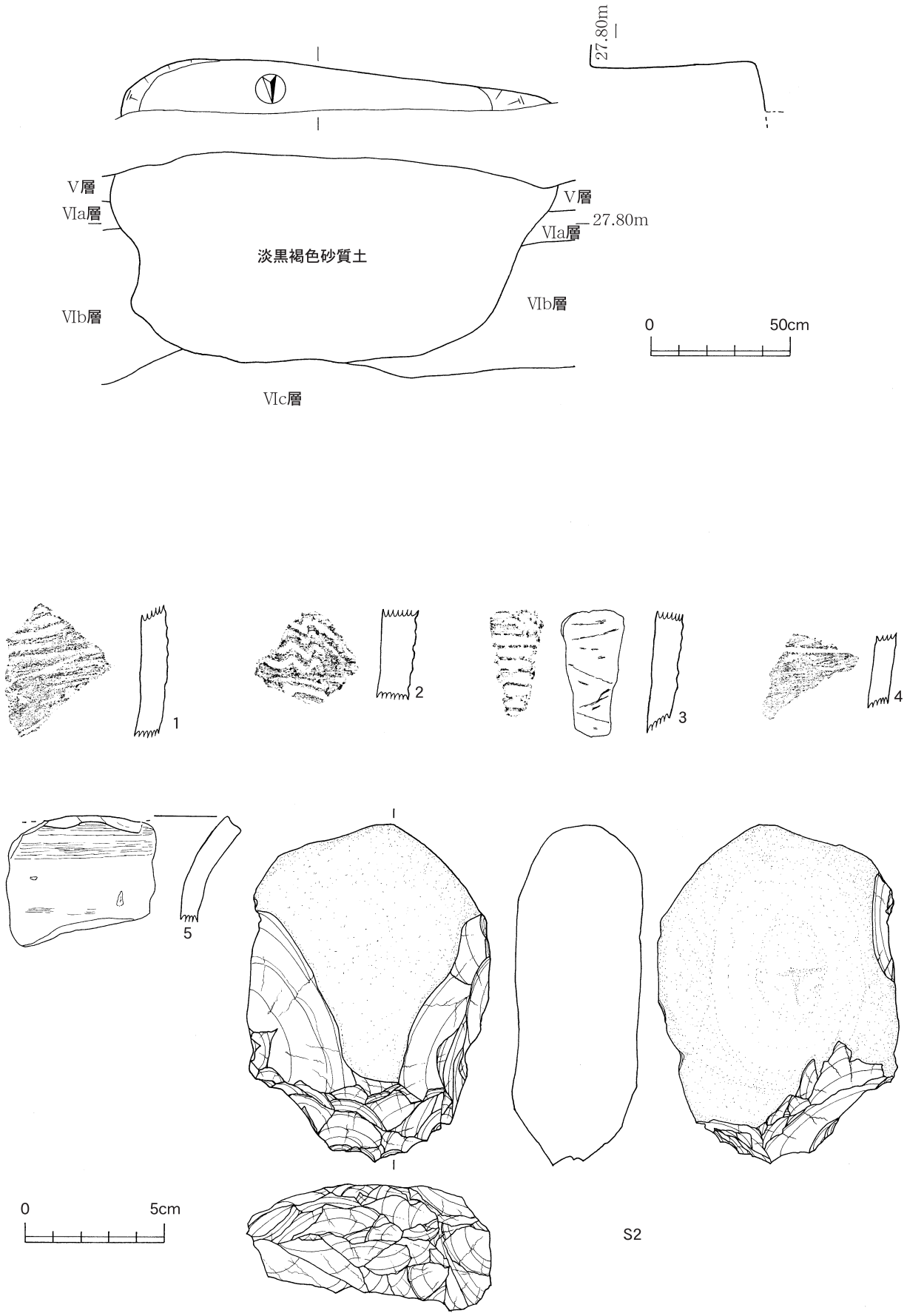
⑵　石器（第６図，第７図，第28図Ｓ３）

縄文時代のものと思われる打製石鏃・礫器・石皿が出土している。

Ｓ３は安山岩製の打製石鏃で，長さが2.7㎝，脚幅が1.5㎝，厚さが0.35㎝の浅い抉り入り長身鏃である。脚端は鈍角に曲がり，抉りの深さが0.25㎝である。３Ｂ区のⅢ層で出土したことから晩期のものと思われる。Ｓ１は砂岩製の石皿で，上面の中央部に平坦な使用痕がみられる。長さが25㎝，最大幅が12.2㎝，厚さが11.7㎝ある。２枚に剥離し，左部分及び下部が欠損している。２Ｂ区Ⅳ層で出土していることから早期のものと思われる。Ｓ２は安山岩製礫器である。中央付近が両面ともやや窪み，上端が平坦な河原石の両側辺及び短側辺の１辺を打ち欠いているが，使用痕は見られない。長さが11.8㎝，幅が9.5㎝，厚さが4.6㎝である。３Ａ区Ⅳ層で出土していることから早期のものと思われる。



第６図　第１地点出土の石皿



第７図　第１地点の土坑と遺物

第３節　第２地点の調査

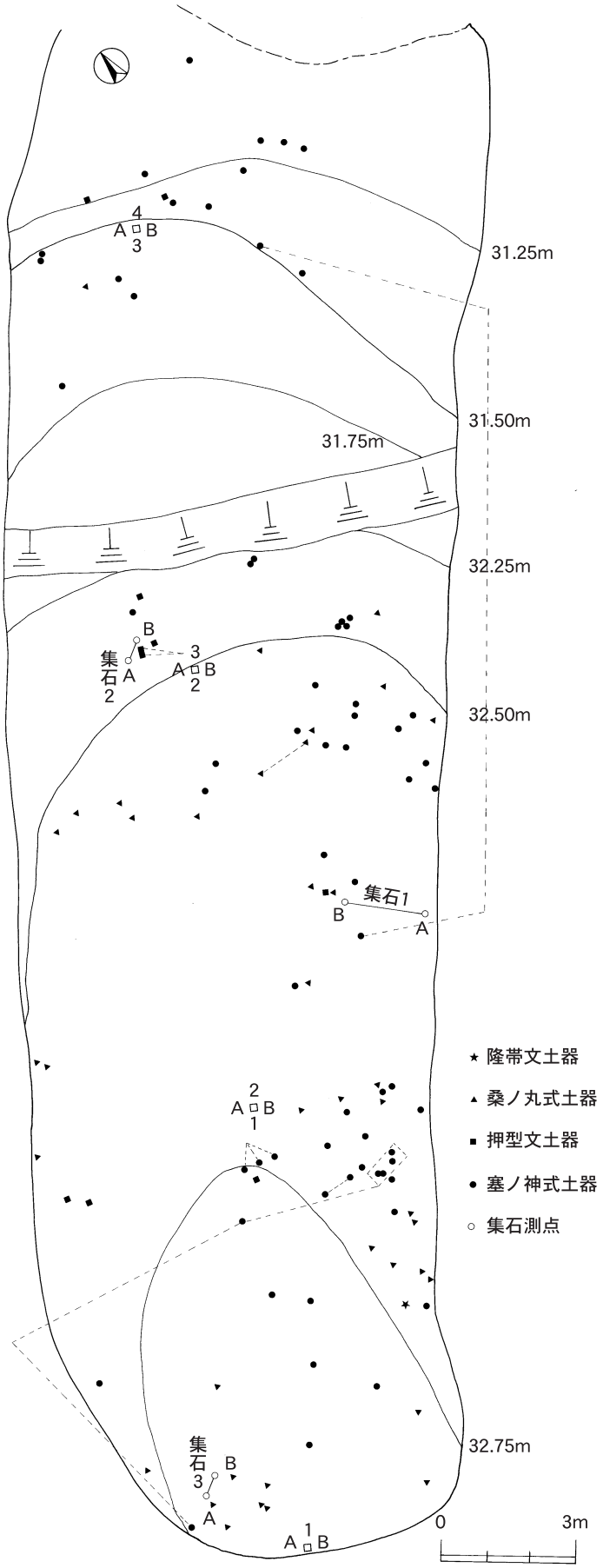
第２地点は加治屋台地の南側，つけ根の部分にあたり，そのなかでも西端に近い。標高は32～33ｍと高く，この部分の西側は土取りによって比高11ｍの絶壁となっており，北側も道路掘削によって比高6.5ｍの絶壁となっている。さらに東側も畑の開墾によって比高0.8ｍと断崖になっている。元来は南から北あるいは東へゆるやかにくだっていく地形にあり，西は大谷川によって開析され急崖になったものと思われる。調査区は西側がもっとも高く東へゆるやかに下っている。昭和53年に調査した地点は北側の眼下に見下ろす所にあたり，比高４ｍある。南側一帯は畑を挟んで家が建ち並んでおり，畑には土器片が散布している。このことから，この遺跡はさらに南へ広がっているものと思われるが，耕作や宅地造成によって，相当こわされている可能性がある。

第２地点も第１地点と同様，調査区に沿って任意に中心線をもうけ，10ｍごとに西から１・２・３・４区とし，道側（北側）をＡ区，その反対側をＢ区とした。表土はバックホーによって削り，Ⅲ層から下を人力で掘り下げた。西側・北側については安全上ぎりぎりまで掘ることができなかった。

１　縄文時代草創期（第10図６）

土器が１点出土している。

１Ｂ区Ⅳ層で出土した厚ぼったい隆帯文土器である。口縁部は内側が削り出しによって張り出しをもたしており，外側もやや張り出している。外側には口縁下部にも一条の貼付け突帯がみられる。これら３か所にはそれぞれ指頭



第８図　縄文時代早期の遺物分布図

あるいはヘラ（棒）状のもので深い押圧が施されている。外面には貼付け突帯から下に斜方向の貼付突帯があり，これにもヘラ状押圧が施されている。器形は外へやや開く形をしており，内面は口縁近くでやや外へ張り出している。外面はていねいなヘラナデ，内面はヘラ横ナデで仕上げている。外面は黄みがかった淡茶褐色を呈しており，内面は黒褐色を呈している。石英・黄白色石・長石・茶色石などの細石の多い土を用い，焼成度は普通である。

２　縄文時代早期

⑴　集石（第９図）

３基発見された。

①集石１号

２Ｂ区で発見された長さ150㎝，幅55㎝に散在して広がる集石である。円礫８点，角礫４点，剥片１点の13点から成り，安山岩や砂岩もあるが，頁岩が多い。小さい礫や大きい礫，平たい礫・分厚い礫などさまざまな形態をし，剥片を除き15ｇと軽いものもあるが，665ｇと重たいものもある。総重量3020ｇとなる。火を受けて赤くなったり，割れているものもある。ほぼ平坦に所在し，チョコ層に貼り付いたものもあることから早期のものと思われる。

②集石２号

３Ａ区で発見された40㎝四方の範囲に集中する集石で，22点の礫から成る。20㎝の深さに堆積しているが，明確な掘り込みは不明である。砂岩もあるが，安山岩・頁岩が多く，角礫がほとんどで火を受けて割れたものもある。20ｇしかない小さい礫もあるが，300ｇ以上の礫も８点あり，最重量は660ｇである。総重量4280ｇとなる。やや離れているが，近くに押型文土器があり，この時期のものと思われる。

③集石３号

１Ａ区で発見された８点だけから成る小さな集石で，１点だけが離れているが，他は20㎝四方に集中している。円礫もあるが，ほとんど安山岩角礫である。30ｇしかないものもあるが，100ｇ位のものが多く210ｇの重たいものもある。総重量750ｇで，ほぼ平坦に所在している。

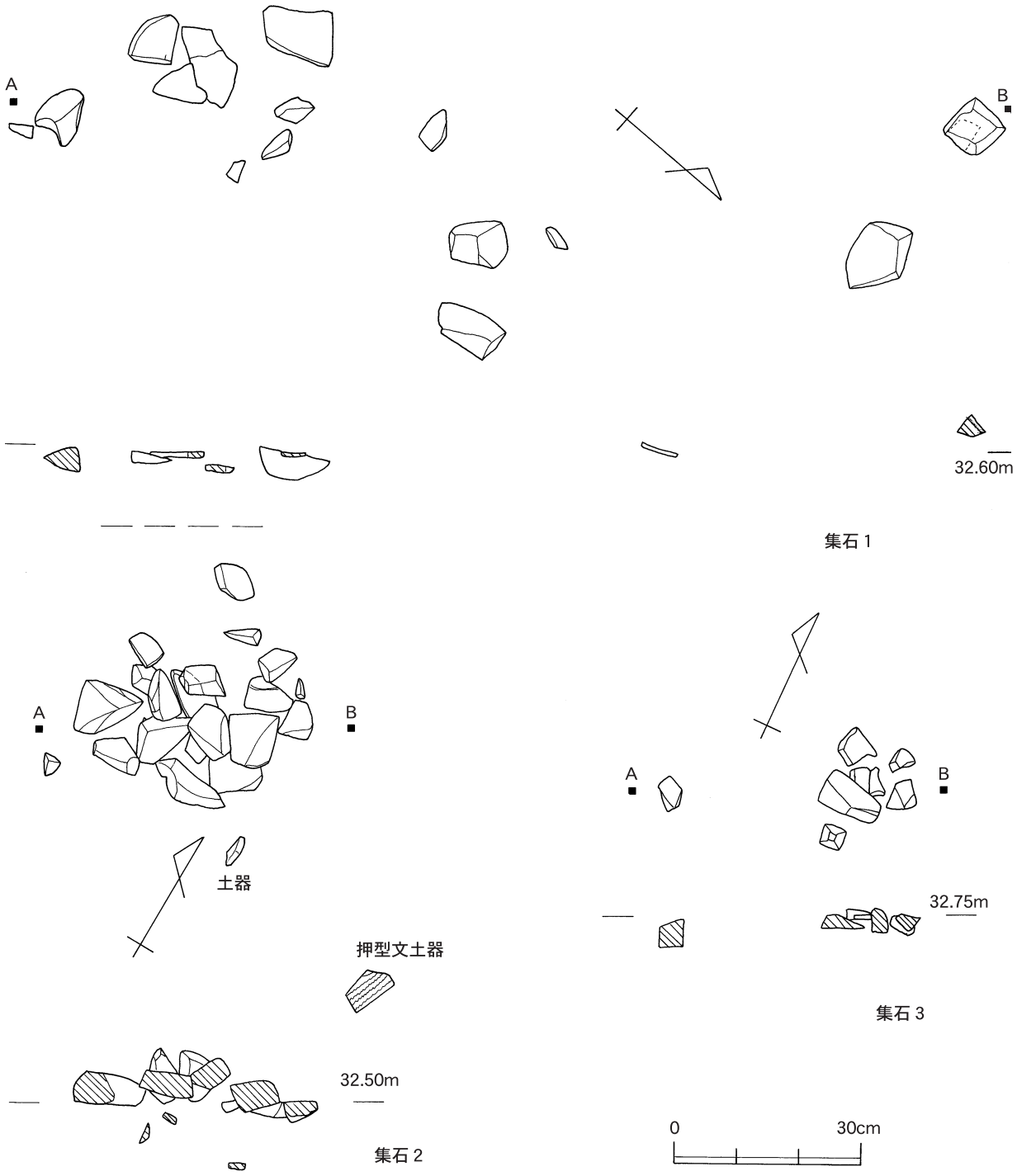
⑵　土器

土器は４種に分けられる。１類は桑ノ丸式土器，２類は押型文土器，３類は塞ノ神Ａ式土器である。

①１類（桑ノ丸式土器，第８図・第10図７～34）

外へ円筒状に開く器形で，外面に３～５条の二枚貝殻あるいはヘラ様のものによる平行短絡線によって綾杉状の文様を描くものである。

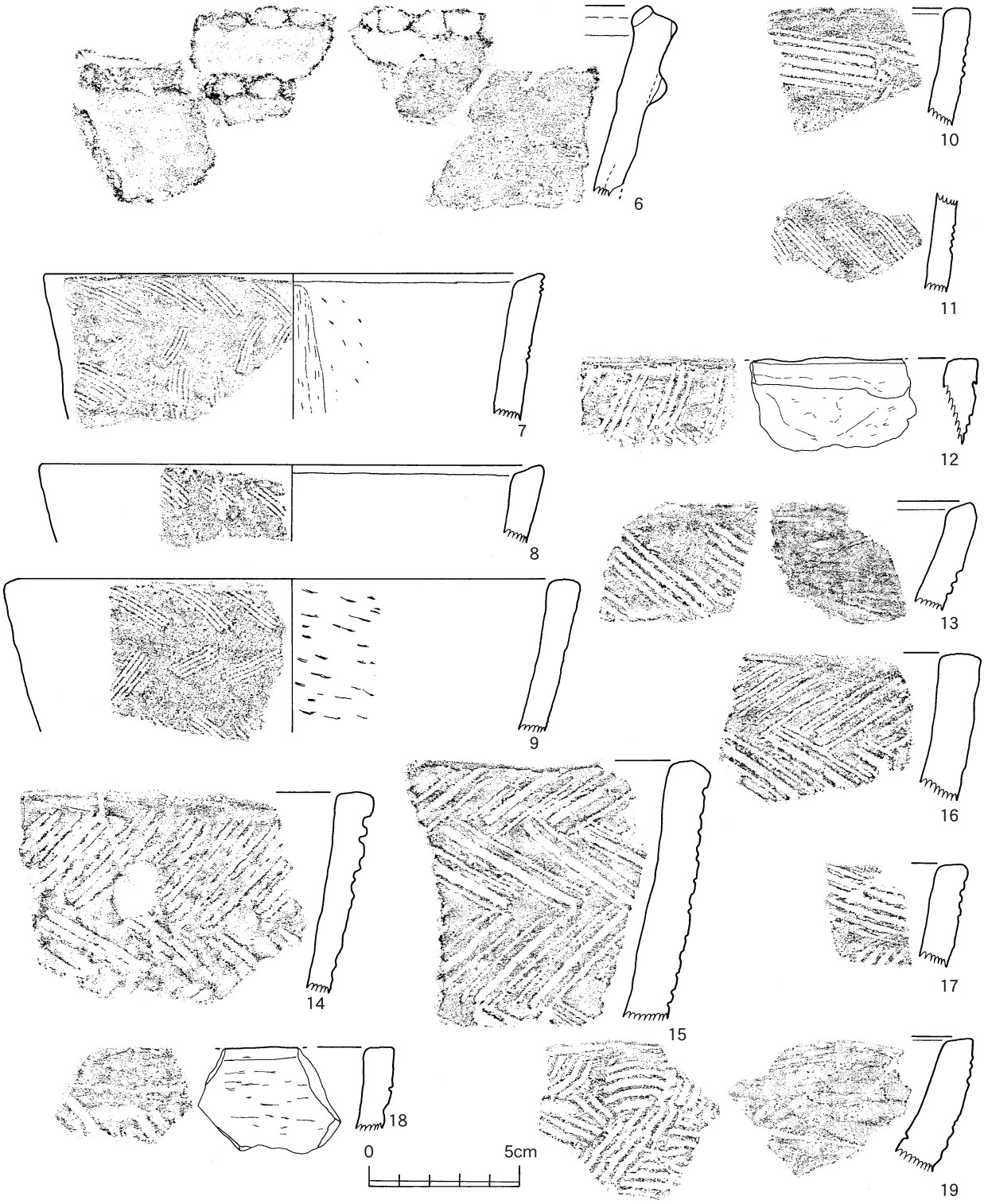
７～12はやや薄手の作りとなるもので，平行線文も細くやや浅いものである。焼成度は良く堅い。７は口縁直径16.5㎝で，やや外へ開く器形をし，口唇部は内側へやや下がる。外面は横ナデのあと３～４条の貝殻による浅い平行沈線ひっかき文によって綾杉文を描くが，その下は縦方向のものもある。内面はヘラケズリのようにみえるが，仕上げはヘラミガキに近い。茶褐色を呈す。９がよく似ているが，９の口縁直径は19㎝で，内面が横方向のヘラケズリである。10の外面は横ナデのあと左から右へのやや深い５条平行沈線文がある。内面はていねいな横ナデである。11は７に似た平行沈線文がある。12は３条の深い平行ヘラ沈線綾杉文であるが，内面は広く剥脱している。９と11・



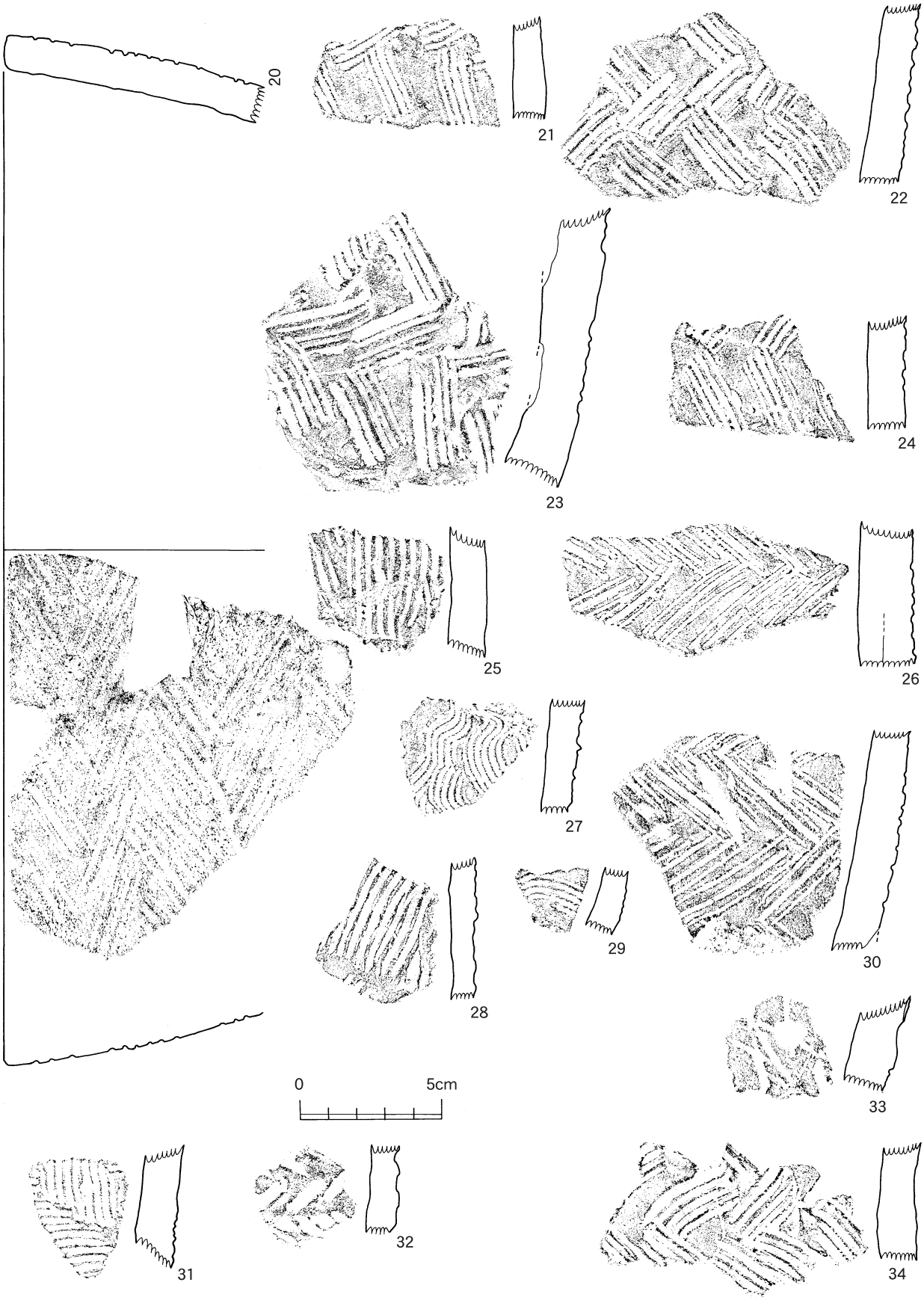
第 9 図　集　石

12 は外にススが付着している。口唇部はミガキに近いていねいな横ナデ仕上げである。13 ～ 17 はやや厚めの作りで，平行沈線文も深い。口縁端は丸みをもつもの，矩形となるものがあり，13 と 19 は内側がやや下がる。14 ～ 16 の外面は粗い文様である。14 の口縁近くには補修孔がみられる。ドリル状のもので主として外からうがっているが，内側からもうがっている。横ナデのあと深い 2 条の平行沈線で綾杉文を描く。15 も右端に穿孔がみられる。いずれも内面調整はていねいな横ナデである。

18 の外面はナデのあとヘラによる斜方向沈線がみられ、内面はていねいな横ナデである。19 の



第10図　縄文時代草創期の土器と早期の土器(1)



第 11 図　縄文時代早期の土器(2)

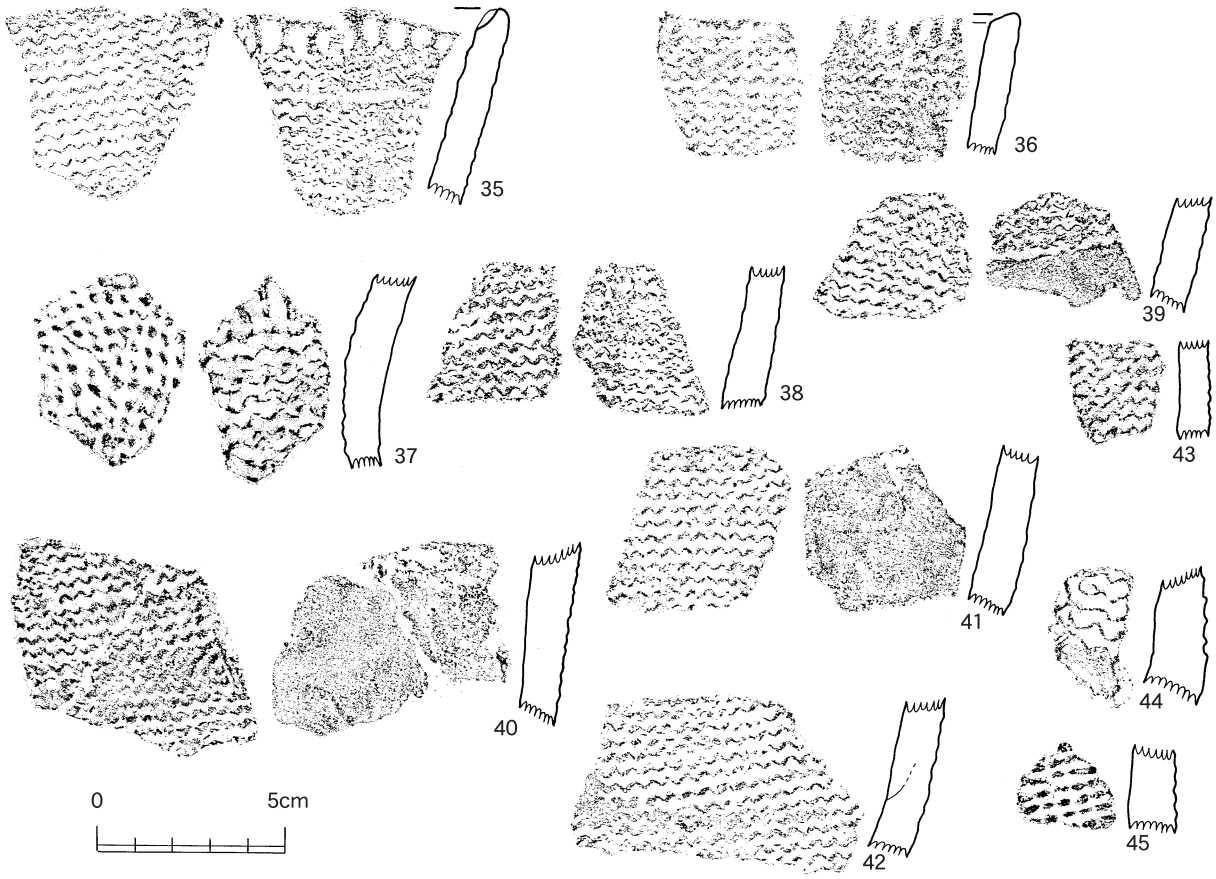
外面は４～５条の平行沈線で斜方向あるいは横方向・弧状に引いており，内面に１条の沈線がみられる。

20 は口縁直径 36.4 ㎝と大型の深鉢で，斜方向の平行ヘラ沈線によって綾杉文を描いている。内面は横ナデである。口縁端は矩形となる。白色石・石英・角閑石などのこまかい石を多く含む粗い土を用い，中には３～６㎜大のものも含まれる。焼成度が悪く表面がザラザラしている。

21 ～ 24 も同様にナデ調整のあと５条の平行沈線で綾杉文となるもので，厚い作りの 23 は内面に剥脱が目立つ。23 は７㎜大の小石も含む粗い土を用いている。

②２類（押型文土器 , 第 12 図 35 ～ 45 ）

外へまっすぐ開く器形で，外面全体と内面上半部に押型文の付される土器である。35・36 は口縁部で，端部は丸みをもち，36 はやや波状となる。内・外面とも口縁端部までこまかい山形押型文が付されており，内面上部はその上にヘラ押圧文が密に付される。35・36 がまっすぐ伸びているのに対し，37 は強く外反しており，外面には小さい楕円押型文，内面には粗い山形押型文が付され，内面上端付近は縦長ヘラ押圧文がみられる。38 ～ 41 も口縁近くの破片で，外面はいずれもこまかい山形文が，内面も 38・39・41 は山形文が付される。40 も内面上部に押型文が付されている。39 ～ 41 の内面調整はヘラによるていねいな横ナデである。42・43 の外面はこまかい山形押型文，内面はていねいなヘラナデで仕上げる。42 の外面は一部に押型文の上をナデている。42 の内面は横方向のナデで，積み上げの状況を残している。44・45 は分厚い作りで，外面は 44 がていねいなヘラナデのあと粗い山形押型文，45 がこまかい楕円押型文である。内面はともにヘラナデである。



第 12 図　縄文時代早期の土器(3)

これらの色調は内外それぞれ異なったものが多い。外面は35・38が黒褐色，36が灰褐色，37・40・43・44が淡茶褐色，39が白灰色，41・42・45が黄白色である。内面は35が白黄色・黒色，36・37が黄色っぽい淡茶褐色，38・41・45が黒褐色，39が白灰色，40・42・43が黄白色，44が暗灰褐色である。焼成度は37・38・41～44は良いが，他は普通である。胎土は長石が多く，他に石英・黄白色石・茶色石・雲母などのこまかい石を含んでいるが，時に４～５㎜大の小石も含まれている。

③３類（塞ノ神Ａ式土器，第13～16図46～74）

底部からやや外へ開きながらまっすぐ立ち上がり，頸部から外へ強く広がる器形である。二条の沈線の間に撚糸文があり，その周辺に刺突文のある文様を主体とする。46～50は口縁部に，二条沈線間に撚糸文のある文様帯のあるものである。46は口縁部直径29㎝，頸部直径22㎝の大きな破片である。口縁部はやや内反ぎみに立ち上がり，やや波状の口縁となる。口縁部の外面は鋸歯状の沈線間に撚糸文があり，沈線文の上下にはヘラか巻貝殻頂による刺突文が密に施される。その上には刺突文が横に１条あり，端部には細かい押圧文が外から施される。頸部には一条の沈線があり，その上下に刺突文が密に施される。胴部には２条の縦方向あるいはくの字状，又は逆くの字状の沈線があり，その間に撚糸文が施される。内面の上部は横方向ヘラナデ，下部は横方向のヘラケズリで仕上げている。焼成度は良く，明茶褐色を呈する。白色石・長石などの細かい石を用いているが，４㎜～６㎜大のものも時にみられる。47も同じような形をした口縁部で，文様も口縁下の沈線がないことを除けば同じである。胎土などもいっしょである。48は47と同一個体と思われる口縁端部で，外面には細かいヘラキザミがみられる。49は内面がまっすぐとなるもので細い作りとなる。下が鋸歯状となる２条の凹線の間に太めの撚糸文がある。50も内面がやや内弯する口縁で，外面は幅2.3㎝ある鋸歯状の沈線の間に撚糸文があり，沈線の外側にはヘラ刺突文がある。口唇部に短いヘラ押圧文があり，その下にヘラ刺突文がみられる。

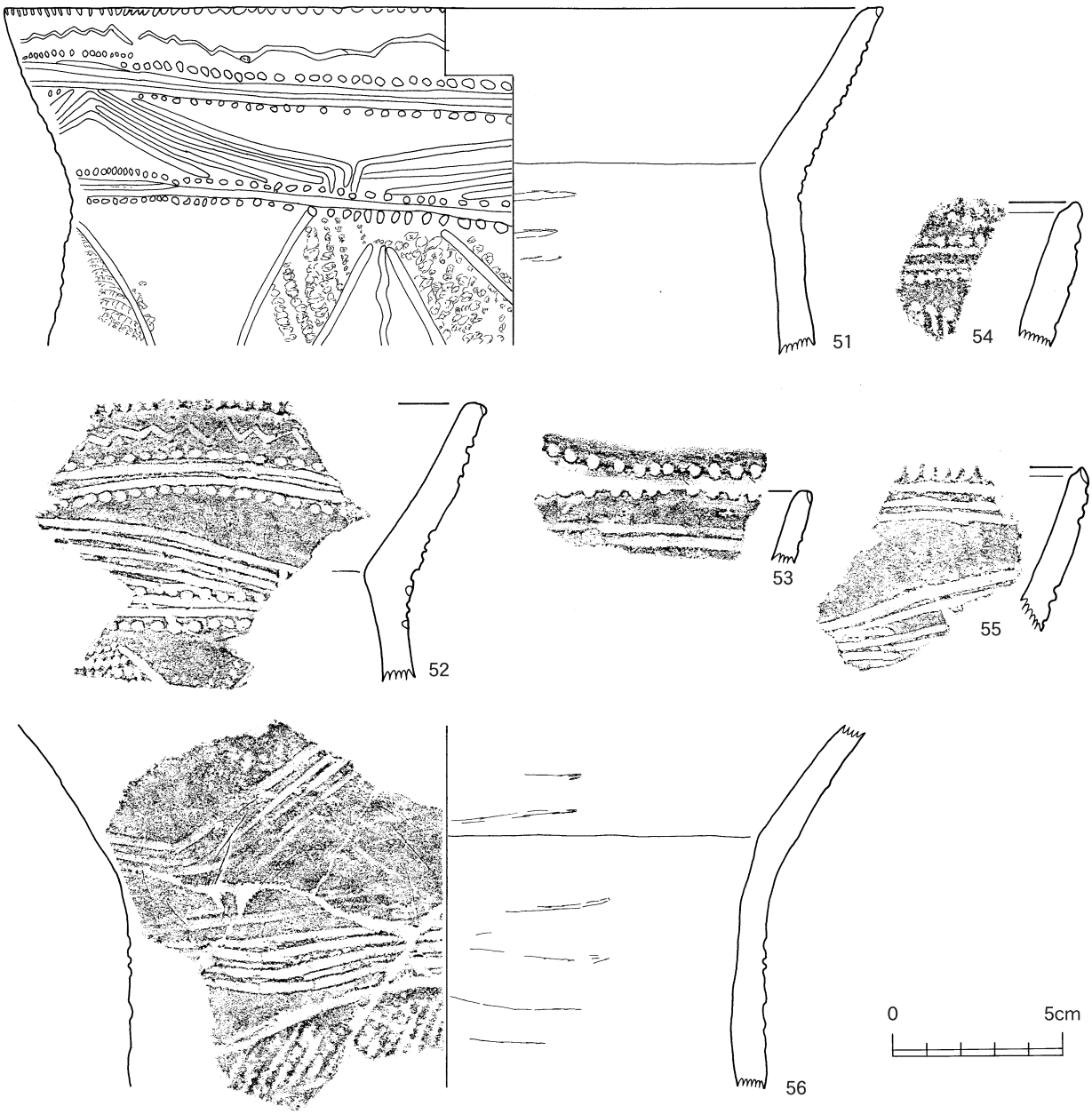
51～56は口縁部が刺突文と２～４条の沈線文からなる文様帯で構成されるもので，口縁端は外から細かいヘラ刺突文が施される。51は口縁直径が26㎝あり，口縁部は頸部からまっすぐ外へ開いている。外面は端部に細かいきざみがみられ，上からヘラによる鋸歯文，ヘラ刺突文，２条の沈線文，ヘラ刺突文，三角形の沈線文となる。三角形の沈線文は５条あり，端は頸部に向かい縦方向におりる。頸部は一条の沈線を挟んで上下に刺突文がみられる。胴部は二条の沈線間に挟まれた撚糸文を三角に配し，その間に縦方向のヘラによる波状文がみられる。内面はヘラ横ナデで仕上げ，口縁部は丁寧である。52の内面はやや内反し，外面は51とほぼ同様だが，沈線は上から２条，４条，２条となる。53は細い作りで，外面に２条の凹線がある。54の外面はまめつが目立つが，上からヘラ刻み，刺突文，２条の凹線，刺突文，その下に縦方向刻みとなる。内面端部はややくぼんでいる。55も口縁近くに横方向の３条凹線があり，その下に５条ほどの斜方向凹線がある。56は頸部直径が約19㎝あり，口縁部に鋸歯状となる４条の沈線がある。頸部に５条の波状凹線があり，胴部には凹線に挟まれた撚糸文がある。内面は横方向のヘラナデで仕上げている。57～59は同一個体と思われる波状となる口縁である。直径が22.8㎝あり，内面はややくぼんでおり，頸部内面は綾ができる。口縁端には２段の細かい刺突文があり，その下に11条ほどの平行凹線で鋸歯状文となる。その上端には細かい刺突文が施される。頸部には横方向凹線とその下に刺突文がある。

60～62は頸部である。60は内面が緩やかに曲がるもので胴部外面は頸部下に７条の横方向凹線，

第 13 図　縄文時代早期の土器(4)

さらに少し間隔を置いて３条以上の凹線がある。61 も頸部が緩やかに曲がるもので胴部はややふくらんでいる。頸部にはヘラ刺突文がみられ，胴部には鋸歯状となる２条の凹線間に撚糸文が２段にみられる。その間には鋸歯状の凹線文がある。62 は２条の凹線と，その下に刺突文がある。胴部には斜方向のヘラ凹線に挟まれた撚糸文がみられる。

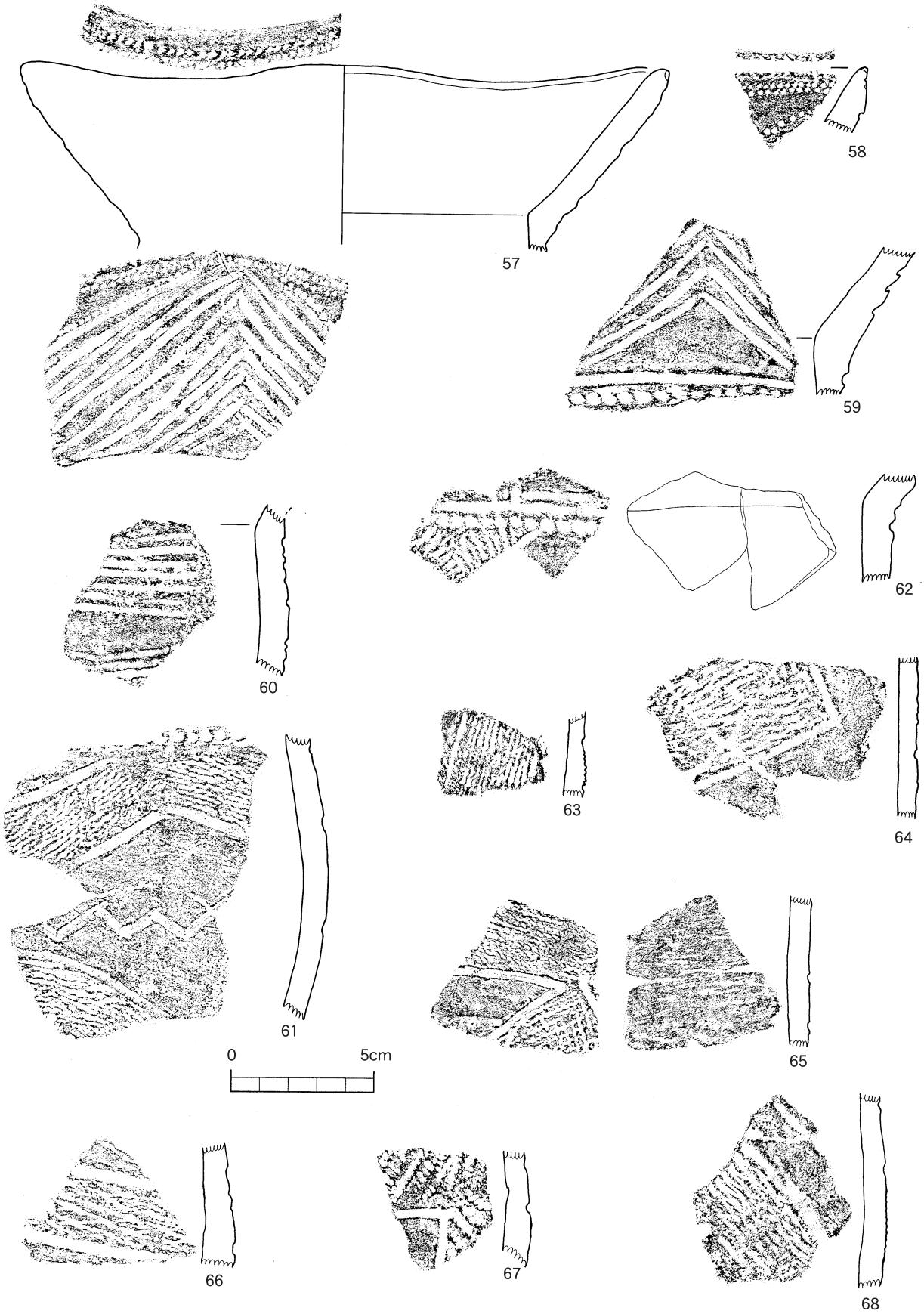
63 ～ 72 は胴部でいずれも直に近く立ち上がり，２条の沈線の間を撚糸文で埋めている。63・66・68 ～ 70 は沈線が斜方向に引かれるが，その間隔は 2.1 ㎝～ 2.8 ㎝ある。撚糸文がこの平行沈線よりはみ出ているものもあるが，69 でわかるように撚糸文のあと沈線が引かれているようである。撚糸文は沈線と平行に施されている。68・69・71 などは他の沈線と隣接している。64・65・67・70 は沈線が直角あるいは鋭角・鈍角に屈曲している部分で，67 は横線が縦線より先に引かれている。



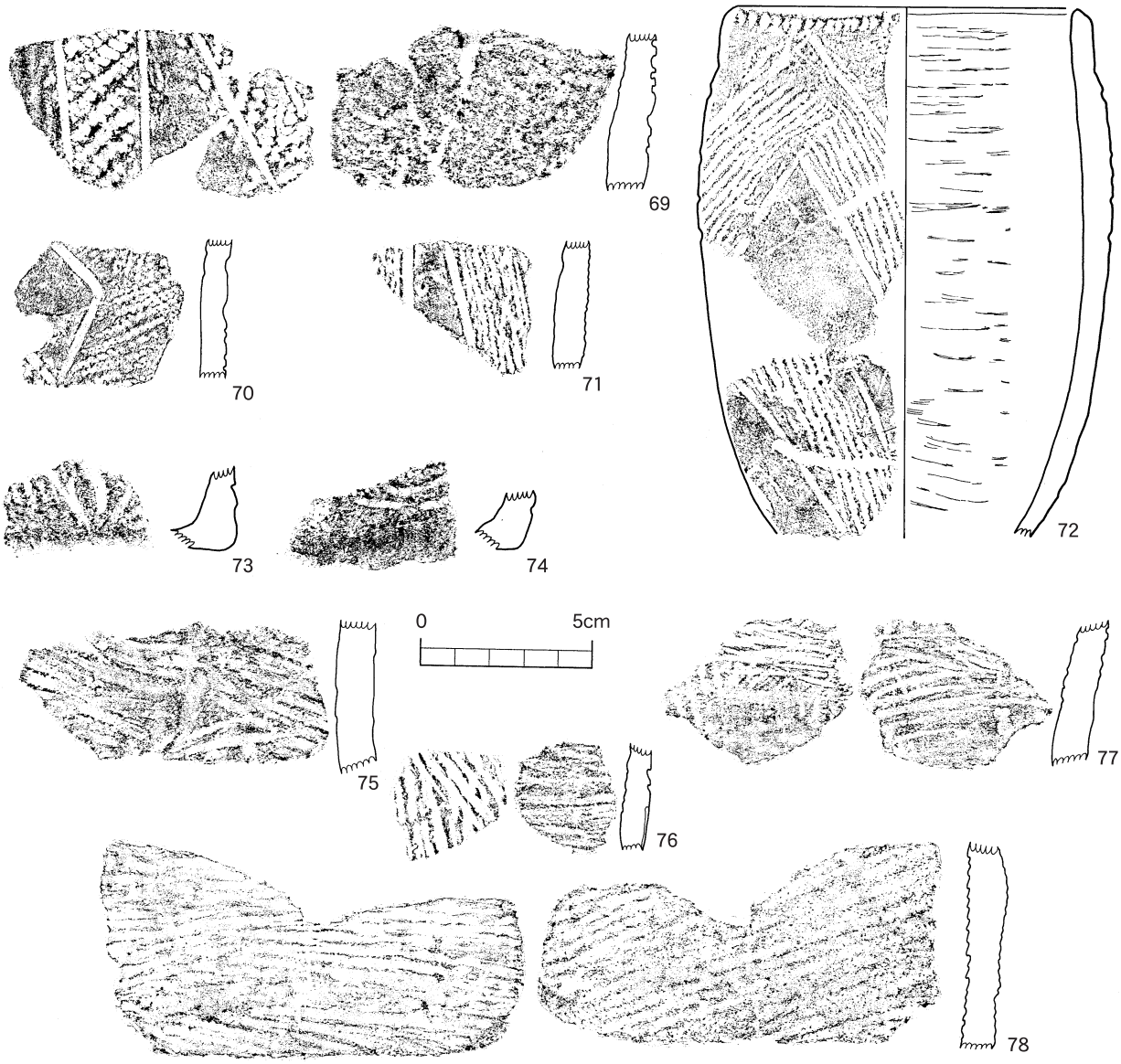
第 14 図　縄文時代早期の土器(5)

70 は無文部分が菱形となり，撚糸文は縦方向と横方向にある。外面・内面ともヘラナデであるが，64・68 ～ 70 の外面，68 の内面は丁寧である。逆に 63・65・69 ～ 71 の内面は粗い。

73・74 は平底である。端部が丸みをもっており，内外ともナデ調整である。73 は斜方向のヘラ沈線に挟まれた縄文が外面にある。これは三角状に交わっており，その間にも沈線が縦方向にみられる。74 も同じような文様が横方向にみられる。73 が淡茶褐色，74 が黄みがかった灰褐色を呈し，焼成度はともに普通である。角閃石・白色石・石英・雲母などのこまかい石を含む砂質土だが，74 には 7 ㎜大のものも含まれている。



第 15 図　縄文時代早期の土器(6)



第16図　縄文時代早期の土器(7)と前期の土器

3　縄文時代前期（第16図75～78）

条痕文土器が4点ある。いずれも胴部だが，77は底部近くである。

75の外面は横方向の貝殻条痕文で，内面はミガキに近いヘラによる丁寧な横ナデ調整である。76～78は内外とも貝殻条痕文で，76の外は縦方向，76の内と77・78の内外は横方向である。77の底近くは内外とも条痕のあとヘラナデで仕上げている。色調は淡茶褐色，茶がかった黄褐色をしているが，76の内面と78の外面は黒褐色である。焼成度は76・78がそれほど良くないが，75・77は良い。白色石・茶色石・黄白色石・長石・石英などの細かい石を含んだ土を用いているが，78には6㎜大のものもある。75は早期の可能性もある。

4　縄文時代後期

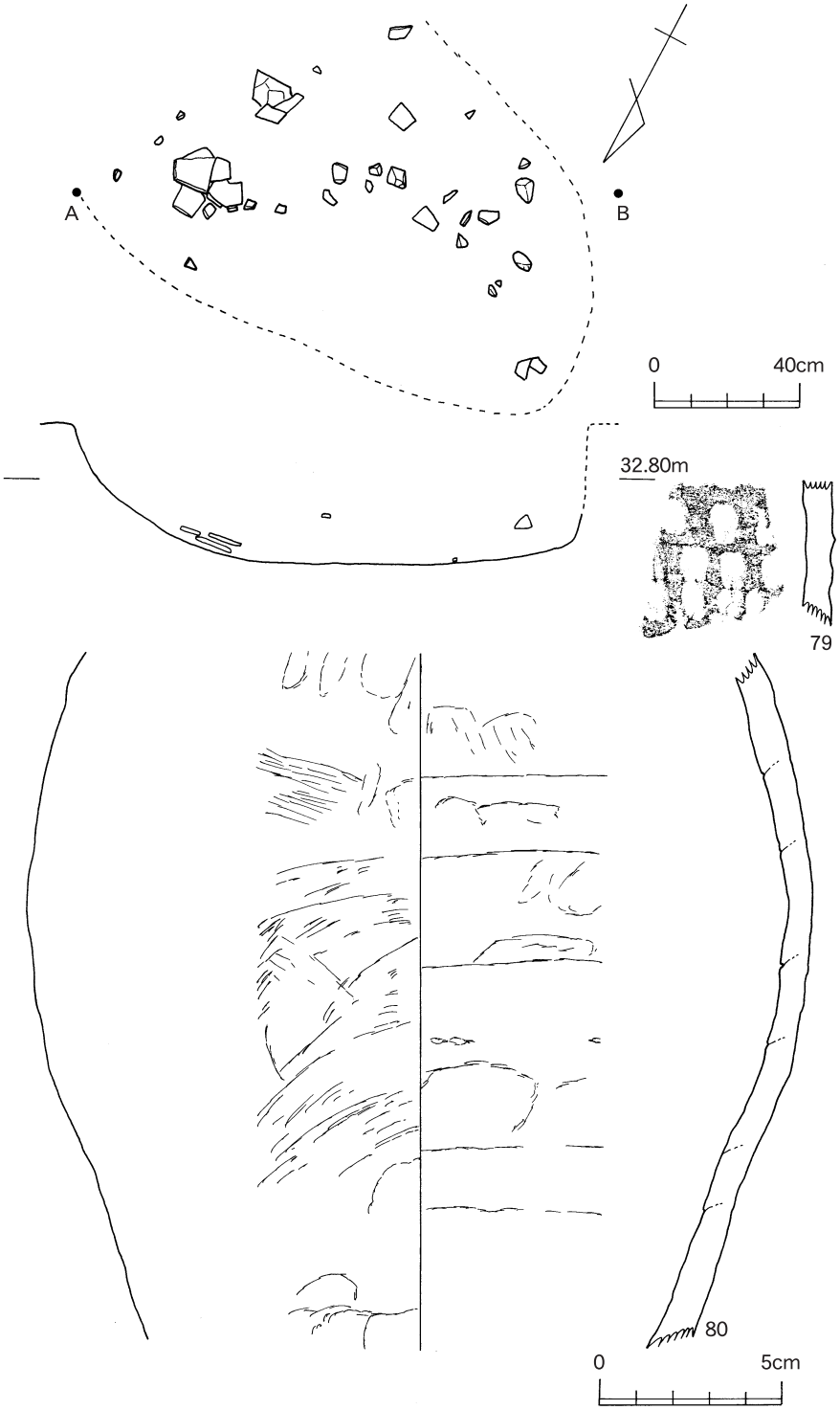
Ⅲ層で多量の土器や，石器，黒曜石などの剥片・チップが出土している。ほぼ全面に散布しているが，特に南側の１区に集中している。３区・４区あたりでは粗となっており，削平されている可能性もあるが，多くは南側からの流れ込みの可能性がある。１区より南のほうはシラス採取のため破壊されており，当時の中心部は破壊されているものと思われる。遺構として１Ｂ区で土坑１基が検出され，２Ａ区では１類の土器が１個体分つぶれて発見された。

⑴　遺構

①土坑（第17図）

Ⅲ層を掘り込んでいる断面が丸みをおびた逆台形となる土坑である。１Ｂ区で検出されたが，東側部分が用地外へ延びているため，全容は不明である。確認できた部分では長さ125㎝，幅100㎝の略楕円形を呈しており，残っている深さは40㎝である。

土坑内では多くの土器破片が出土したが，その中に口縁部と底部が欠損した大きな破片の深鉢土器（80）がある。頸部の直径が18.5㎝で，胴部の最大直径は21.5㎝である。胴部上半がややふくらんでおり，外面はヘラによる横あるいは斜方向のナデ整形である。内面には輪積み痕が残っており，ヘラによる縦方向のナデ仕上げである。淡茶褐色を呈し，焼成度は普通である。角閃石・白色石などのこまかい



第17図　縄文時代後期の土坑と出土土器

石を多く含む砂質土である。

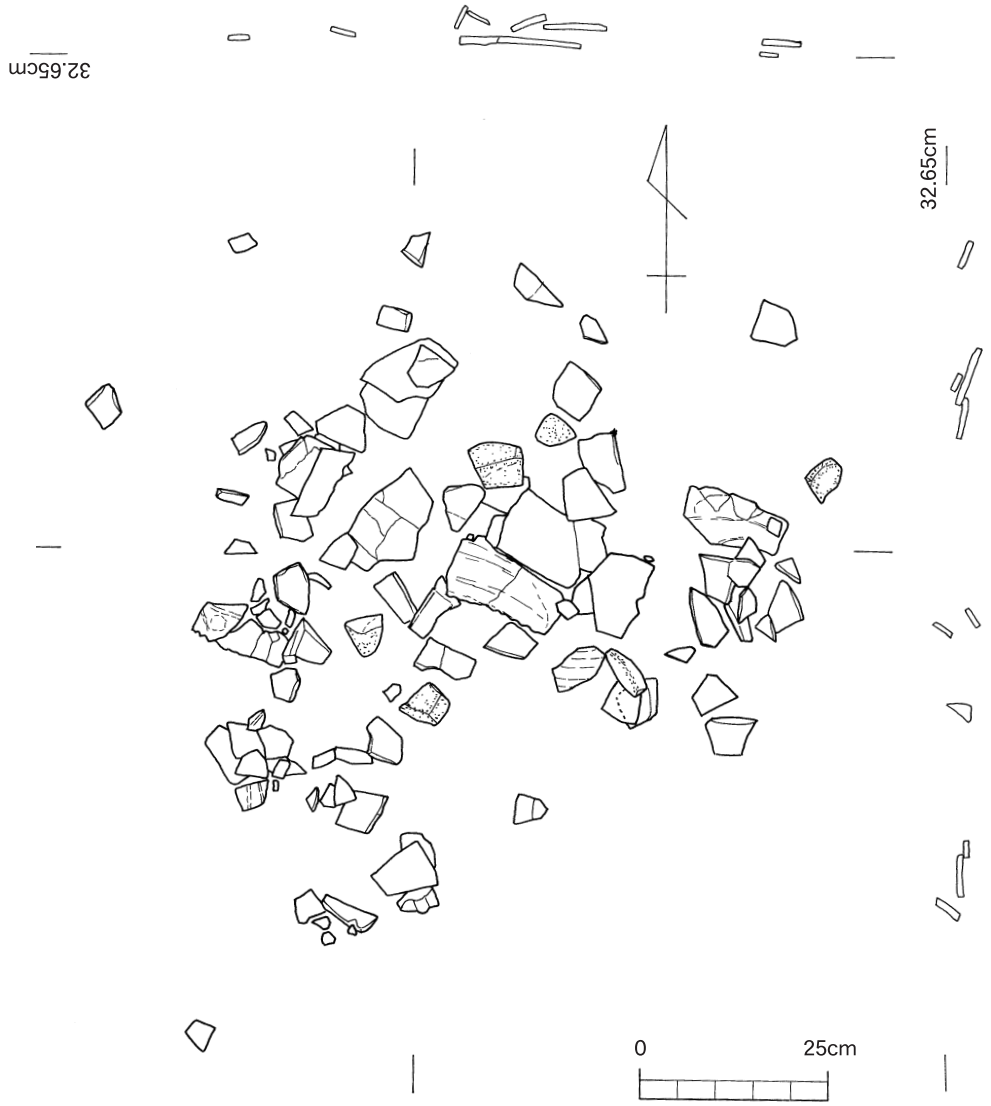
79は内外とも横方向のていねいなヘラナデで仕上げているが，外面には3段以上に指頭押圧痕が施されており，口縁部近くの破片と思われる。黄みがかった灰褐色を呈し，焼成度は普通である。角閃石・長石・石英などのこまかい石粒を多く含む砂質土を用いている。

土坑内からは以上2点のほかに，106・108・127・130・136・142などの土器破片も出土している。

②土器の集中（第18図・第19図）

2A区で同一個体が集中してつぶれている。90㎝四方の範囲に散らばっており，破片の数・状況から完形品だろうと思われるが，時間の都合で復元できなかったため，図上で復元した。土器の他に礫や剥片なども出土している。

81は口縁直径32㎝，推定高33㎝，底部直径12㎝である。外面は口縁近くがヘラによる粗い横方向ナデ，胴部から底部にかけてがヘラによる縦方向ナデで仕上げている。口縁部は幅5㎝ほどの肥厚帯となり，ここにヘラか指頭による凹線文や縦方向の短絡線文，押圧文などがみられる。口唇



第18図　縄文時代後期の土器集中状況

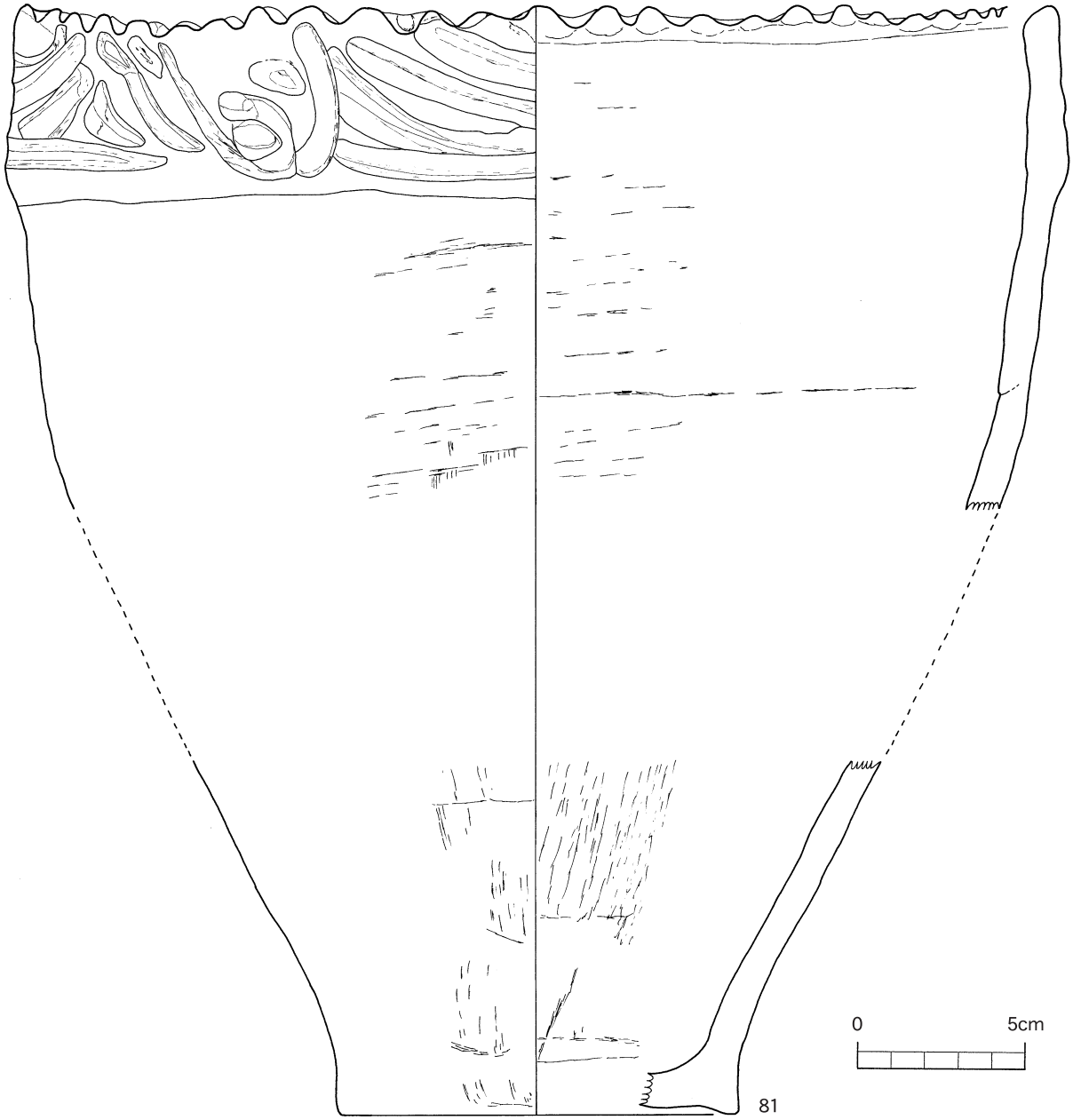
部にはヘラ押圧文が密に施される。内面はヘラによる横方向ナデ仕上げだが，底部近くは縦方向ナデもみられる。口縁端近くは段となる。底部はあげ底ぎみの平底で，端部はやや丸みをおびており，くびれて立ち上がっている。上部は黄色っぽい淡茶褐色，下部は茶褐色を呈し，焼成度は普通である。角閃石・白色石・石英などの小石を多く含む砂質土を用いているが，６㎜大の礫も含まれている。

⑵土器

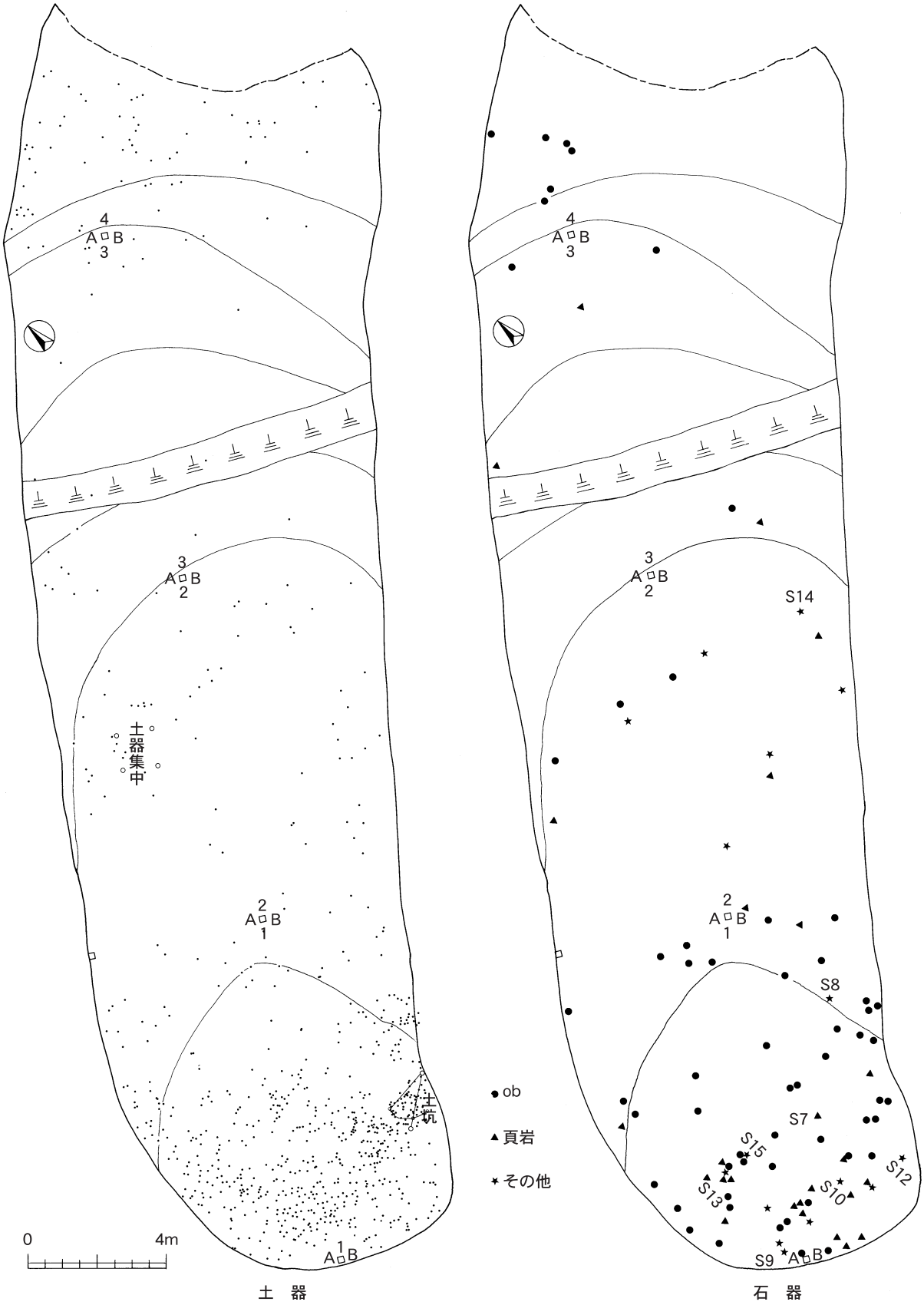
後期の土器は形態・施文などによって大きく４類に分けられる。

①Ⅰ類（第21図・第22図　82～109）

Ⅰ類は口縁部に幅広い文様帯があるもので，この部分にはヘラや指頭によって凹線あるいは押圧文などの文様が施されるが，無文のものもある。この部分が肥厚帯となるものもある。



第19図　縄文時代後期の土器(1)



第20図　縄文時代後期の土器・石器出土状況

82から87は文様帯に押圧文で区切られた凹線文があるものである。82は口縁直径30㎝でまっすぐ延びている。肥厚部には指頭による押圧文に挟まれて，波状・鋸歯状の凹線が施される。破損部に直径１㎝ほどの円形となる補修孔がみられる。外面は縦方向ヘラケズリ，内面はミガキに近いていねいなヘラナデで仕上げている。口唇部には指頭押圧文がみられる。83はくの字状凹線の間に２列の指頭押圧文がみられる。その下はヘラケズリがされ，内面はていねいなヘラナデで仕上げる。口唇部には指頭押圧文が施される。84は口唇部が矩形となり，ここにヘラ刻みが施される。外面は矩形凹線文と渦巻凹線文があり，その間に押圧文がある。内面はケズリに近い粗い横方向ヘラナデである。85は窪んだ部分に逆くの字状のヘラ凹線があり，その下は右下がりのヘラケズリである。口唇部は指頭圧文がみられる。86は横方向のヘラ凹線がみられ，その間に３列４段の縦長押圧文がみられる。口唇部には指頭押圧文がみられる。87は口唇部下に凹線があり，その下に縦長押圧文がみられる。

88～93は横方向凹線文を主体とする文様である。88・89は横方向あるいは斜方向のヘラ凹線である。90は肥厚帯が分厚く３条の凹線がみられる。肥厚部は分厚い貼付突帯となる。91は横方向あるいは三角形・弧状の凹線がみられ，口唇部には押圧文がみられる。92は分厚い肥厚部で，横方向凹線がみられる。93は横方向あるいは斜方向の凹線がみられ，その間に押圧文がみられる。口唇部には指頭圧痕がみられる。肥厚部の下はヘラケズリとなる。

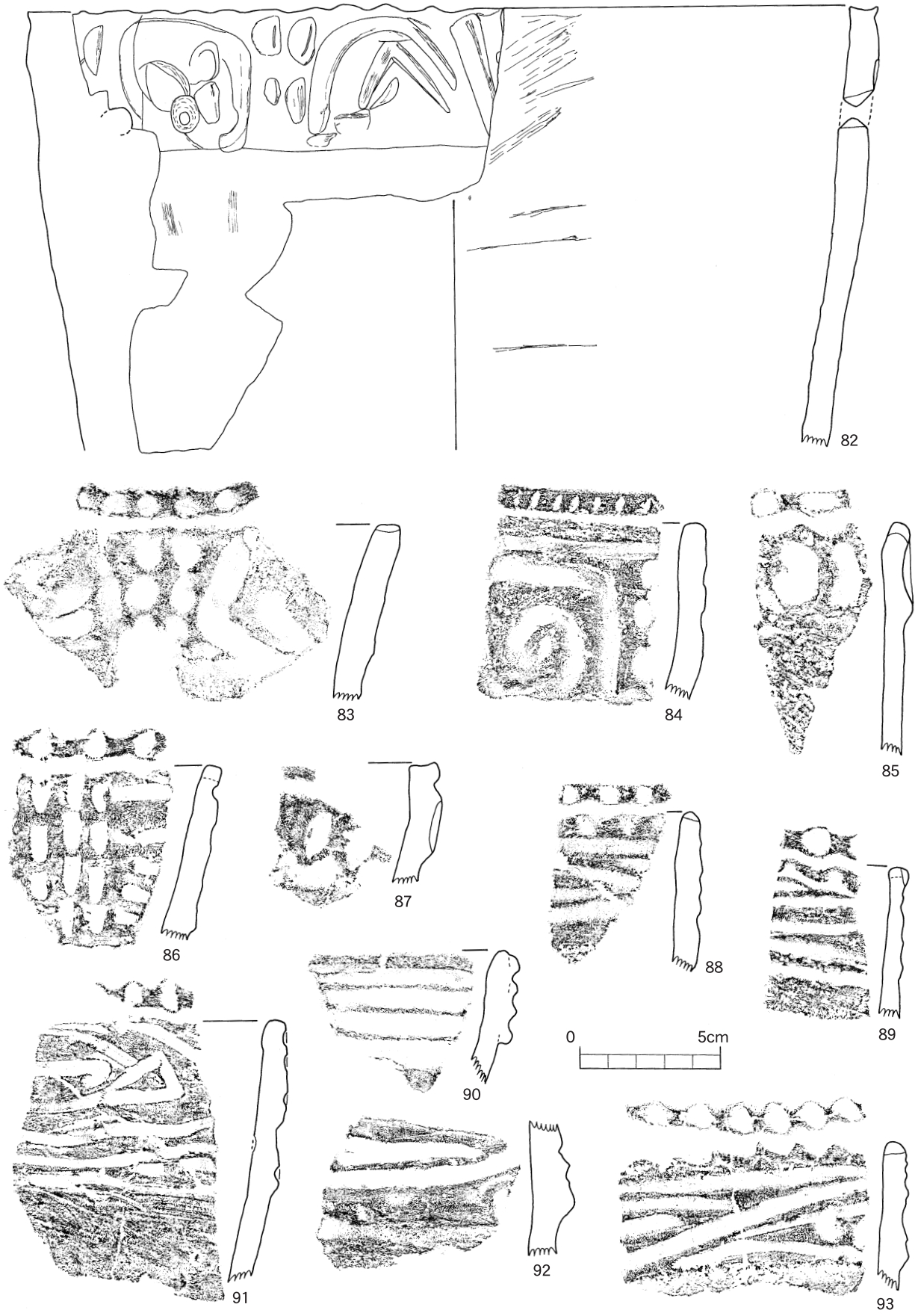
94～101は肥厚帯に押圧文を施すものである。94は口縁直径が22㎝あり，やや内反しながら口縁部へ向かうものである。７㎝幅の肥厚帯の下部は横方向のヘラナデで仕上げ，上部４㎝幅の部分に原則的に２段の指頭押圧文が密に施されているが，３段の部分もある。押圧文の下には沈線が巡り，2.5㎝～3.5㎝の積み上げ痕もみられる。口唇部には押圧文が密に施されている。95は口縁へまっすぐ延び、口唇部には指頭圧痕がみられる。外面に４段の指頭圧痕が施される。96～98は指先・ヘラなどによる縦長の押圧文が施される。96・97は２段，98は１段となり，97はその下にヘラ沈線がある。97・98は口唇部に指頭圧痕がみられる。96・98の外面は横方向ヘラナデで仕上げるが，97は縦方向のヘラケズリである。99は弧状となる浅いヘラ凹線がややくぼんだ部分に施される。口唇部には内外から交互にヘラ押圧がみられる。100は貼付けによって肥厚部を作り，そこに２段に指頭押圧が施されている。その下は横方向ヘラケズリで仕上げている。101は幅2.5㎝の肥厚帯にくの字あるいは逆くの字の凹線が交叉している。その下には横方向のヘラケズリが施される。口唇部には指頭押圧がみられる。

102～106は肥厚帯が無文となるものである。102～104は口唇部に指頭押圧がみられるものである。102は肥厚帯の下が横方向ヘラケズリである。103・104は広い凹線があり，段となる。105は貼付けによって幅広口縁をつくり，口唇部も貼付けによって波状を呈する。106は口唇部にねじり紐貼付けが施される。

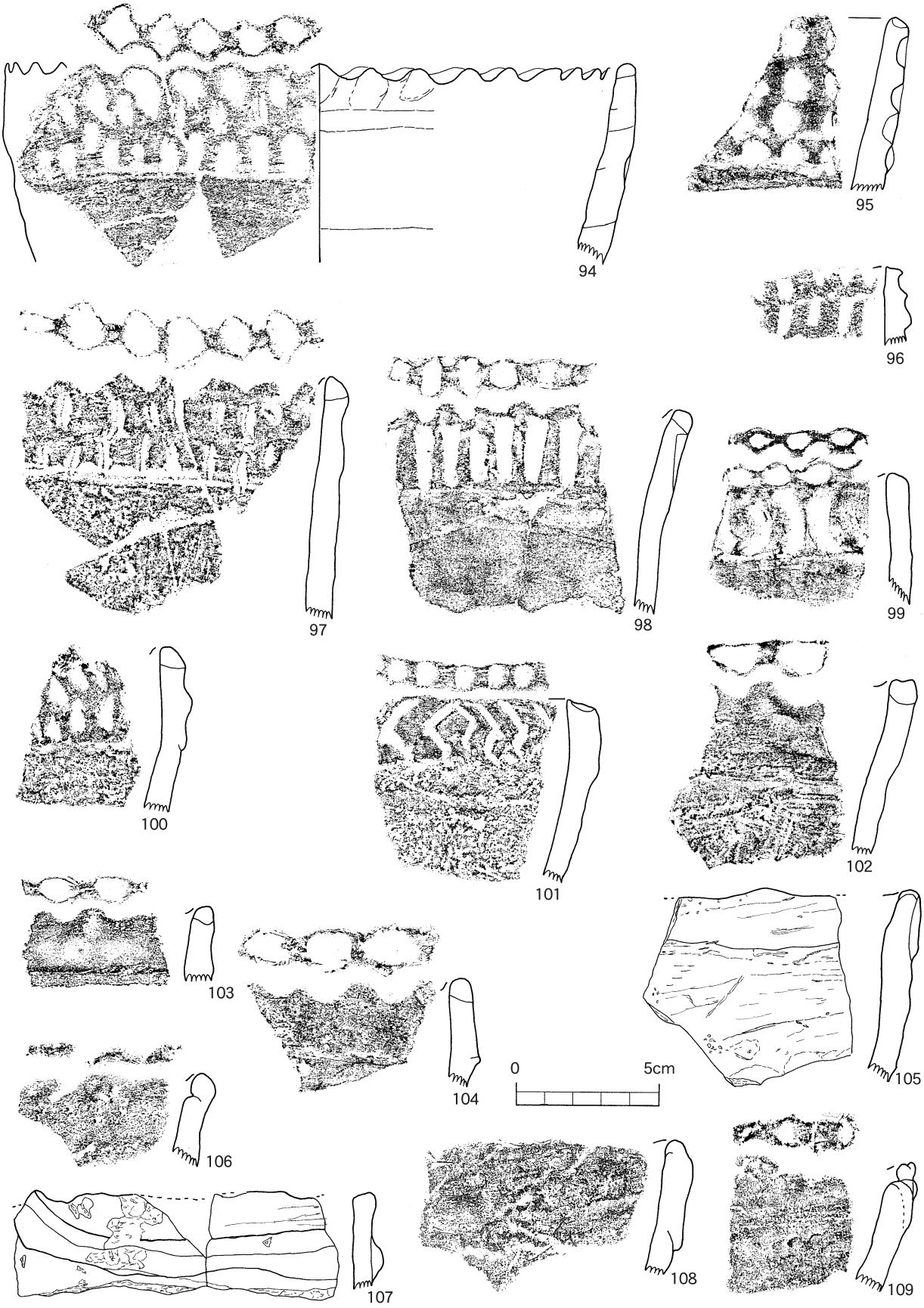
107は曲線化する貼付突帯が施されるもので，口唇部には指頭押圧がみられる。108も貼付けで肥厚帯をつくり，口唇部にはねじり紐が貼付けられる。109も上に次々と貼付けがみられ，こぶ状突起がみられる。口唇部には指頭押圧がみられる。

②Ⅱ類（第23図110～121）

Ⅱ類は外へ開きながらまっすぐ伸びる器形をし，口縁部に凹線や押圧文の文様が描かれている。



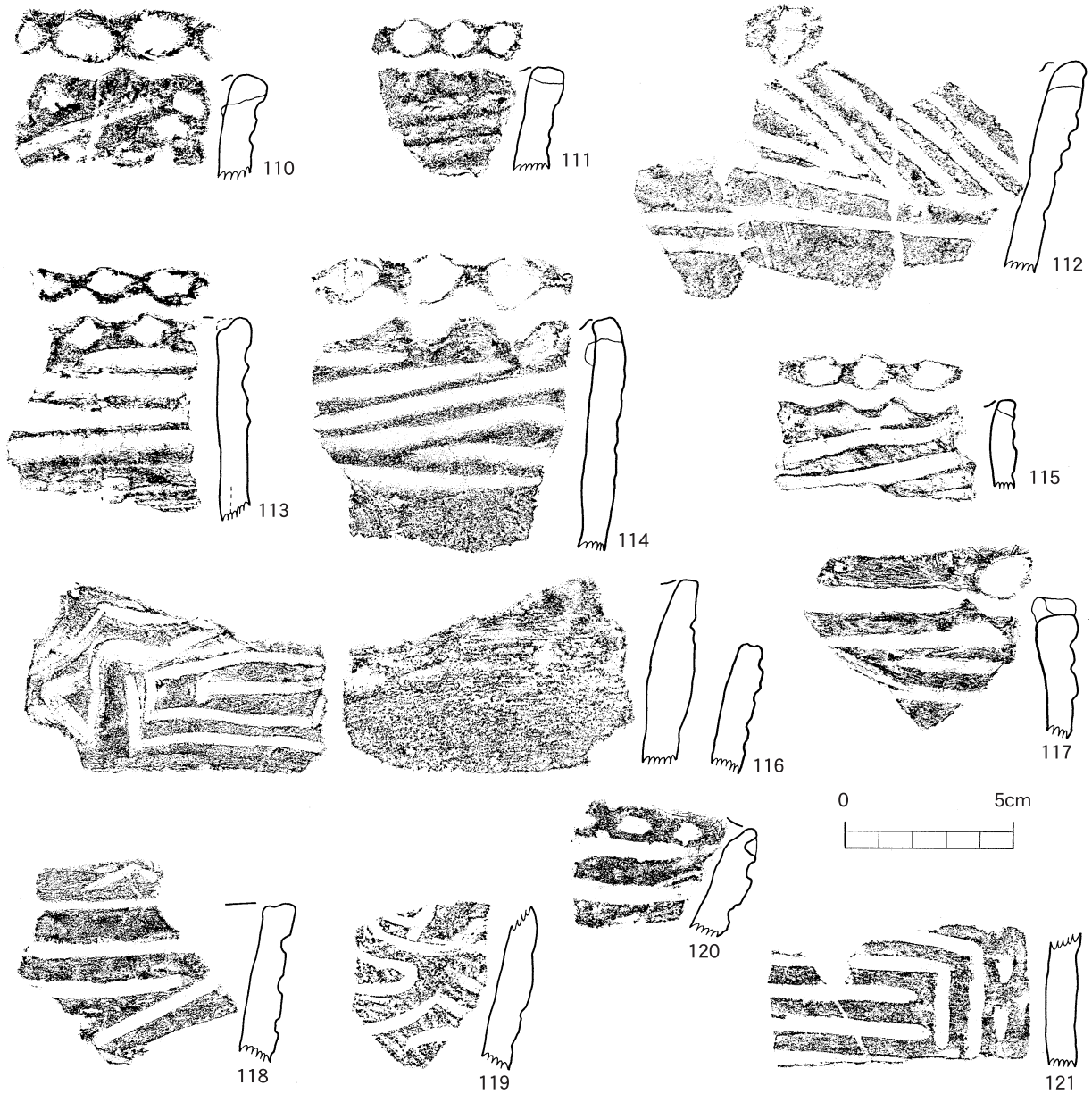
第 21 図　縄文時代後期の土器(2)



第 22 図　縄文時代後期の土器(3)

口唇部は分厚く，ここに指頭やヘラによる押圧文のあるものと，ヘラナデで仕上げるものとがある。

110～115は口唇部に押圧文があるものである。110は外面に斜方向の短絡線と押圧文とがみられる。111は横方向の凹線文がみられる。112は左から右への横凹線のあとに右下がり凹線のあるものである。113は口唇部押圧が内側と外側から交互に施されるもので，外面は口縁部に４条の凹線があり，その下は横方向ヘラケズリで仕上げている。114は口唇部に強いヘラ押しがあり，６条ほどの横線，斜線がある。115は薄い作りで，横方向のヘラ凹線がされる。116は波状となる口縁で，外面に矩形や波状などの文様が施されている。117は波頂部に指頭圧痕のあるこぶがあるもので，外面には横あるいは斜方向の凹線がある。118は口唇部に山形沈線のあるもので，外面は横あるいは斜方向の凹線文がある。120は波状となる口縁部で，口縁下に押圧文が，その下に横方向の凹線がある。 119と121は口縁近くの破片で，119はヘラによる弧状の凹線が，121は矩形文様と押圧文とがみられる。



第23図　縄文時代後期の土器(4)

③Ⅲ類（第24図　122～135）

Ⅲ類もⅡ類と同じく外へまっすぐ伸びる口縁で，ここに凹線文があるが，この部分がやや薄いものである。口唇部にはヘラ押圧文がみられる。

122は口縁直径31.5㎝と大きい深鉢で，口唇部は内外に張り出す。口縁部が内弯し，肩部は突出している。口縁部と肩部の間は鳥形の凹線文と縦長の押圧文，横方向の凹線文がみられる。外面は横方向の粗いヘラナデ，内面は縦方向のヘラナデで仕上げている。123は口唇部にヘラ押圧文のあるもので，口縁外面には横方向凹線と，矩形文様がみられる。124は粘土積上げによる突起がある口縁で，突起部にはくの字と逆くの字の指頭圧痕がみられる。外面には横方向，Ｌ字あるいは縦方向の凹線が施されている。125は口唇部に浅い押圧文があり，外面は横方向あるいはＬ字状の凹線が施される。126も口唇部にヘラによる深い押圧文があり，外面は矩形あるいは横方向の凹線がある。127は口縁端が太くなっており，外面は矩形凹線がみられる。128も分厚い口縁端となるもので，外面には三角文あるいは縦方向の凹線が施され，下部に円形の貼付け文がみられる。129は横あるいは縦，斜方向，Ｌ字状の凹線が施されている。130は波状の口縁となり，外には横方向あるいは弧状の凹線文，内側には三条の平行凹線が施されている。131は外の口縁端が肥厚し，その下は横方向のヘラケズリが施されている。132は分厚い口縁で，横方向凹線と円文がみられる。133も太めの口縁で外面に横方向の凹線がみられる。134の口唇部には一部に押圧文がみられ，外に横方向の凹線がみられる。135は口縁直径18㎝の内弯する浅鉢で，２個１対の突出部が４か所にみられる。肥厚帯の上部には２段，下部には１段のヘラ刺突文があり，その間にＸ字状，半月状，円状，横方向の凹線文がみられ，円状凹線文のひとつにはその中にヘラ刺突文がみられる。ひとつの割れ目には両側に直径１㎝ほどの補修孔がみられる。

④Ⅳ類（第25図　136～139）

Ⅳ類は内弯する口縁部をもつ深鉢で，口唇部には指頭あるいはヘラによる押圧文がみられる。

136は口縁部の直径が22㎝あり，外面は粗いヘラナデで仕上げている。138の口唇部押圧は連続せず３列ほどの押圧がくり返されているようである。139はやや直線がかっている。

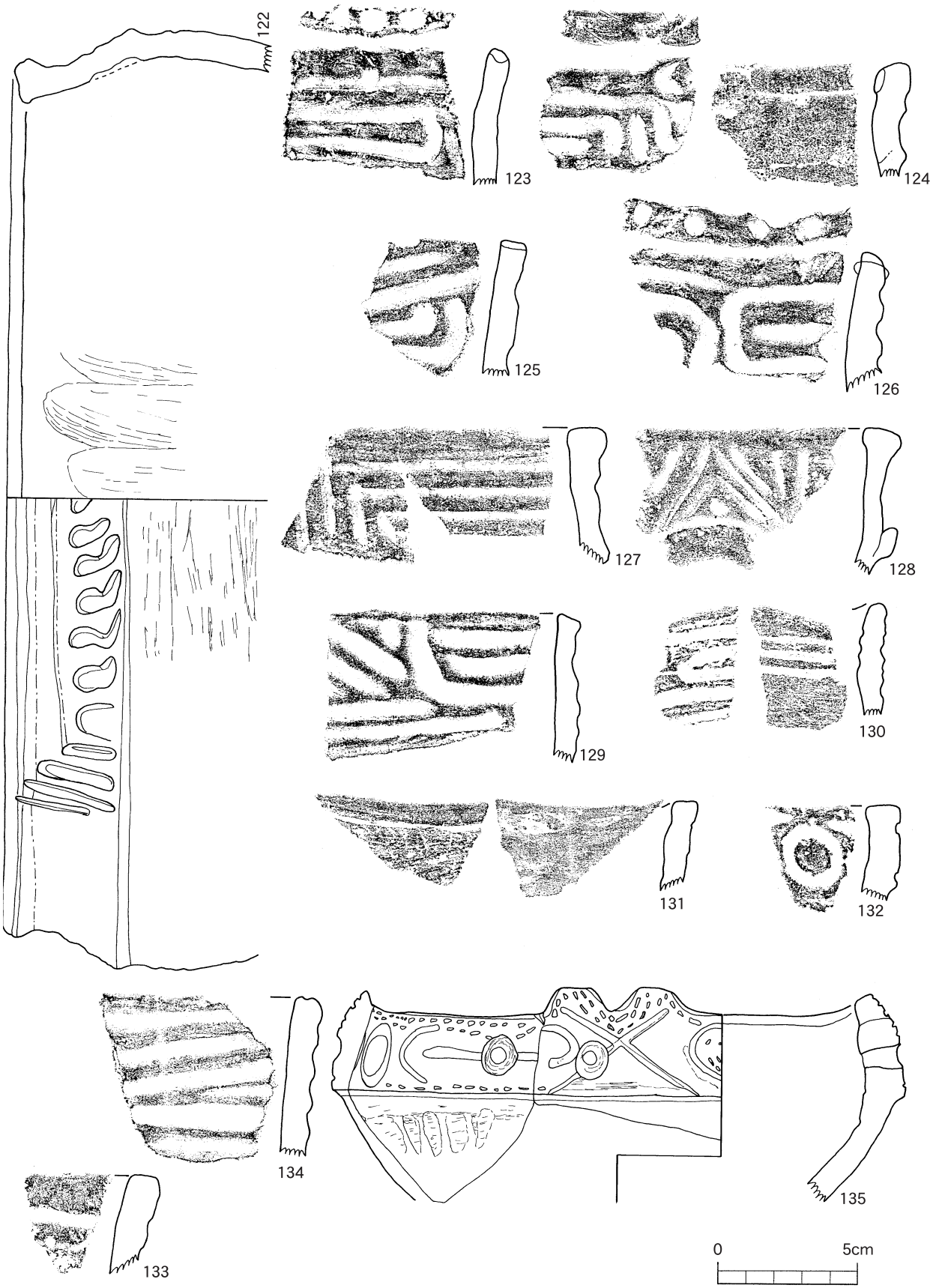
⑤その他（第25図　140～145）

以上の４種類にはいらない器形・器種のものをまとめた。

140は直口する無文の土器である。外面は横方向のヘラケズリであるが，部分的にはていねいなヘラナデもみられ，内面は横方向のヘラナデで仕上げている。分厚い作りで，口唇部にはヘラによる深い押圧文がみられる。

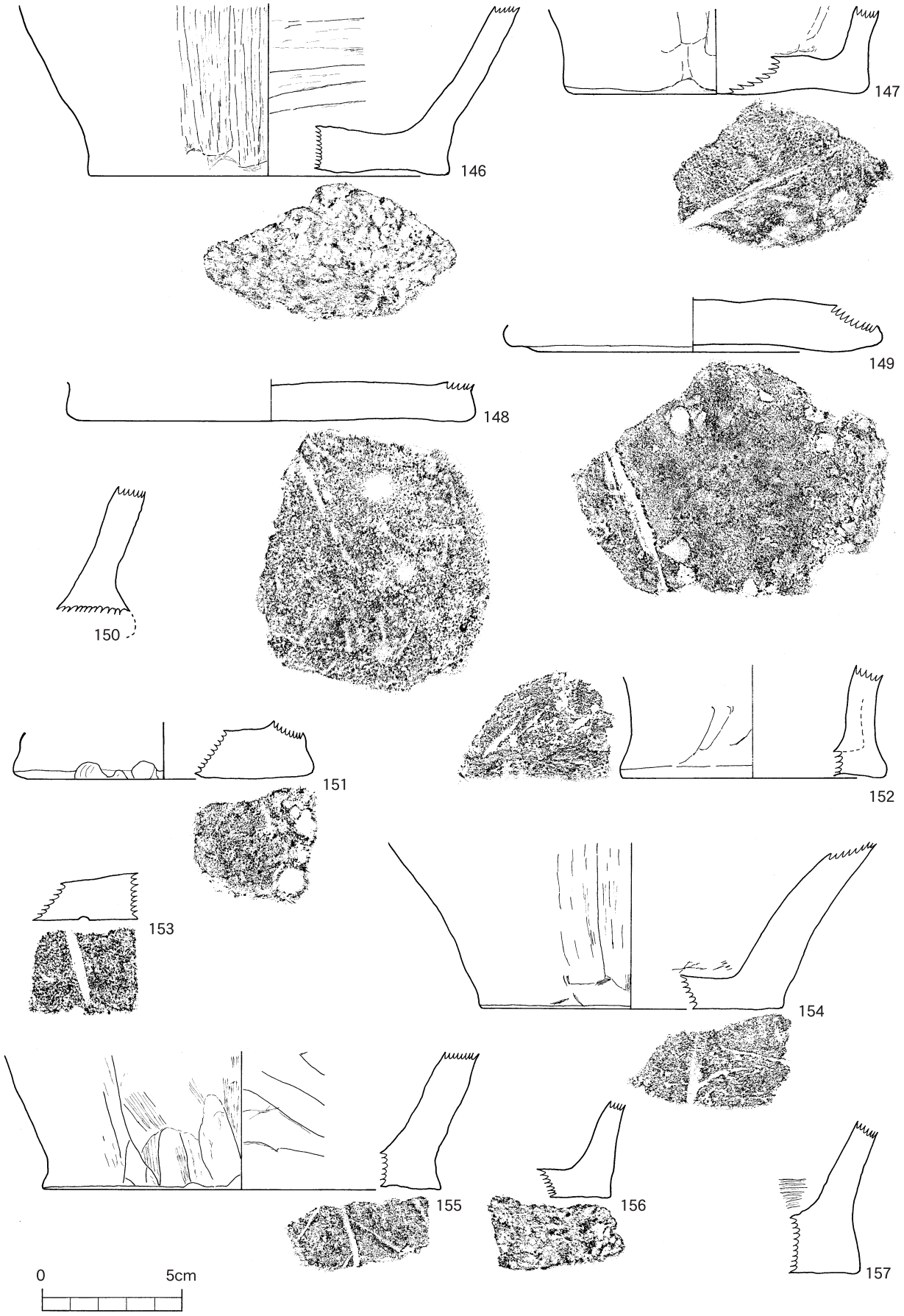
141は扁平な狭い板状粘土紐を貼付け合わせた口縁部で，外面はヘラによる粗いナデ，ていねいなナデ，内面は横ナデをしているが，ともに貼付部を残してでこぼこしている。雑な作りである。

142は分厚い口縁端からややへこんで外へ丸みをもって広がる器形をした鉢形の土器である。外面はみがきに近いていねいな横方向ヘラナデで仕上げ，距離を置いて縦方向の凹線がみられる。143は外へ開きながらまっすぐ伸びる分厚い作りの鉢で，外面の口縁近くは縦方向のヘラナデ，その下は横方向ヘラナデ，さらにその下はケズリに近い粗いヘラナデで仕上げている。内側は横方向の粗いヘラナデで，部分的に剥離している。144は直径11㎝の大きな平底で，丸みをもって胴部へ至る。外面はていねいなヘラナデ，内面は粗い横方向ヘラナデで仕上げている。鉢の底部と思われる。



第 24 図　縄文時代後期の土器(5)

第 25 図　縄文時代後期の土器(6)



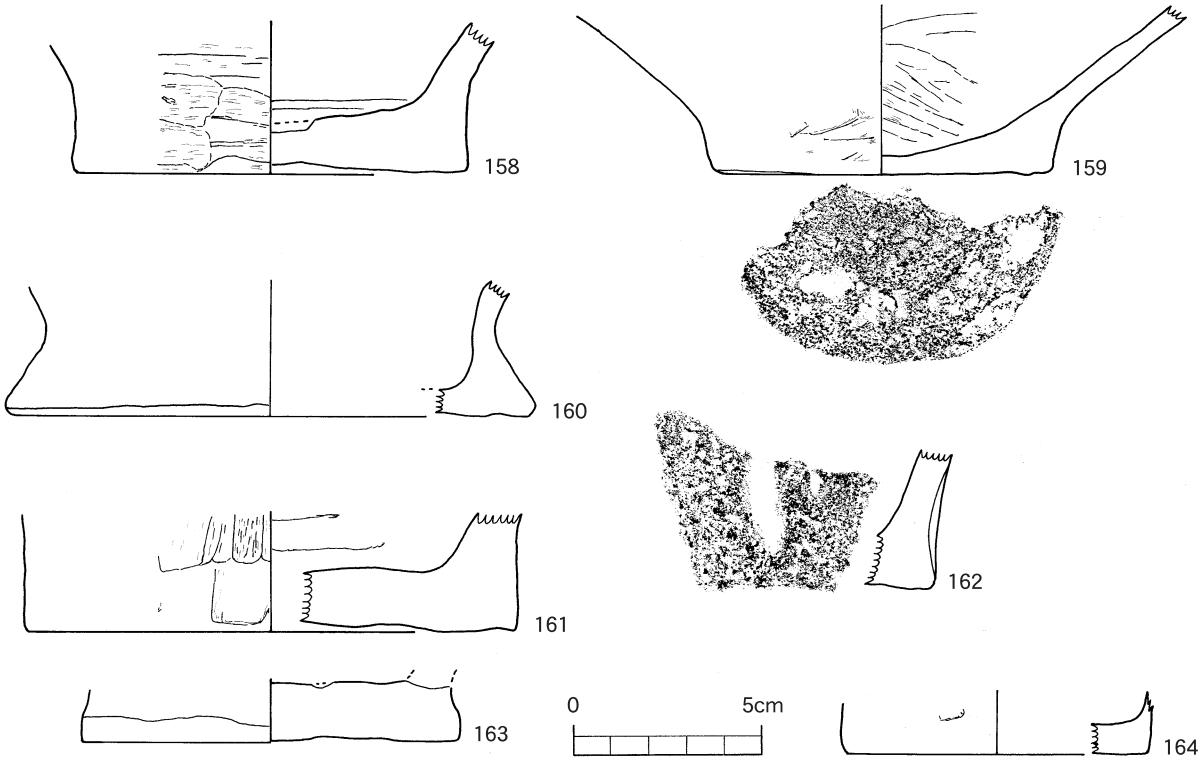
第 26 図　縄文時代後期の土器(7)

ほとんどがナデ仕上げであるのに対して，145だけが内外とも横方向の条痕で仕上げられる。外面には細い横方向凹線と，押圧文がみられる。

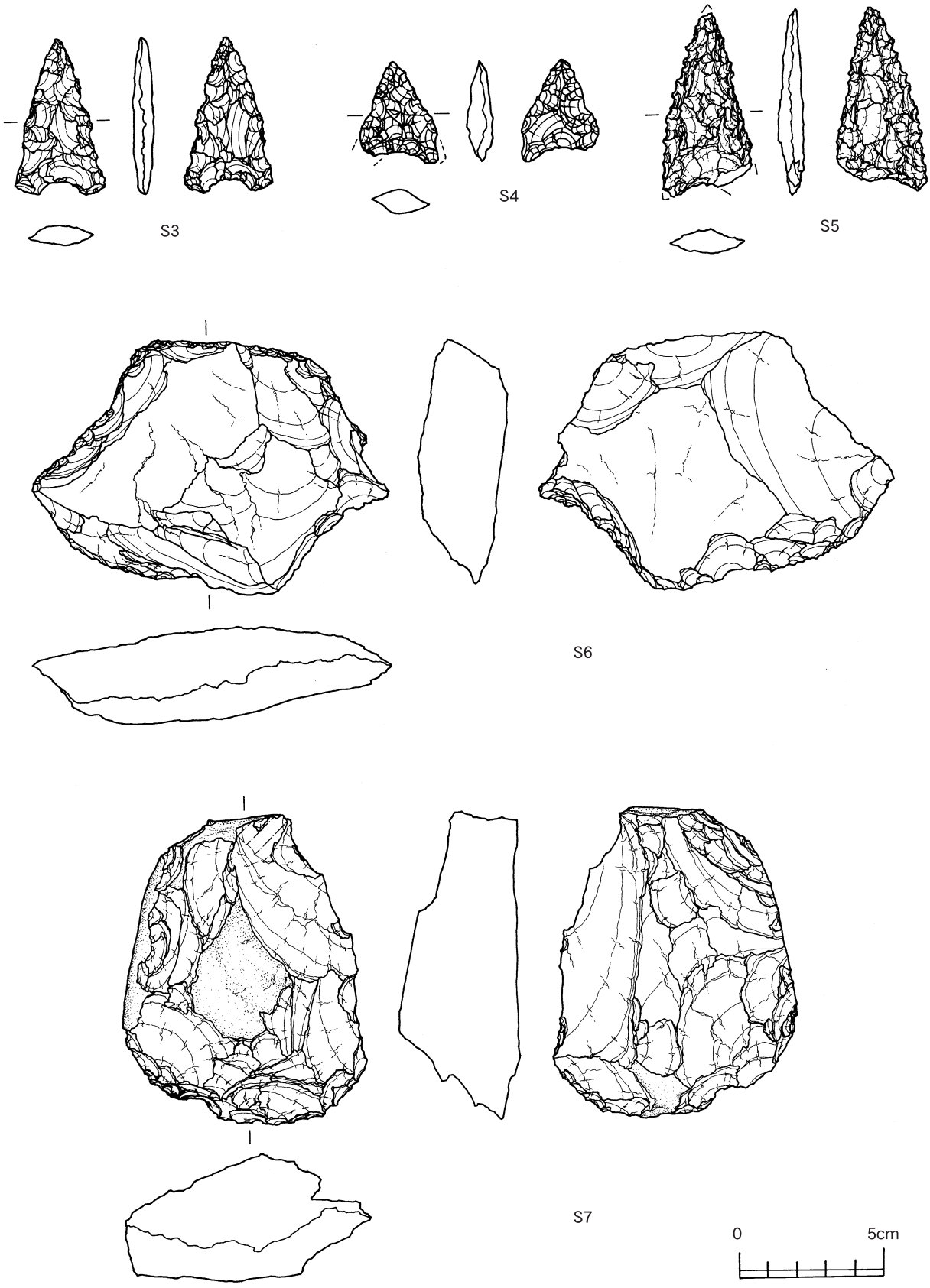
⑥底部（第26図・27図，146～164）

底部は安定した平底であるが，胴部から外へふくらんで底へ移るものと，まっすぐ移るものとがある。また，底は鯨骨や木の葉の圧痕が残るものと，ヘラでナデて仕上げるものとがある。

146～160は底がややふくらむものである。ふくらみにも146～152・159・160のように丸みをもっているものと，154のようにかすかに広がるもの，155・157・158のように角ばっているものとがある。146は直径が13㎝で，底のふくらみは小さい。外面は縦方向のヘラケズリ，内面は横方向のヘラナデで仕上げている。ややあげ底となっており，鯨骨の圧痕や，白い粉が付いている。147も底が丸みをもっており，縁には一部にヘラ押圧痕がみられる。底には木の葉の圧痕がみられ，白粉がある。148・149は底に木の葉・木の実の圧痕が見られ，内面はていねいなナデ整形である。151はまわりに指頭圧痕があり，底には白粉が付いている。152は貼付けて形を作っており，外面はヘラによる横ナデで仕上げている。底面はていねいなヘラナデで，白色粘土が付いている。153の底は分厚く，枝状の圧痕が付いている。154の底は直径11㎝と小さいが，胴下部は分厚い。木の葉の圧痕が付されている。155は直径が14.5㎝あり，内外とも縦方向のヘラナデで仕上げる。底に木の葉圧痕が付される。156はまわりにこまかい繊維状の圧痕が見られる。外に白粉が付される。157も底面に白い粉が付されており，分厚い底である。外面は縦方向のケズリに近いヘラナデである。158は内外とも横方向のヘラナデで仕上げ，底から胴部にかけて白粉が見られる。底は圧痕のためでこぼこしている。159は直径9㎝で，木の実らしき圧痕が付されている。底から外へ強く反ってまっ



第27図　縄文時代後期の土器(8)



第28図　第2地点出土の石器(1)

すぐ伸びており，外面はミガキに近いヘラナデ，内面はヘラナデで仕上げている。内面にはこげが多い。160は直径14㎝あり，底から内傾して薄くなり，そこから強く外反する。角に圧痕があり，底近くまで白粉が付されている。161は底をていねいなヘラナデで仕上げる分厚い作りのもので，直径は13㎝あり，直口して胴へ移る。

162は内・外・底ともヘラナデで，外面には縦方向のヘラ凹線が施される。

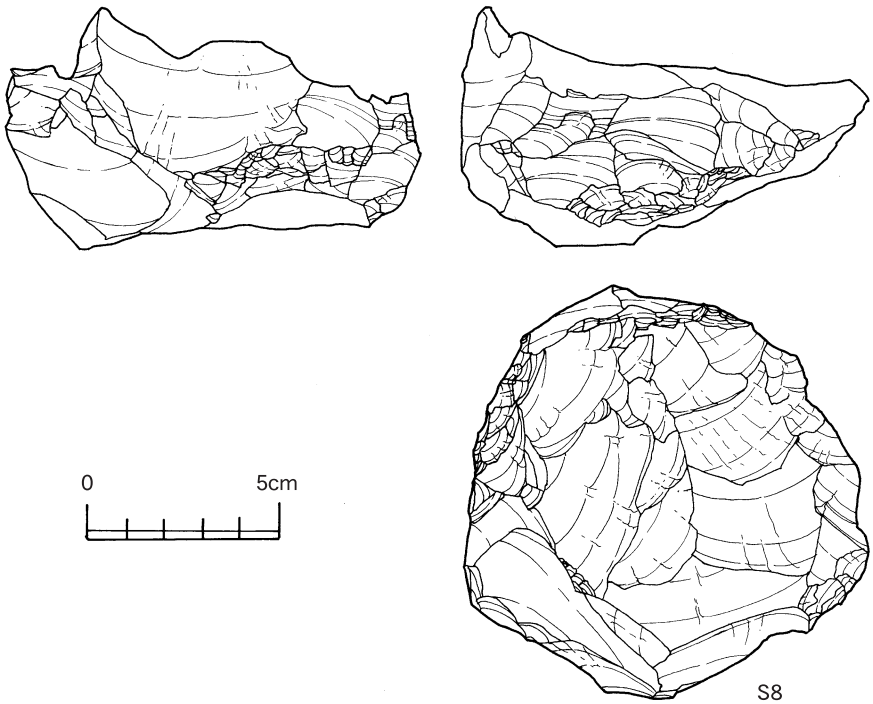
163は分厚い作りで底近くまで白粉が付く。底はていねいなヘラナデで仕上げている。164は内・外・底ともていねいなナデ仕上げだが，内面が剥脱し，薄くなっている可能性がある。底に白粉が付いている。

⑵　石器

第２地点では剥片・石核・原石・チップなどの石器が多く出土しているが，定形石器は少ない。定形石器には石鏃が２点，スクレイパー２点，礫器４点，石皿３点がある。

Ｓ４は１Ａ区のイモ穴から出土した長さ1.8㎝，幅1.3㎝，厚さ0.5㎝の打製石鏃である。正三角形に近い形をしており，浅いえぐりがあるが，片方の脚は欠けている。上牛鼻産黒曜石製である。Ｓ５は３区の表土で出土した長さ3.3㎝，幅1.6㎝，厚さ0.5㎝の打製石鏃である。二等辺三角形をしており，浅いえぐりがあるが，先端および両脚が欠けている。周辺から交互剥離を施し，サメ歯状を呈する。頁岩製である。

Ｓ６は縦4.5㎝，横6.2㎝，厚さ1.6㎝の横長剥片を利用したサイドスクレイパーである。周辺にこまかい剥離が施され一方に刃部を作っている。刃部は片側から剥離を施しているが，三角形状になっている。基部は刃部とは逆の面に細かい剥離があり，直線状に形を整えている。Ｓ７は縦5.4㎝，横4.2㎝，厚さ2.1㎝の厚い剥片を利用したエンドスクレイパーである。片面は自然面を残し，周辺から大きな剥離を施しているが，刃部は細かく調整している。あと一方の面も周辺を整え，刃部



第29図　第２地点出土の石器(2)

には細かい調整をしている。１Ｂ区Ⅲ層で出土している。S6・S7とも頁岩製である。

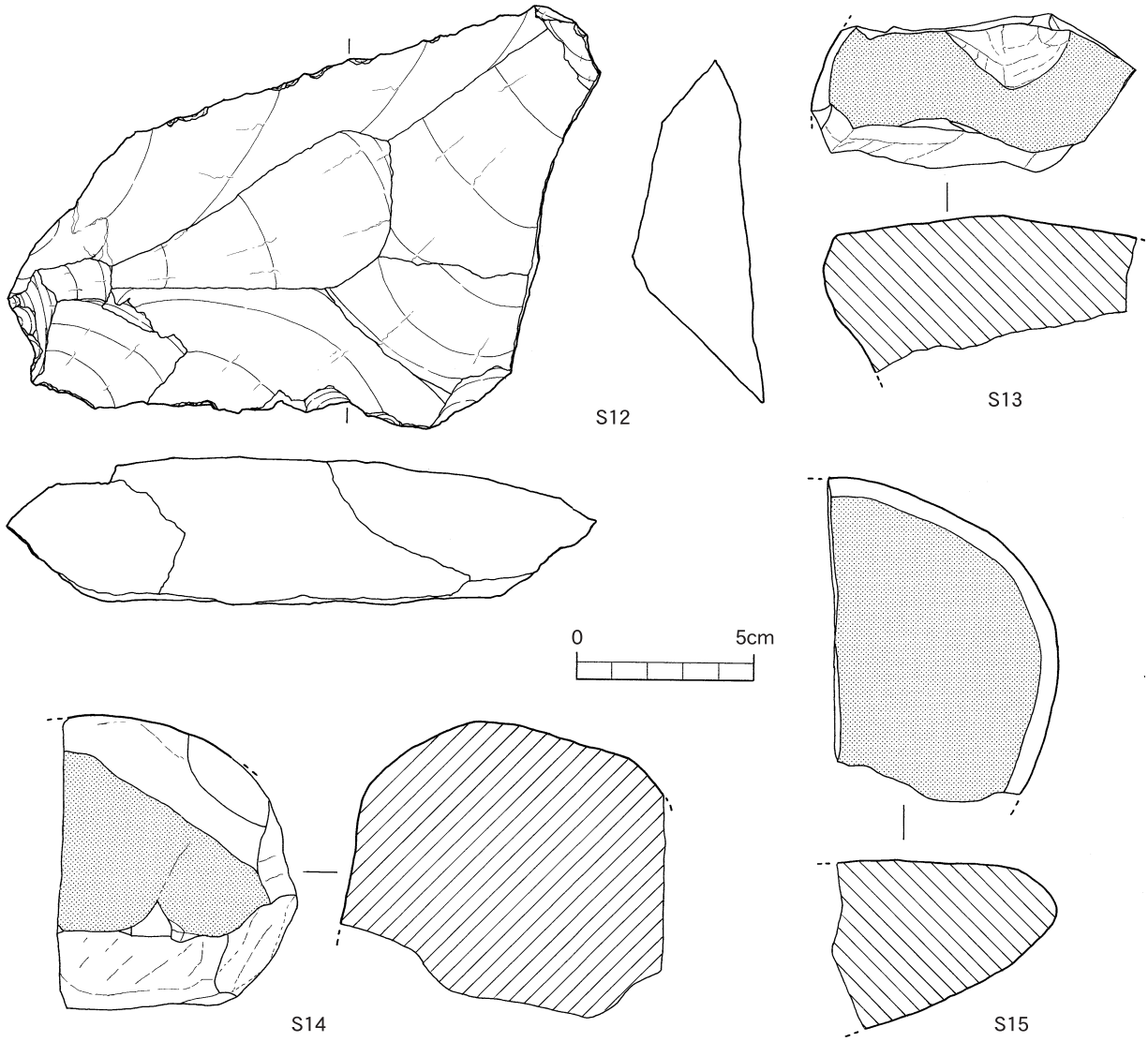
Ｓ８は5.3㎝×5.5㎝の略円形をした厚さ3.2㎝の鉄石英の石核である。周辺から加工して平面形を円形にし，その逆面を打面として薄い石刃をとっているが，用途ははっきりしない。１Ｂ区Ⅲ層で出土している。

Ｓ９～Ｓ12は礫器である。Ｓ９は長さ9.7㎝，幅８㎝，厚さ４㎝の頁岩円礫の一辺を両側から

第30図　第２地点出土の石器(3)

加工して刃部としたものである。大きな剥離と小さな剥離とがある。１Ａ区Ⅲ層の出土である。Ｓ10は長さ7.4㎝，幅6.5㎝，厚さ２㎝の片面に自然面を残す厚い剥片を用いた頁岩製礫器である。大きな剥離を両面から施して形を整え，一辺に細かい剥離がみられる。１Ｂ区Ⅲ層で出土している。Ｓ11も長さ11.6㎝，幅9.1㎝，幅4.8㎝の頁岩円礫を用いた礫器で，両面に広く自然面を残している。上下と片側面をていねいに加工して形を整えている。１Ａ・Ｂ区の表層で出土している。Ｓ12は横16.8㎝，縦12㎝，厚さ4.1㎝の片面が平坦な砂岩礫を使用した礫器で刃部に細かい刃こぼれがみられる。１Ｂ区Ⅲ層で出土している。

Ｓ13～Ｓ15は安山岩製石皿であるが，いずれも破損している。Ｓ13は１Ａ区Ⅲ層で出土した，平面が4.5㎝×9.2㎝で，厚さ4.5㎝を残している石皿である。一部分だけ円礫の端が残っており，使用面はややくぼんでいる。Ｓ14は２Ｂ区Ⅳ層で出土して，一部分に円礫の端を残している。平面は8.3㎝×６㎝で，厚さが８㎝ある。Ｓ15は１Ｂ区Ⅲ層で出土した1/3ほどの小型石皿である。平面が6.3㎝×９㎝で，最大の厚さが4.8㎝ある。使用面は平坦である。



第31図　第２地点出土の石器(4)

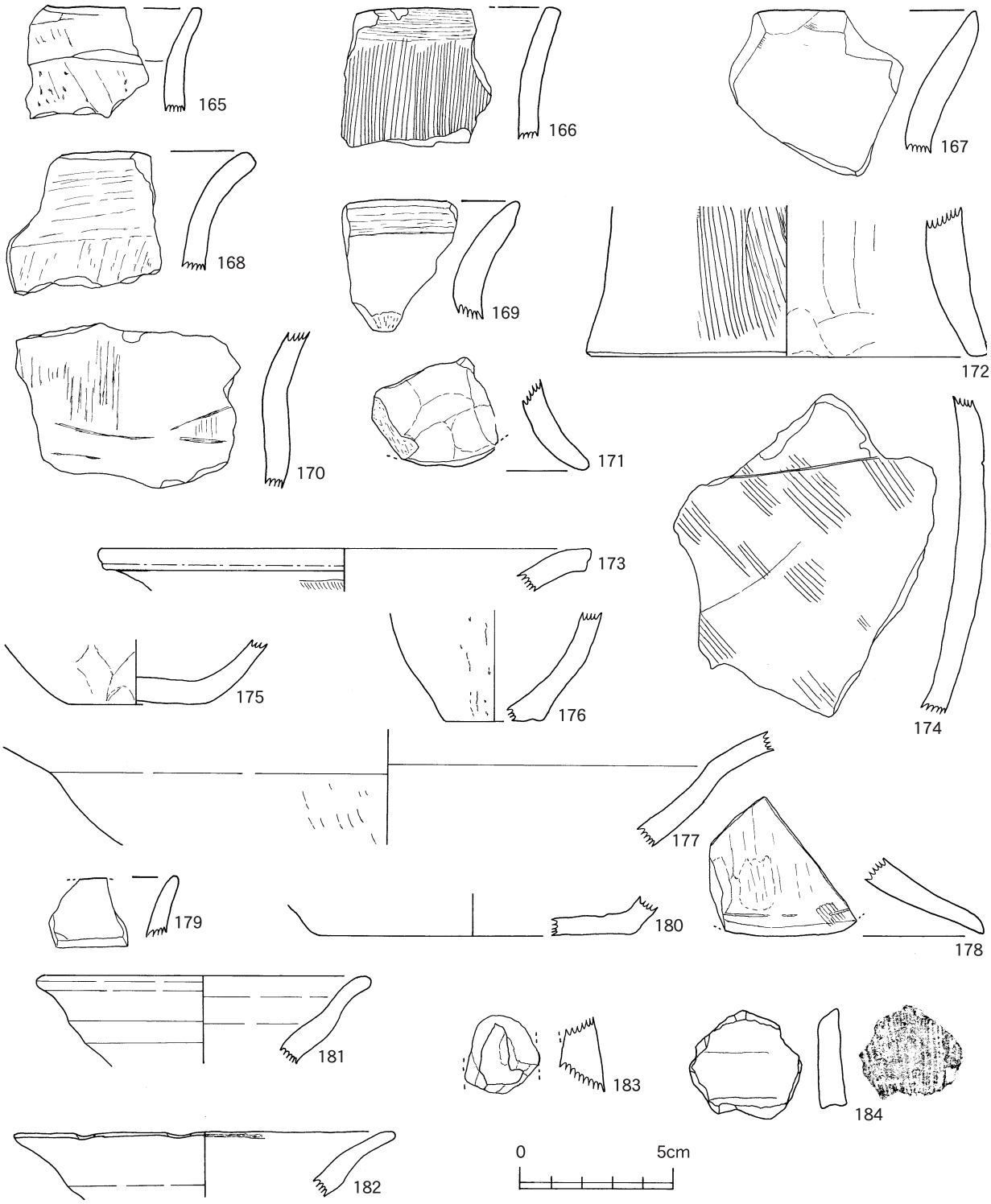
5　古墳時代以降

⑴　古墳時代の土器（第32図165～178）

土器の破片が101点出土しているが，小さい破片ばかりで，大きなものはない。

甕形土器・壺形土器・坩形土器・鉢形土器・高坏形土器がある。

甕形土器（165～172）はくの字状に外反する口縁部で，端部が細いくぼんだ矩形となるもの，



第32図　古墳時代以降の遺物

矩形のもの，とがっているものがある。165は雑な作りで外面がわずかに段となる。168は強く反っている。外面調整はていねいなヘラナデ（165・167～170）と，粗いハケナデがあるが，170は下から上へかきあげている。内面はヘラナデである。脚台は端部が丸みをもつものと，矩形のものとがある。171は内外とも縦方向ヘラナデで，外面調整はていねいであるが，でこぼこである。172は直径が13㎝と大きく，外面は粗いハケナデ調整，内面はヘラナデである。

壺形土器（173・174）の口縁部は直径が16㎝で，外面は繊維状ハケナデの上をヘラナデで仕上げ，内面は横方向のていねいな繊維状ハケナデである。口唇部も繊維状ハケナデで，ややくぼんでいる。胴部は明黄褐色を呈し，外面は斜方向ハケナデのあとヘラナデで仕上げているが，横方向のするどい切り口の沈線がある。鉄器かこまかいヘラを用いている。

坩形土器（175）の底部は直径５㎝ほどの平底で，外面は茶がかった赤褐色を呈し，その上に丹が塗られる。内面は灰がかった淡茶褐色を呈し，胎土は石英・長石を多く含むこまかい土である。外面はヘラミガキ，内面はていねいなヘラナデで仕上げる。

小型鉢形土器（176）は底部直径3.3㎝の平底で，外面は縦方向の粗いヘラナデで仕上げる。底面も粗い作りで，手づくね風となる。

高坏形土器（177・178）の鉢部は，口縁部が強く外反するもので，内面はていねいなヘラナデ（口縁部は横方向，底部は縦方向），外面はヘラナデで仕上げる。脚部は外へ強く広がり，端部はとがっている。外面は縦方向ヘラナデのあとミガキで仕上げ，内面は横方向ハケナデである。

⑵　古代の土器（第32図179～181）

古代の土師器９点（坏５点・甕４点）と須恵器１点が出土した。

坏の口縁部（179）は外へまっすぐ伸び，端部は丸い。内外とも横ナデで，赤みがかった茶褐色を呈する。焼成は良い。底部（180）は直径が10.3㎝と大きな平底で，底部切り離しはヘラ切りで，ていねいにナデている。一部がピンクがかった乳灰色を呈し，焼成は普通である。胎土は茶色石・白色石・石英などの石を含むこまかい砂質土である。

須恵器（181）は口縁直径が11㎝ある壺の口縁部である。頸部から外へ開き，さらに口縁へ外反する二重口縁となっている。灰褐色を呈し，軟質の焼きである。白色石や石英などこまかい土を用いているが，５㎜大の小石も含まれる。９～10世紀頃のものと思われる。

⑶　中世の青磁（第32図182）

口縁部の直径が12.5㎝ある龍泉窯系青磁の綾花皿である。丸みをおびた底部から外反して口縁部へ至る。灰色の地色に薄い緑色釉がかり，貫入もみられる。14～15世紀のものと思われる。

⑷　近世以降

①　溝状遺構（第33図）

近世あるいは近代のものと思われる溝状遺構が３条見つかっている。これらは現在の県道とほぼ直交しており，北の眼下にあるレストランの後にある土手にはこれに続く窪みがあることから，水田へ続く道跡と思われる。南側にある山裾を巡る道，あるいは山裾にある集落から水田へ続く道が，明治あるいは大正時代に開通した県道川辺笠沙線（現在の呼称）によって寸断されたものだろう。西側から１号・２号・３号と呼ぶ。これらはほぼ平行しており，長さ９ｍほどが発見されている。

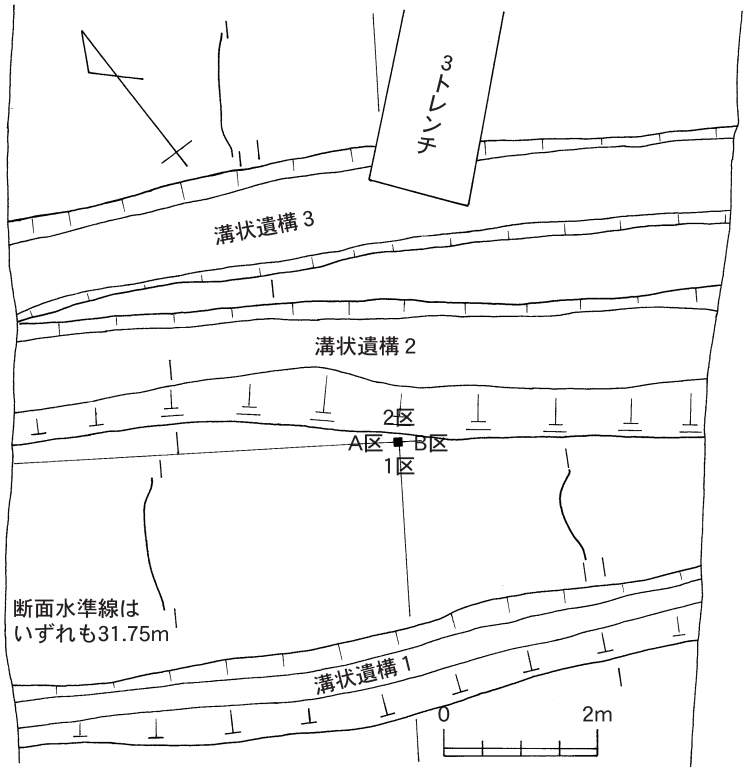
１号は幅が80～110㎝，深さが10～20㎝あり，底幅は40㎝ほどしかない。

２号は幅が150～190㎝，深さが10㎝前後で，底幅は60～90㎝ある。中から近世陶器１点が出土した。

３号は幅が120～140㎝，深さが２～10㎝と浅く，底幅は90㎝ほどである。中から現代陶器碗１点が出土している。

②　陶磁器（第32図183・184）

近世あるいは近代と思われる陶器６点（甕・壺・蓋・擂鉢・茶花），陶器椀１点が出土している。他に土師製の紡錘形有孔土錘（183）と，苗代川焼擂鉢を加工した直径3.5㎝位のメンコ（184）がある。メンコは周囲から打ち欠いて丸く仕上げている。



第33図　第２地点の溝状遺構

第２表　縄文土器観察表(1)

図番	出土地	種　類	口径	底径	外の種類	内の種類	色調	焼成度	胎　土	備　考
7	２－Ｂ	桑ノ丸式	16.6		横方向ナデの後３～４条の浅い綾杉波状平行沈線	ミガキに近いていねいな横ナデケズリのようだがミガキに近い	茶褐色	良く堅い	火山ガラス・長石・白色石・石英など含む細かい土	9に似ている
8	２－Ｂ	桑ノ丸式	16.6		横方向ナデの後３～４条の浅い綾杉波状平行沈線	ミガキに近いていねいな横ナデケズリのようだがミガキに近い	茶褐色	良く堅い	火山ガラス・長石・白色石・石英など含む細かい土	7と同一個体？
9	１－Ｂ	桑ノ丸式	19		横方向ナデの後５条の浅い綾杉平行沈線	横方向のヘラズリ	茶褐色（外にスス）	良く堅い	石英・長石・茶色石など含む	
10	１－Ｂ	桑ノ丸式			横方向ナデの後５条の平行沈線	ていねいな横方向ナデ	淡茶褐色	良	石英・長石など含む細かい石　茶色石	
11	１－Ｂ	桑ノ丸式			ヘラナデ後４～５条の平行沈線短絡線	ていねいなヘラナデ	外；茶褐色（スス）内；淡黒褐色	良	茶色石・長石・石英など含む細かい石	
12	１－Ｂ	桑ノ丸式			横方向ナデの後３条の綾杉状の深い平行ヘラ沈線	ていねいなヘラナデ	淡茶褐色（外にスス）	良く堅い	白色石・石英・長石など含む細石多	内面が剥脱
13	３－Ｂ	桑ノ丸式			ナデの後５条の斜方向平行沈線	ていねいな横方向ナデ	淡茶褐色	普通	火山ガラス・白色石・茶色石・長石など含む	
14	２－Ｂ	桑ノ丸式			横方向ナデの後２条の綾杉状深い平行沈線	ていねいな横方向ヘラナデ	明茶褐色	良く堅い	黄白石・石英・白色石・長石など含む細かい石	補修孔あり
15	１－Ｂ	桑ノ丸式			横方向ナデの後６～９条の綾杉文浅いヘラ沈線	ていねいな横方向ナデ	明茶褐色	良	火山ガラス・石英・白色石網石多　角閃石	補修孔あり
16	溝１	桑ノ丸式			横方向ナデの後綾杉文浅いヘラ沈線	ミガキ風のていねいな横方向ヘラナデ	淡茶褐色	良	石英・火山ガラス・白色石の多い細かい石	
17	２－Ｂ	桑ノ丸式			横方向ナデの後５条の綾杉状平行沈線	ていねいな横方向ナデ	淡茶褐色	良	白色石・石英・火山ガラスなどの細かい石多	
18	１－Ａ	桑ノ丸式			ナデの後ヘラによる斜方向沈線	ていねいな横方向ナデ	淡茶褐色	普通	白色石・石英・長石・茶色石などの細かい石	
19	１－Ｂ	桑ノ丸式			４～５条の平行沈線を斜・横弧状に引く	横方向ヘラナデ細かい一条の沈線	淡茶褐色	良く堅い	白色石・茶色石・長石・石英などの小石多	
20	２－Ａ	桑ノ丸式	36.5		綾杉状斜方向ヘラ沈線	横方向ナデ	茶褐色	悪く表面がもろい	白色石・石英・角閃石などの多い粗い土，3㎜～6㎜大のものも含まれる	
21	２－Ａ	桑ノ丸式			ナデの後５条の綾杉文平行沈線	ていねいな横方向ナデ	外；淡茶褐色内；黒灰色	良	石英・白色石・石英などの小石が多い	
22	１－Ａ	桑ノ丸式			ナデの後５条の綾杉文平行沈線	ミガキに近い斜方向ナデ	淡茶褐色	良	石英・白色石などの小石が多い	
23	１－Ａ	桑ノ丸式			ナデの後５条の綾杉文平行沈線	横方向ナデ	淡茶褐色	良	石英・白色石などの小石多　茶色石・石英・白色石など石が多く7㎜大のものが含まれる粗い土	15・16などと同一？裏は剥脱多
24	２－Ｂ	桑ノ丸式			横方向ナデの後５条の綾杉文平行沈線	ミガキに近いていねいな縦方向ナデ	淡茶褐色（裏は淡黒褐色）	良		
25	３－Ｂ	桑ノ丸式			縦方向の４条の沈線	ミガキに近いていねいな縦方向ナデ	淡茶褐色（裏に黒斑アリ）	良	石英・茶色石・黄白色石などの石が多い	
26	１－Ｂ	桑ノ丸式			ていねいなヘラナデの後綾杉文ヘラ沈線	左側は縦方向ヘラナデ右側は縦方向ヘラミガキ	外；チョコ色内；淡茶褐色	良く堅い	石英・長石・茶色石・白色石などの細かい石多	
27	１－Ａ	桑ノ丸式			ナデの後７条ほどの波状平行沈線	ミガキに近いていねいな横方向ナデ	淡茶褐色	良く堅い	白色石・茶色石・火山ガラス・長石などの細かい石を多く含む	
28	２－Ｂ	桑ノ丸式			横方向ナデの後平行沈線	横方向ナデ	外；淡茶褐色内；灰黒褐色	良	白色石・石英・茶色石など多	
29	３－Ａ	桑ノ丸式			横方向ナデの後４条の平行波状文	ていねいな横方向ナデ	淡茶褐色（内；淡黒褐色）	良	石英・長石などの細かい石	
30		桑ノ丸式			ナデの後綾杉文ヘラ沈線	横方向ナデ	やや黒みがかった淡茶褐色	良	火山ガラス・石英・茶色石・長石などの小石を多く含む	
31	１－Ａ	桑ノ丸式			５条の平行沈線	ていねいな横方向ナデ	暗茶褐色	良	茶色石・白色石・石英・長石などの小石多	
32	２－Ａ	桑ノ丸式			横方向ナデの後巻貝殻頂で綾杉状沈線	ていねいな横方向ナデ	外；茶褐色内；淡黒褐色	良く堅い	白色石・長石・石英・火山ガラスの多い土（4㎜などのものあり）	
33	３－Ｂ	桑ノ丸式			ナデの後ヘラ沈線	ていねいな縦方向ナデ	茶褐色	良	茶色石が多い，白色石・石英なども多い５㎜大もある	
34	１－Ｂ １－Ａ	桑ノ丸式			５条の綾杉文ヘラ沈線	ナデ	黄褐色	良	白色石・石英など多	剥脱多し
35	３－Ａ	押型文			細かい山形文	細かい山形文口縁はヘラ押し	外；黒褐内；白黄色と黒色	普通	長石多い石英などの細かい石	
36	２－Ｄ	押型文			内外ともに細かい山形文	内の口唇にヘラ押し	外；灰褐色内；黄っぽい淡褐色	普通	長石・石英・白色石多い細かい石	やや波状
37	２－Ｂ	押型文			小さいだ円文	粗い山形文口唇にヘラ押し	淡褐色	良	白色石・石英・長石などの細石	
38	３－Ａ	押型文			内外ともに細かい山形文		黒褐色	良	長石・白色石・石英などの細かい石が多い	
39	４－Ａ	押型文			細かい山形文	ていねいな横方向ナデ細かい山形文	外；白灰色（スス付着）内；白灰色	良	白色石・長石・石英などの細かい石４㎜大	
40	３－Ａ	押型文			細かい山形文	ていねいなナデ	外；淡茶褐色（やや赤っぽい）内；黄白色	普通	長石・雲母・茶色石など５㎜大もあり	
41	３－Ａ	押型文			細かい山形文	横方向ナデ上に山形文	外；黄白色内；黒褐色	良	石英・長石・茶色石・白色石などの細かい石	
42	３－Ａ	押型文			細かい山形文	ていねいな横方向ナデ	白黄色	良	長石・白色石などの小石	
43	４－Ｂ	押型文			細かい山形文	ヘラナデ	外；淡茶褐色内；黄白色	良	石英・長石などの細かい石５㎜大のものあり	
44	１－Ａ	押型文			ていねいなヘラナデの後粗い山形文	ヘラナデ	外；茶褐色内；暗灰褐色外；	良	６㎜大の小石もある　粗石黄白色・白色石・石英・長石など	
45	１－Ａ	押型文			こまかいだ円文	ナデ	黄白色内；黒灰色	普通	石英・長石などの細かい石	
46	２－Ｂ １－Ｂ	塞ノ神Ａ式	29		口唇に押圧刺突文（１条）鋸歯状の沈線間に縄沈線，上下に刺突文	横方向ヘラナデ横方向ヘラケズリ	明茶褐色	良	白色石・長石４㎜～６㎜あり	
47	１－Ｂ	塞ノ神Ａ式			横方向ナデ沈線の間縄文，頸部にヘラ刺穴・巻貝殻頂	ていねいな横方向ヘラナデ	濁った淡茶褐色	普通	石英多　長石・白色石など細石多	波状口縁口唇にヘラ押圧

第３表　縄文土器観察表(2)

図番	出土地	種　類	口径	底径	外の種類	内の種類	色調	焼成度	胎　土	備　考
48	１－Ａ	塞ノ神Ａ式			ていねいなヘラナデ	横方向ナデ	灰褐色	良	白色石・長石・石英の多い 細かい石	口唇に細かい ヘラ刻み
49	２－Ｂ	塞ノ神Ａ式			ヘラ沈線の間に縄文	ていねいな横方向ナデ	外；黄白色 内；黒灰色	良	黄白色・長石・白色石・ 石英などの細かい石	口唇にヘラ刻み
50	２－Ｂ １－Ｂ	塞ノ神Ａ式			ヘラ刺突文＋鋸歯状沈線文 ＋縄文	ていねいな横方向ナデ	外；淡茶褐色・内；黄 みがかった淡茶褐色	良	白色石・角閃石・火山ガラス・石 英などの細かい石，４㎜大の石	口唇に短い ヘラ押圧
51	１－Ｂ	塞ノ神Ａ式	26		ヘラ刺突文＋沈線＋縄文	ていねいな横方向ヘラナデ	淡茶褐色	良	石英・白色石・長石など細かい	口唇にヘラ押圧
52	１－Ｂ ３－Ｂ	塞ノ神Ａ式			ヘラ刺突文＋２～４条の凹線 文＋縄文＋鋸歯状ヘラ凹線	横方向ヘラナデ	外；淡黒褐色・内；黄 みがかった淡い褐色	良	白色石・長石・茶色石などの多い土	口唇にヘラ押圧
53	Ｄ－１	塞ノ神Ａ式			横方向ナデ 凹線２条	ていねいな横方向ナデ	淡茶褐色	良	長石・白色石などの細かい石	口唇に細かい ヘラ押圧
54	３区	塞ノ神Ａ式			ていねいなナデ 刺突文＋凹線＋縦刻み	ていねいな横方向ナデ	黄褐色	良	白色石・長石・石英などの 細かい石	口唇に浅いヘラ 刻み　外は摩滅
55	２－Ｂ	塞ノ神Ａ式			ていねいな横方向ヘラナデ ヘラ凹線	ていねいな横方向ナデ	淡茶褐色	良	９㎜大の石もある。白色石・ 長石・茶色石の多い土	口唇にヘラ刻み
56	１－Ａ １－Ｂ	塞ノ神Ａ式			横方向ヘラナデ　５条の波状 凹線　４条凹線＋縄文	横方向ヘラナデ	黄みがかった 淡茶褐色（外にススス）	良	４㎜大長石・石英・白色石多	
57	３－Ｂ	塞ノ神Ａ式	22.5		ていねいなナデ　細かい刺突 文＋ヘラ凹線	ていねいなヘラナデ	淡茶褐色	良	長石・雲母・白色石・石英・ 茶色石など４㎜大までの石含む	波状口縁・口唇部に浅 いヘラ刻み　59と同じ
58	表採	塞ノ神Ａ式			ヘラ刺突文	横方向ヘラナデ	淡茶褐色	良	長石・雲母・白色石・石英・ 茶色石などの細かい石	
59	１－Ｂ	塞ノ神Ａ式			横方向ヘラナデ　４条以上の 凹線＋押圧	ていねいな横方向ヘラナデ	淡茶褐色	良	白色石・石英・長石・茶色石など ６㎜大までの石	
60	１－Ｂ	塞ノ神Ａ式			ヘラナデ　凹線	横方向ヘラナデ	外；黄褐色・内；黄み がかった淡茶褐色	普通	石英・白色石・長石・雲母 などの細石多	摩耗している
61	３－Ｂ	塞ノ神Ａ式			横方向ヘラナデ　沈線間に縄 文＋ヘラ刺突　鋸歯状凹線	横方向ナデ	外；黄みがかった淡茶褐色 内；白っぽい淡茶褐色	良	長石・白色石・石英の細かい石	
62	１－Ｂ	塞ノ神Ａ式			ヘラ沈線＋縄文＋凹線 ＋押圧文	横方向ヘラナデ	外；暗茶褐色 内；明るい淡茶褐色	普通	白色石・火山ガラス・角閃石など の細かい石	やや厚め
63	１－Ａ	塞ノ神Ａ式			斜方向沈線間に縄文	粗いヘラナデ	淡黄褐色	普通	白色石・石英・長石などの 細かい石	
64	１－Ｂ	塞ノ神Ａ式			ナデ 矩形の凹線＋縄文	横方向ナデ	にごった 淡茶褐色	普通	石英・長石・茶色石などの 細かい石	
65	１－Ｂ	塞ノ神Ａ式			凹線＋縄文	粗い横方向ナデ	外；黒褐色 内；淡黄褐色	良	白色石・長石などの細かい石	
66	１－Ａ	塞ノ神Ａ式			凹線＋縄文	横方向ヘラナデ	外；暗茶褐色 内；茶褐色	良	茶色石・白色石・長石などの 細かい石	
67	４－Ｂ	塞ノ神Ａ式			直の凹線＋縄文	ヘラナデ	淡黄褐色	良	長石・白色石などの細かい石	
68	１－Ｂ	塞ノ神Ａ式			ナデ　凹線＋縄文	ていねいな横方向ナデ	外；淡茶褐色 内；黒褐色	悪	白色石・石英など石多し	もろい
69	２－Ｂ	塞ノ神Ａ式			ていねいな縦ナデ凹線＋縄文	粗い横方向ナデ	外；赤っぽい淡茶褐色 内；暗い淡茶褐色	良	白色石・茶色石・火山ガラス・石 英・白黄白色石などの細かい石	
70	４－Ｂ	塞ノ神Ａ式			ていねいなナデ 凹線＋縄文	粗い横方向ヘラナデ	外；赤っぽい黄褐 色・内；灰褐色	良	白色石・長石の多い細かい石	
71	１-Ｂ	塞ノ神Ａ式			ヘラナデ 斜方向凹線＋縄文	粗い横方向ナデ	黄っぽい 明淡茶褐色	良	白色石・長石の細かい石	
72	２－Ｂ	塞ノ神Ａ式	10		ヘラナデ＋斜状沈線深い縄文	横方向ヘラケズリ	明茶褐色	普通	白色石・茶色石・長石・石英など	口唇に細かい 貝殻押圧
73	４－Ｂ	塞ノ神Ａ式			凹線＋縄文	ナデ	淡茶褐色	普通	白色石・石英・雲母・角閃石 の多い	
74	１－Ｂ	塞ノ神Ａ式			ヘラ沈線＋縄文	横方向ナデ	黄みがかった 灰褐色	普通	角閃石・白色石・石英の多い 細石７㎜大のものあり	
75	１Ｂ	条痕文土器			貝殻条痕	ミガキに近いヘラの ていねいな横方向ナデ	淡茶褐色	良	長石・白色石など多	
76	１－Ｂ	条痕文土器			内外ともに貝殻条痕		外；茶がかった黄 褐色・内；黒褐色	普通	白色石・茶色石・長石の多い 細かい石	
77	１－Ｂ	条痕文土器			内外ともに貝殻条痕 底近くはそのあとヘラナデ		茶褐色（内はや や黄みがかる）	良	長石・石英など細かい石	
78	１－Ｂ	条痕文土器			内外ともに粗い貝殻条痕		外；黒褐色 内；茶褐色	普通	石英　・黄白色石・長石・白色石 などの細かい石６㎜大のものあり	
82	１－Ａ	深鉢	30		縦方向ケズリ，指押圧， 弧状・斜方向凹線	ミガキに近いていねいな ヘラナデ	外；暗茶褐色 内；茶褐色	普通	白色石・茶色石・石英・長石など	口唇指押圧 補修孔
83	１－Ａ	深鉢			ヘラ押圧・凹線（ヘラケズリ）	ていねいなヘラナデ	外；淡黒褐色 内；淡茶褐色	普通	角閃石・滑石・石英などが多い	口唇に指押圧
84	１－Ａ	深鉢			横方向ヘラナデ 矩形＋押圧文＋渦巻文	ケズリに近い粗い 横方向ヘラナデ	やや暗い 茶褐色	普通	石英・長石・黄白色・金雲母など	口唇にヘラ刻み
85	１－Ａ	深鉢			幅の広いヘラ，凹線， ヘラケズリ	ていねいな横方向ナデ	淡茶褐（一部赤 みがかる）	良	長石・石英などの細かい石	口唇に指押圧
86	１－Ｂ	深鉢			縦方向ヘラ押圧＋横凹線	ていねいな横方向ヘラナデ	外；淡茶褐（外に ススス）・内；淡黄褐	普通	石英・長石など	口唇にヘラ 押圧
87	１－Ａ	深鉢			凹線＋縦凹部	ていねいな横方向ヘラナデ	外；淡茶褐・内；黄 みがかった淡茶褐色	普通	石英・白色石・長石などの細か い石	
88	１－Ｂ	深鉢			ヘラナデ，浅い凹線	横方向ヘラナデ	明茶褐色	普通	黄白色・石英・角閃石の多い 細かい石	口唇にヘラ 押圧
89	４－Ｂ	深鉢			ていねいなナデ ヘラ凹線	ていねいなヘラナデ	淡茶褐色 （外はススス）	普通	長石・石英などの細かい石	口唇にヘラ 押圧
90	１－Ａ	深鉢			ていねいなヘラナデ 貼付突帯	ヘラナデ	外；明茶褐色 内；淡黒褐色茶	普通	石英・角閃石などが多い	口唇にやや くぼみ
91	１－Ｂ	深鉢			粗い横ヘラナデ，ヘラ凹線（横 弧状・三角）＋ヘラ押圧	ていねいな横方向ヘラナデ	茶褐色外にスス 内はやや灰がかり	普通	長石・石英・黄白色など	口唇にヘラ 押圧

第４表　縄文土器観察表(3)

図番	出土地	種　類	口径	底径	外の種類	内の種類	色調	焼成度	胎　土	備　考
92	１－Ｂ	深鉢			横方向ナデ，横方向ヘラケズリ，肥厚帯にヘラ凹線	ていねいな横方向ヘラナデ	外；黒褐色（外にススス）内；茶褐色	良	石英・長石・黄白色・白色石など	
93	１－Ａ	深鉢			横方向ヘラナデ，ヘラケズリ，横凹線＋押圧文	ていねいな横方向ヘラナデ	茶褐色（外にススス）	普通	石英・長石・黄白色など	口唇に指押圧
94	１－Ａ	深鉢	22		横方向ヘラナデ沈線＋指押圧	横方向ヘラナデ	淡茶褐色（外は黒み，内は灰色がかる）	普通	角閃石・石英など	口唇に指押圧
95	１－Ａ	深鉢			横方向ヘラナデ	ていねいな横方向ヘラナデ	茶褐色・外にススス，内は灰褐色	良	石英・長石・白色石など	口唇にヘラ押圧
96	１区	深鉢			縦方向指押圧	横方向ヘラナデ	暗茶褐色	普通	角閃石・石英・白色石など	
97	１－Ｂ １－Ａ	深鉢			縦方向ヘラケズリ，指押圧	粗い横方向ヘラナデ	暗淡茶褐色	普通	石英・長石などの細かい石 ５㎜大のものアリ	口唇に深いヘラ押圧
98	４－Ｂ	深鉢			横方向ヘラナデ，縦方向ヘラ凹線	横方向ヘラナデ	茶褐色 外にはススが付着	普通	石英・長石・黄白色などの細かい石	口唇に指押圧
99	４－Ｂ	深鉢			横方向ヘラナデ，浅いヘラ，弧状凹線	ミガキに近いていねいなナデ	外；黒褐色 内；茶褐色	良	長石・石英などの細かい石	口唇に内外から交互にヘラ押圧
100	２－Ａ	深鉢			横方向ヘラケズリ 指押圧	横方向ヘラナデ	淡茶褐色	普通	角閃石・石英・黄白色石など	口唇にヘラ押圧
101	１－Ｂ	深鉢			ていねいなナデ，横方向ヘラケズリ，くの字と逆の字状ヘラ凹線	ていねいな横方向ナデ	暗茶褐色（内はやや黄みがかる）	普通	火山ガラス・石英・白色石などの細かい石	口唇に指押圧
102	１－Ａ	深鉢			横方向ヘラケズリ	ていねいな横方向ヘラナデ	淡茶褐色	良	白色石・石英などの石 ９㎜大のものもアリ	口唇に深い指押圧，肥厚帯
103	１－Ａ	深鉢			広い凹線	ていねいな横方向ナデ	茶褐色	良	黄白色・石英・白色石などの細かい石	口唇に指押圧
104	１－Ａ	深鉢			横方向ヘラナデ	横方向ヘラナデ	茶褐色	普通	黄白色・長石・石英など	口唇に指押圧
105	１－Ａ	深鉢			横方向ヘラナデ	粗いヘラナデ	暗淡茶褐色	良	雲母・石英・白色石などが多い	波状
106	土坑	深鉢			横方向ヘラナデ	横方向ヘラナデ	淡茶褐色 （外は暗い）	悪	長石が多い 白色石・石英などの細かい石	粘土紐の貼付
107	１－Ｂ	深鉢			横方向ヘラナデ	横方向ヘラナデ	灰がかった 淡茶褐色外にスス	普通	角閃石・白色石など ５㎜大のものあり	口唇に指押圧，貼付突帯
108	土坑	深鉢			ヘラナデ	横方向ヘラナデ	暗茶褐色 （外は黒っぽい）	普通	石英・長石などが多い	ねじり，肥厚帯
109	１－Ａ	深鉢			横方向ナデ	横方向ナデ	茶褐色 （内；灰褐色）	普通	石英・白色石・長石など	貼付突起
110	１－Ａ	深鉢			横方向ヘラナデ 短絡線押圧文	ていねいな横方向ヘラナデ	外；暗茶褐色 内；黒褐色	普通	白色石・石英・長石など	口唇に指押圧
111	３－Ｂ	深鉢			内・外ともにていねいなヘラナデ ヘラ凹線		暗茶褐色・内は黄みがかった淡黒褐色	良	石英・長石・雲母など	口唇に指押圧
112	１－Ａ １－Ｂ	深鉢			内・外ともにていねいなヘラナデ ヘラ凹線（斜め・横）		淡茶褐色 外にスス	普通	火山ガラス・白色石・茶色石などの細かい石	口唇に指押圧
113	１－Ｂ	深鉢			横方向ヘラケズリ 横方向ヘラナデ凹線	ていねいな横方向ヘラナデ	暗茶褐色	良	白色石・茶色石・金雲母・長石などの細かい石	口唇に交互にヘラ押圧
114	２－Ｂ	深鉢			ていねいなナデ ヘラ凹線	ていねいな横方向ヘラナデ	茶褐色 （部分的に赤み）	良	長石・黄白色・石英など	口唇に深い指押圧
115	３－Ｂ	深鉢			横方向ヘラナデ ヘラ凹線	横方向ヘラナデ	外；黒褐色 内；暗い淡茶褐色	普通	長石・黄白色・石英など	口唇ヘラ押し
116	１－Ａ	深鉢			ヘラナデ 矩形のヘラ凹線	粗い横方向ヘラナデ	茶褐色	普通	白色石・長石・石英の細かい石 ６㎜大の石もあり	波状口縁
117	１－Ｂ	深鉢			横方向ヘラナデ ヘラ横凹線	横方向ヘラナデ	暗い淡茶褐色	普通	長石・石英などの石	口唇にヘラ押圧のあるこぶ
118	１－Ａ	深鉢			内外ともていねいな横方向ヘラ ナデ		暗茶褐色	良	白色石・石英・長石	口唇に沈線
119	１－Ａ	深鉢			ヘラナデ 弧状のヘラ凹線	横方向ヘラナデ	茶褐色 黒褐色	普通	白色石・火山ガラス・石英などの細かい石	
120	３－Ａ	深鉢			ていねいなヘラナデ（ミガキに近い）凹線＋押圧	粗いヘラナデ	淡茶褐色 （部分的に灰がかる）	良	長石・茶色石・石英多	波状突起
121	１－Ａ	深鉢			ていねいな横方向ナデのあと矩形文様	粗い横方向ナデ	茶褐色	良	長石・黄白色石・石英などの細かい石	
122	１－Ａ １－Ｂ	深鉢	30.5		粗い横方向ヘラナデ 矩形凹線	縦方向ヘラナデ	茶褐色	普通	黄白色石・石英・火山ガラスなどの細かい石	
123	１－Ａ	深鉢			ていねいな横方向ヘラナデ 矩形の凹線	ていねいな横方向ヘラナデ	明茶褐色	良	長石・石英	口唇に指押圧
124	１－Ｂ	深鉢			横方向ナデ 矩形の凹線	横方向ナデ	茶褐色	良	火山ガラス・石英・茶色石 ８㎜大のもの多し	口唇に突起部あり
125	１－Ａ	深鉢			ていねいなヘラナデ 横ヘラ凹線，横Ｌ字	ていねいな横方向ヘラナデ	黒みがかった 暗茶褐色	良	石英・長石・白色石などの細かい石	口唇に浅いヘラ押圧
126	溝１	深鉢			ていねいな横方向ヘラナデ	ていねいな横方向ヘラナデ	茶褐色 内；黒褐色	良	長石・雲母・石英	口唇にヘラ押圧
127	土坑	深鉢			ていねいな横方向ナデ 矩形凹線	ていねいな横方向ナデ	明茶褐色	普通	白色石・黄白色石・長石・石英 金雲母	
128	１区	深鉢			凹線（三角文・縦線）	粗いヘラナデ	茶褐色	普通	白色石・黄白色石・石英・ 角閃石小礫多し	
129	１－Ａ	深鉢			ていねいな横方向ナデ 凹線（横・Ｌ字・斜め縦）	ていねいな横方向ナデ	外；黒褐色 内；茶褐色	良	石英・長石・茶色石など	
130	土坑	深鉢			横方向ナデ 横あるいは弧状凹線	横方向ナデ 平行凹線	淡茶褐色 内；黒褐色	普通	長石・石英・黄白色石	波状口縁
131	１－Ａ	深鉢			横方向ヘラナデ 横方向ヘラケズリ	ていねいな横方向ヘラナデ	茶褐色	良	長石・石英・白色石・ 黄白色石	
133	溝３	深鉢			ていねいな横ヘラナデ凹線	ヘラナデ	淡茶褐色	普通	白色石・石英・茶色石・長石 の細かい石	

第５表　縄文土器観察表(4)

図番	出土地	種　類	口径	底径	外の種類	内の種類	色調	焼成度	胎　土	備　考
134	１－Ａ	深鉢			内外ていねいな横方向 ヘラナデ		暗茶褐色	普通	石英・長石などの小石	口唇に一部押圧
135	１－Ａ １－Ｂ	浅鉢	18		ヘラナデ刺突文＋凹線	横方向ヘラナデ	灰がかった 淡茶褐色	普通	白色石・角閃石・石英・茶色石などの細かい石	突起　補修孔
136	土坑	深鉢	22		粗いヘラナデ	ヘラナデ	黒みがかった 淡茶褐色	普通	角閃石・石英	
137	１－Ａ	深鉢			ていねいな横方向ナデ	横方向ヘラナデ	茶褐色	普通	長石・石英などの細石	口唇に指押圧
138	１－Ａ	深鉢			横方向ヘラナデ	横方向ヘラナデ	淡茶褐色 (外にススス)	普通	長石	口唇に離れた押圧
139	１－Ａ	深鉢			内外横方向ヘラナデ		茶褐色 (内は灰がかっている)	普通	火山ガラス・黄白色石などの細かい石　５㎜大の石	口唇に指押圧
140	１－Ｂ	深鉢			横方向ヘラケズリ ていねいなナデあり	横方向ヘラナデ	淡茶褐色	良	石英・長石・白色石の細石	口唇に深いヘラ押圧
141	１－Ａ	深鉢			粗いナデ　ていねいなナデ	デコボコとなる横方向ナデ	茶褐色 内：黒褐色	普通	白色石・長石・石英などの細かい石	粗い作り
142	土坑	鉢			みがきに近いていねいな横方向ヘラナデ両端に縦方向凹線	横方向ナデ縦方向ヘラナデ	茶褐色 (下は黒みがかる)	良	金雲母などが多い 長石・石英・白色石などの細かい石	
143	１－Ａ	鉢			縦方向ナデ横方向ヘラナデ ケズリに近いナデ	横方向粗いヘラナデ	明茶褐色	良	白色石・石英・長石などの細かい石	
144	１－Ｂ	鉢		11.2	ていねいなヘラナデ	粗い横方向ヘラナデ	黄みがかった 淡茶褐色	普通	角閃石・石英・白色石・雲母などの小石多５㎜大あり"	
145	１－Ｂ	深鉢			粗い条痕ヘラ凹線（縦・横）	横方向条痕	外：黒褐色 内：淡茶褐色	良	長石・白色石・雲母など５㎜大の細石もあり	
146	１－Ａ	深鉢		13	縦方向ヘラケズリ	横方向ヘラナデ	茶褐色	良	白色・角閃石・黄白色などの細かい石	鯨骨痕・白粉アリ
147	２－Ｂ	深鉢		10.5	ヘラナデ	ヘラナデ	茶褐色	普通	角閃石・石英・白色石	葉痕白粉 縁に一部ヘラ押し
148	１－Ｂ	深鉢		14.5	ヘラナデ	ナデ	淡茶褐色 内：黒褐色	普通	白色石・角閃石・石英	葉痕 木の実圧痕
149	１－Ｂ	深鉢		13.5	ヘラナデ	ていねいなナデ	外：淡褐色 内：黄褐色黒褐色	良	白色石・角閃石・長石・石英などの細石５㎜大あり	せんい状の圧痕，木の実
150	３－Ｂ	深鉢			縦方向ヘラケズリ近いナデ	ていねいな縦方向ヘラナデ	黄みがかった 灰褐色	良	石英・角閃石・白色石など	
151	１－Ａ	深鉢	10.5		ヘラナデ	ヘラナデ	淡茶褐色 黒褐色	普通	黄白色・茶色石・角閃石などの角礫が多い粗い土	白粉
152	１－Ｂ	深鉢	9.5		横方向ヘラナデ	横方向ヘラナデ	茶褐色	良	石英・長石・白色石など細かい石多い粗い土	白色粘土
153	４－Ａ	深鉢			ヘラナデ	ヘラナデ	外：淡茶褐色 内：黒褐色	普通	角閃石・黄白色・石英などの細かい石	葉痕白粉
154	１－Ａ １－Ｂ	深鉢	11		縦方向ヘラナデ	ていねいなヘラナデ	茶褐色 (内は灰がかる)	普通	白色石・角閃石・石英 ６㎜大の石アリ	葉痕
155	４－Ｂ	深鉢	14.5		縦方向ヘラナデ	縦方向ヘラナデ	茶褐色	良	角閃石・石英・黄白色細かい石	葉痕
156	１－Ｂ	深鉢			横方向ヘラナデ	横方向ヘラナデ	茶褐色	良	石英・角閃石の多い細かい石	部分的に細かい編物圧痕　白粉
157	１－Ｂ	深鉢			ケズリに近い横方向ヘラナデ	横方向ヘラナデ	淡茶褐色	良	角閃石・黄白色・茶色石などの細かい石	白粉
158	１－Ａ	深鉢	10.5		横方向ヘラナデ	横方向ヘラナデ	茶褐色	普通	角閃石・石英・茶色石などの細かい石	圧痕のためでこぼこ・白粉あり
159	４－Ａ	深鉢	9		ミガキに近いヘラナデ	ヘラナデ	黄みがかった・淡茶褐色・内にこげが多い	良	角閃石・石英・長石	底に木の実らしき圧痕
160	１－Ｂ	深鉢	14		ていねいな横方向ヘラナデ	横方向ヘラナデ	茶褐色	普通	角閃石・茶色石・石英などを含む粗い土	角に圧痕 白粉
161	１－Ｂ	深鉢	13		ていねいな縦方向ヘラナデ	ていねいなヘラナデ	茶褐色	良	角閃石・白色石・雲母	
162	１－Ｂ	深鉢			縦方向ヘラナデ 縦方向ヘラ凹線	横方向ヘラナデ	黄みがかった 淡茶褐色	普通	白色石・石英・角閃石などの細かい石	
163	１－Ｂ	深鉢	10		ナデ	ナデ	淡茶褐色	普通	黄白色・角閃石・石英などの細かい石	白粉
164	１－Ａ	深鉢	8		ていねいなナデ	ナデあるいは剥脱	淡茶褐色 内：黒褐色	普通	火山ガラス多	白粉

第Ⅴ章　まとめ

第１節　万之瀬川下流域の遺跡変遷と加治屋遺跡の位置づけ

近年，万之瀬川下流域では各地で発掘調査が行われ，その内容が明らかになりつつある。その中には栫ノ原遺跡や持躰松遺跡などのように全国的に注目されている遺跡もあるが，全体的にその移り変わりがたどられることはあまりない。ここではその変遷を概述し，その中での加治屋遺跡の性格を考えてみる。

万之瀬川は川辺平野をゆったり流れ下りてくると，幅200ｍほどのくびれた部分にあたる。川幅も10ｍほどと狭くなり，底にはごつごつした安山岩礫が露頭している。そこから再び開け，やがて左側から流れてくる大谷川，さらには加世田川と合流する。この再び開けた部分の左岸にあるのが加治屋台地で，川との比高が約10ｍあり，対岸は山が迫っている。万之瀬川は加世田川と合流するとやや北側に蛇行し，台地端に沿って流れ，海岸近くの砂丘のあたる所で南へ曲がり，まっすぐ相星の河口へ向かっていた。ところが，この河口は享和２年（1802）の大洪水によって，砂丘をまっすぐ貫いて現在の河口へとその位置を変えたのである。

約１万２千年前の縄文時代草創期には左岸のシラス台地で全国的にみても早い時期の定住生活が営まれた。栫ノ原遺跡である。竪穴住居跡はみつかっていないが，集石・連穴土坑などの遺構や，草創期としては多量の土器，大きな石皿など安定した定住生活の痕跡を残している。さらに9500年ほど前の早期前半にも同じ栫ノ原遺跡で生活が行われたらしく多くの土器・石器が出土している。早期後半の遺跡は少ない。加治屋遺跡の今回の第２地点ではこの時期，中葉から後葉にかけて割と多くの土器が出土し，第１地点では土坑も見つかっている。

前期になると右岸の低地に生活跡がみられる。標高約２ｍの上水流遺跡である。ここではさらに中期の春日式土器の時期まで生活しているが，ここからさらに下流の芝原遺跡でも同時期の土器が多く出土している。早期には台地だけで生活しているが，前期後半になると低地にも進出しているのである。

後期には芝原遺跡に集落があったようで，指宿式土器の時期から市来式土器までの土器・石器が多く出土している。集石も多くみつかっており，安定した生活跡を残している。芝原遺跡では市来式土器の時期で痕跡が途切れているが，そのあとに生活跡があるのが加治屋遺跡で，この遺跡では次の晩期前半の上加世田式土器の時期にピークを迎える。上加世田式土器期に上加世田遺跡では大きな土坑がみつかっており，この中からは土偶・石棒などの祭祀用具，管玉・匂玉などの装飾品およびその未製品・加工具などがみつかっている。この遺構では炉跡・骨片などもみつかっており広い範囲での共同祭祀・加工場と思われる。最近では玉生産地とみなされており，その製品は岐阜・新潟あたりまで伝わっているといわれている。晩期には上水流・上ノ城などの遺跡でも多くの出土品がみられる。

弥生時代になると，さらに下流で万之瀬川に合流する堀川の下流域に広がる田布施平野に主体が移り，下原遺跡・高橋貝塚などで初期の稲作文化が栄える。万之瀬川流域では芝原遺跡で前期・中期と出ているが，量は少ない。中期には川辺平野の端にある寺山遺跡で二重環壕が存在する。田布施平野でも後期初めには松木薗遺跡で防御用と思われる大規模な溝状遺構が発見されており，両平

野とも稲作農耕の発達とともに集落の広がりのあったことが予想できる。同じ頃たいした遺跡のない万之瀬川下流域でも，後期の終り頃には芝原遺跡で多くの土器が出土し，集落の拡大がうかがえる。この遺跡では方格規矩鏡の破片と小形仿製鏡３面が出土しており，このあたりでも権力者が存在していたことを物語っている。

栫ノ原遺跡では竪穴住居３軒も発見されている。

芝原遺跡では古墳時代でも拠点となる大集落があったようで，少し上流の上水流遺跡とともに竪穴住居跡の発見こそ少ないが，多量の土器が出土している。古墳時代には加治屋遺跡でも土器が多く出土しており，上ノ城遺跡や中小路遺跡でも多く出土している。河口近くには箱式石棺をもつ古墳が存在している。

古代には薩摩国阿多郡に含まれているが，この地域には早くから仏教文化がはいったらしく各地で蔵骨器が出土している。白樫野・新山・杉元寺跡などがその遺跡で，加治屋遺跡でも焼骨は出ていないが，合せ口の土師甕が出土している。加治屋遺跡では竪穴住居と思われる遺構もある。平安時代になると中岳山麓に須恵器の窯跡群がつくられる。この積み出し地と思われる芝原・渡畑遺跡では多くの須恵器が出土し，渡畑遺跡では瓦も出土している。薩摩半島最大の窯で，薩摩国だけを対象とした生産でなく日向国などまで製品が伝わったといわれており，出土している瓦が薩摩国分寺跡のものとすれば，単なる窯というより国をあげての官窯的性格をもっていたものと思われる。このことは芝原遺跡で出土した石帯や多口瓶など一般村落では出てこないような出土品からもうかがうことができる。またこの下流にある万之瀬川底遺跡・高橋貝塚でも多くの須恵器が出土しており，同じような性格が考えられる。

中世になると，万之瀬川下流域が中国や中京地区，さらには南西諸島との交流地となるといわれており，近世にはさらに下流の唐人原地区が薩摩藩の交流の核となる。

こうしてみると加治屋遺跡はまず縄文時代草創期，さらには早期中頃から後半にかけてキャンプ地的な遺跡として生活が始まっており，後期初頭には今回調査の第２地点周辺で安定した生活が営まれたようである。そして後期の終り頃には生活の場をやや低い地に移し，芝原遺跡などの縄文時代後期中頃に次ぐ遺跡として拠点地となり，晩期初めには玉造りなどの拠点地となる上加世田遺跡に続く台地の遺跡として重要な位置を占める。そして弥生時代は空白となるものの古墳時代になると分村としての存在を占め，平安時代には阿多郡中心地の周辺部として生活の場さらには墓地の場として使われたようである。

ただ今回の調査でわかったように同じ加治屋遺跡といっても，同じ台地内で全く別の時代の居住地・墓地が他の地点に所在することがある。ということは，遺跡の一部での調査だけでは先史時代の人びとの動きはつかみ得ないということである。遺跡の評価をする時，この成果は重要であろう。

第２節　縄文時代草創期・早期の土器について

南九州における草創期の土器編年は雨宮瑞生や児玉健一郎らによって研究されている。当遺跡出土の隆帯文土器は１点だけだが，鹿児島市掃除山遺跡出土のものに類似している。雨宮は草創期を３期に分け，この土器をそのうちの２期（中葉）に位置付けている（雨宮：1997）。児玉は隆帯文土器を４期に分け，これを草創期中葉～後葉に位置付ける。そして，掃除山遺跡出土の土器は隆帯

文土器のⅢ期とし，後葉の前半としている。ただ，隆帯文土器の次にくる岩本式土器について，これを従来の草創期末から早期初頭に位置付けるのでなく，すべて草創期とする必要があるかもしれないとしている。そうすれば，もう少し古く位置付けられる（児玉：1999）。つまり，中葉のなかにはいる可能性を示唆している。当該期の土器は，近隣の栫ノ原遺跡とほぼ同時期，すなわち，草創期中葉から後葉前半にここでの居住があったことを示している。

早期の土器は３期に分けられている。

貝殻条痕文円筒形土器系統の桑ノ丸式土器，小型の山形文・楕円文などの付された押型文土器，さらには凹線と縄文が付される塞ノ神Ａ式土器の３種である。桑ノ丸式土器も細かい平行線文となるものと，粗い平行線文のものとがあり，時期差のあることが予測できる。押型文土器は小粒の押型文様・直口する器形などから早水台式土器と考えられる（八幡・賀川：1955）。当遺跡の塞ノ神Ａ式土器は凹線に挟まれた縄文が口縁部から胴部にかけて施されており，河口貞徳の塞ノ神Ａａ式土器，新東晃一の鍋谷式土器にあたり，この様式ではもっとも新しい（河口：1972，新東：1988）。

第３節　縄文時代後期の土器について

南九州の縄文時代中期末から後期前半の土器には阿高式土器・南福寺式土器・出水式土器・岩崎下層式土器・岩崎上層式土器・指宿式土器といったような型式名が与えられており，その編年も試みられているが，中期と後期との区分、その編年とも明確でないのが現状である。

当遺跡においても層位的・分布域的に出土土器を分ける資料を得ることはできなかったが，大筋としては同じ形態・文様・調整をしており，同一型式，あるいは連続する型式である。当遺跡の土器は開きながら直口する胴部と，安定した平底から成り，口縁部分には幅広い文様帯がある。この部分を肥厚帯とするものもあり，口唇部に指頭やヘラによる押圧文の施されるものが多く，底部には木の葉などの圧痕が付き，白い粉が付着したものも多い。文様は大きく①押圧文＋凹線（凹線の間に２列ほどの押圧文がみられるもので，凹線は半円形状，くの字状，横線などがある。）②押圧文（指頭圧痕文やヘラ圧痕文があり，円形をしたもの・長方形をしたもの・長楕円形のものなどの種類がある。数列にわたって施され文様帯をなしている。）③横あるいは斜方向・矩形凹線（縦・横の凹線文を基本とするもので，これで矩形をなしたり，格子状の形を作り，その中に押圧文を施すものもある。）④無文（段などで文様帯を作っているが，この部分をヘラナデ，ヘラケズリのみで仕上げるものである。）の４種類に分けることができる。中期末から後期に変わる段階においては，文様帯が胴部から消失し，口縁部のみに集約される傾向がある。これが田中良之のいう阿高Ⅲ式土器の出現になるのであり（田中：1979），南九州では岩崎下層式土器の時期にあたる。これでいくと，当遺跡の土器は古くみても中期後葉以降といえる。

以上，４種に分けた文様のあり方は阿高Ⅲ式土器の最終段階から南福寺式土器・出水式土器に類似するが，凹線部がヘラケズリ様となる南福寺式土器の特徴はここでは全くみられない。これらの中で注目されるのは文様形態が他の土器に似ていながら，素地調整が表裏とも貝殻条痕で仕上げられている145の土器である。このように貝殻条痕を多用しているのは岩崎上層式土器の特長であり，この土器も岩崎上層式土器・南福寺式土器・出水式土器の文様と同じ特長をもっていることから，これだけは岩崎上層式土器であろう。岩崎上層式土器と指宿式土器の関連がはっきりしないが，こ

の両者が同時期のものとすれば，これは大隅半島からの持ち込みとも考えられる。

また胎土においては，春日式土器・並木式土器以来，中期の土器に多く混入される滑石粉末がほとんど用いられないという特長もある。地域的な違いとも思われるが，当遺跡が西北九州に近い西海岸に位置していることを考慮すれば，この時期には既に用いることがなくなっていると考えられよう。

器種としては深鉢が大多数を占めているが，浅鉢・鉢も少量ある。

以上のことを含めて考えれば，これらの土器は口唇部の深い押圧文，指頭凹線文・押圧文の多用，ヘラケズリの使用，底部付近の縦方向凹線などに阿高Ⅲ式土器・南福寺式土器・出水式土器などの要素を残しているが，凹線幅の狭さ，横凹線の多様など指宿式土器などに近い要素もある。なお，後期に全国的に広がりをみせる磨消縄文土器の影響は，これらの土器には全く見られない。瀬戸内地方で後期初頭に位置づけられる中津式土器は本地方にあまり影響を与えず，その後に出てくる福田KⅡ式土器は志布志町中原遺跡などで出土し，その影響を受けたのが指宿式土器である。これらの影響を受けた土器はここで出土したなかには全く見られない。したがって，この土器は指宿式土器と重なっておらず，その直前以前に位置づけられよう。詳細は今後の研究にゆだねたいが，年代的には南福寺式土器より新しく，指宿式土器より古い後期初頭頃に位置づけられ，型式名でいえば出水式土器にもっとも近いといえよう。

南九州における出水式土器の位置づけは，出土量の少なさ・出土遺跡の少なさ・他型式との前後関係が不明であることなどもあってはっきりしていない。しかし，熊本県黒橋貝塚での出土状況（西田他：1976）などから考えると，出水式土器はどちらかといえば中九州に主体をもっている型式かもしれない。そうすれば，今回の出土土器の一括性は西海岸における出水式土器の広がりのみでなく組成等で重要な資料といえよう。少なくとも，出水式土器が南福寺式土器と指宿式土器の間にはいることは確実になったといえるのではなかろうか。

参考文献

雨宮瑞生「南九州縄文時代草創期土器編年（補遺）」『南九州縄文通信』 NO.11　1997
河口貞徳「塞ノ神式土器」『鹿児島考古』第16号　1972
児玉健一郎「南九州を中心とする隆帯文土器の編年」『鹿児島考古』第33号　1999
新東晃一 「塞ノ神式土器再考」『日本民族・文化の生成』永井昌文教授退官記念論文集　1988
田中良之 「阿高式土器様式」『縄文土器大観』3　小学館　1988
田中良之「中期・阿高式系土器の研究」『古文化談叢』第6集　1979
西田道世他『黒橋』（『熊本県文化財調査報告』20）熊本県教育委員会　1976
八幡一郎・賀川光夫「早水台」『大分県文化財調査報告』第3輯　大分県教育委員会　1955

図　　版

図版1

上：第１地点近景（東から）　左下：土坑（掘り上げ前）　右下：土坑（掘り上げ後）

図版2

礫器出土状況

第１地点柱穴検出状況（西から）

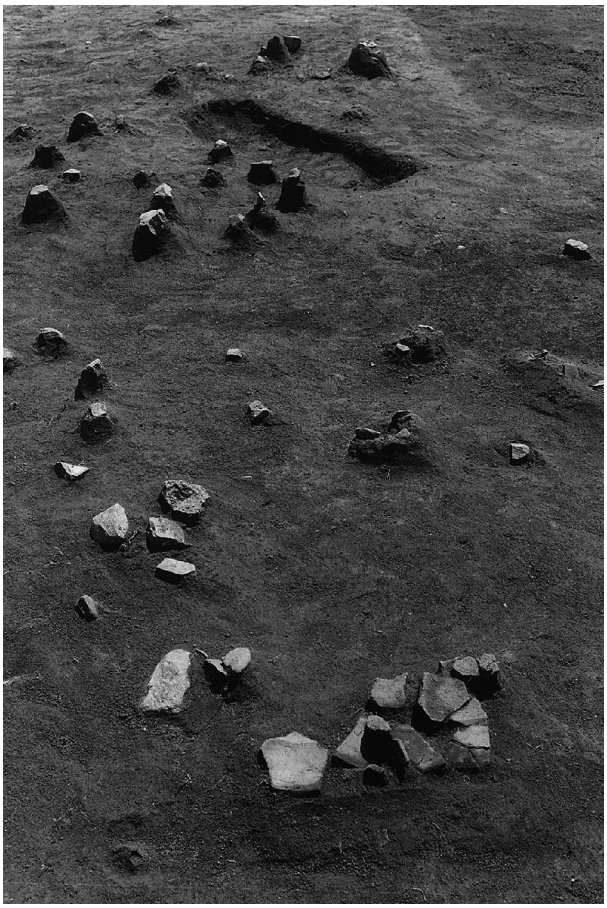
上：第２地点近景（東から）　　下：第２地点遺物出土状況（東から）

図版4

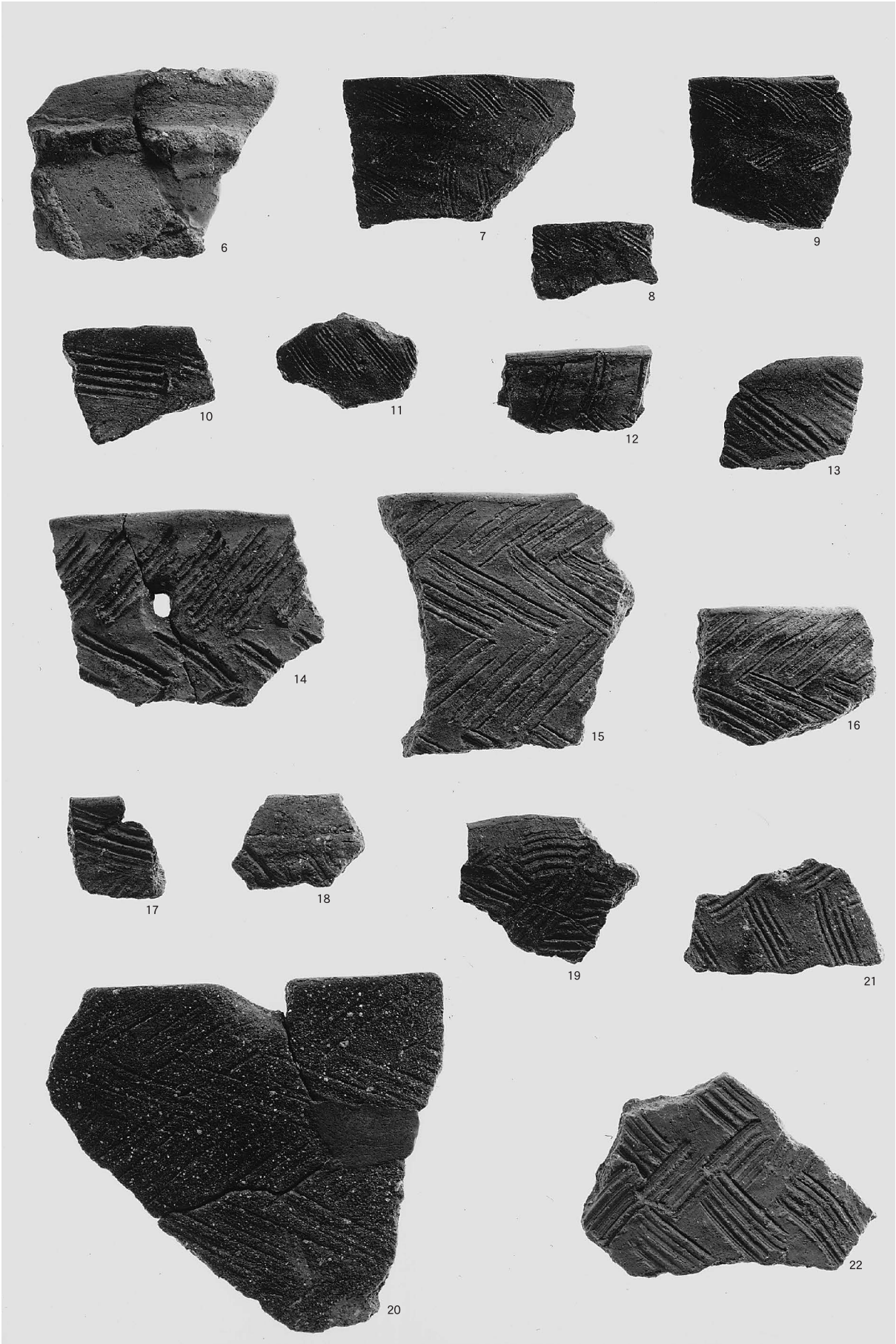
上：第２地点近景（西から）　　下：第２地点土坑

上：集石2　　下：集石3

図版6

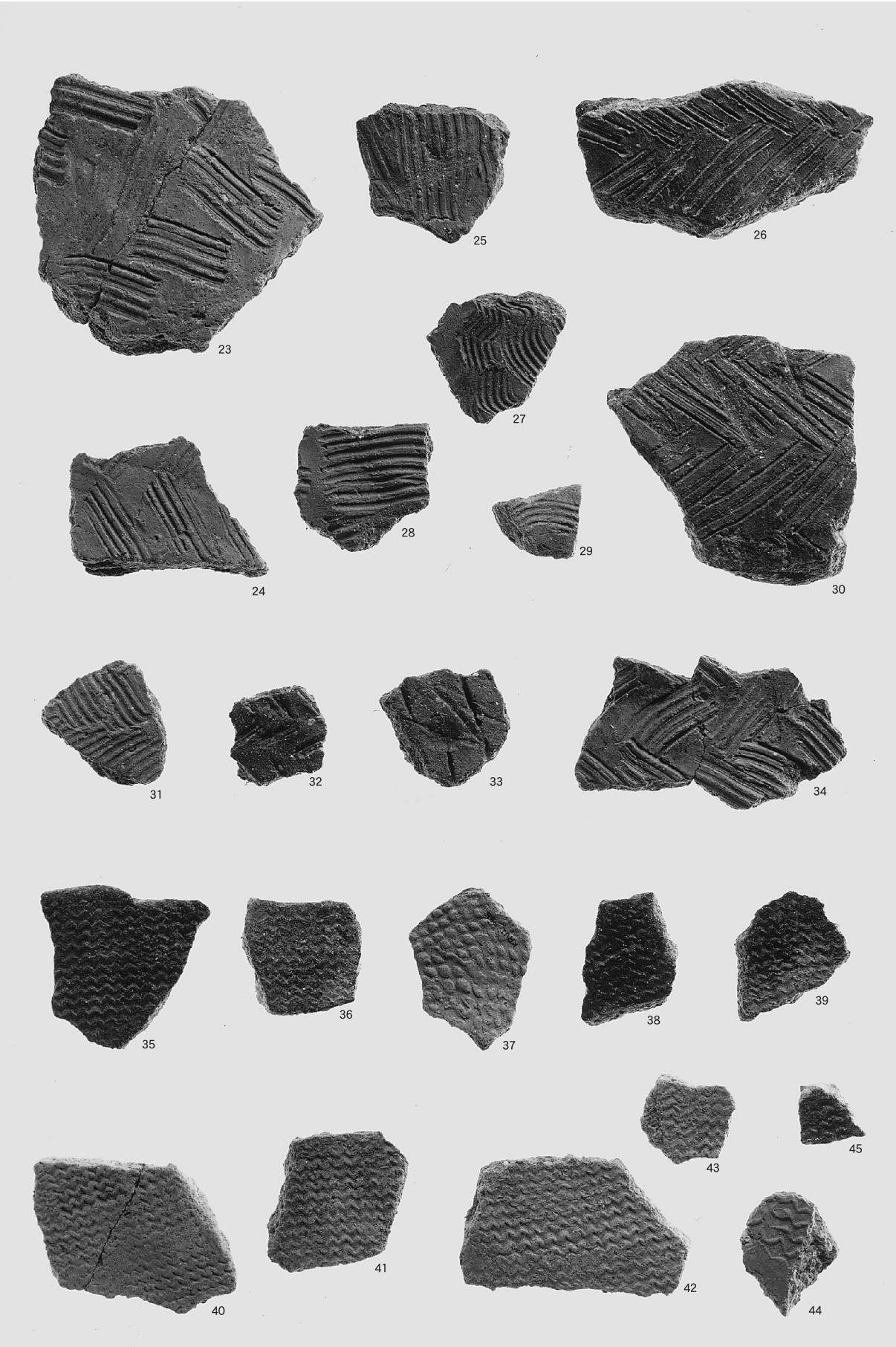


上：縄文時代後期の土器集中状況
左下：縄文土器出土状況
右下：塞ノ神式土器出土状況

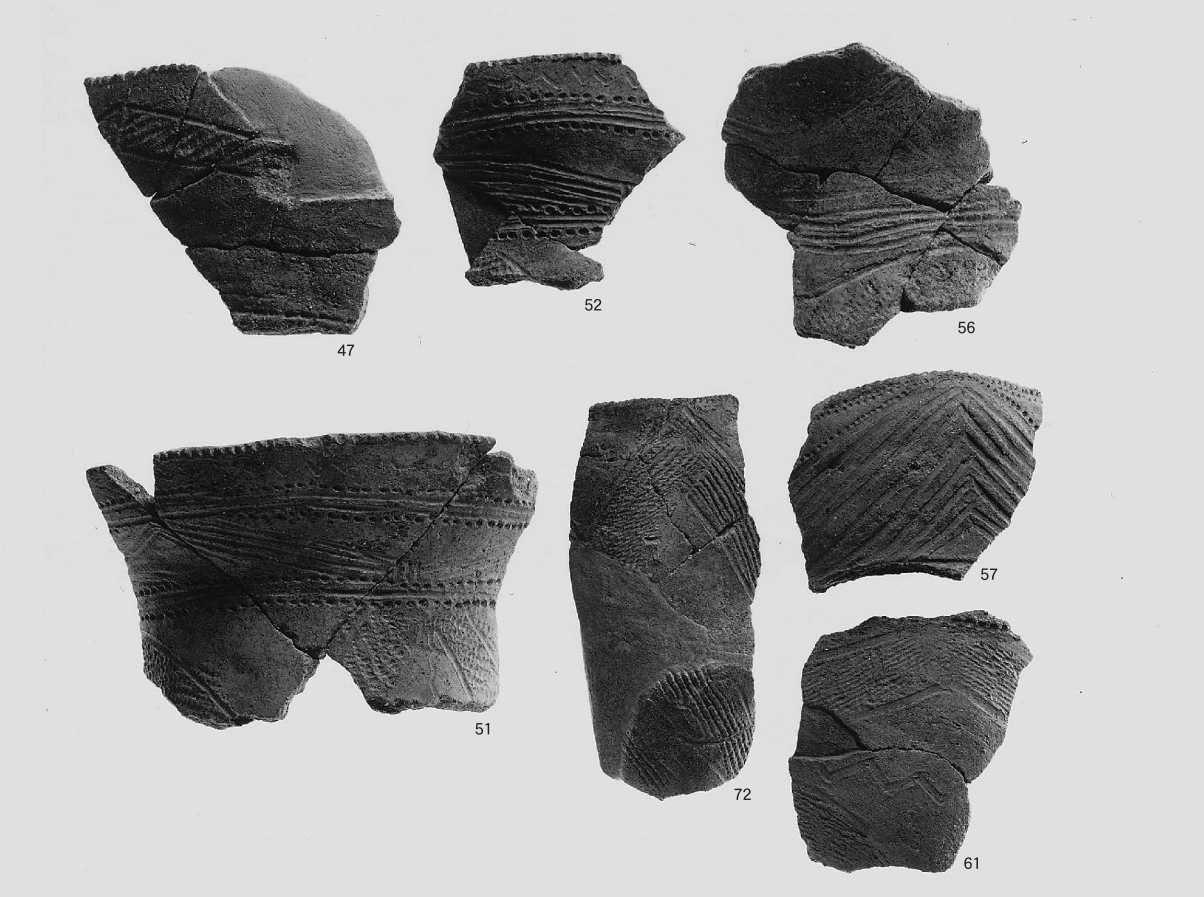


縄文時代草創期・早期の土器

図版8

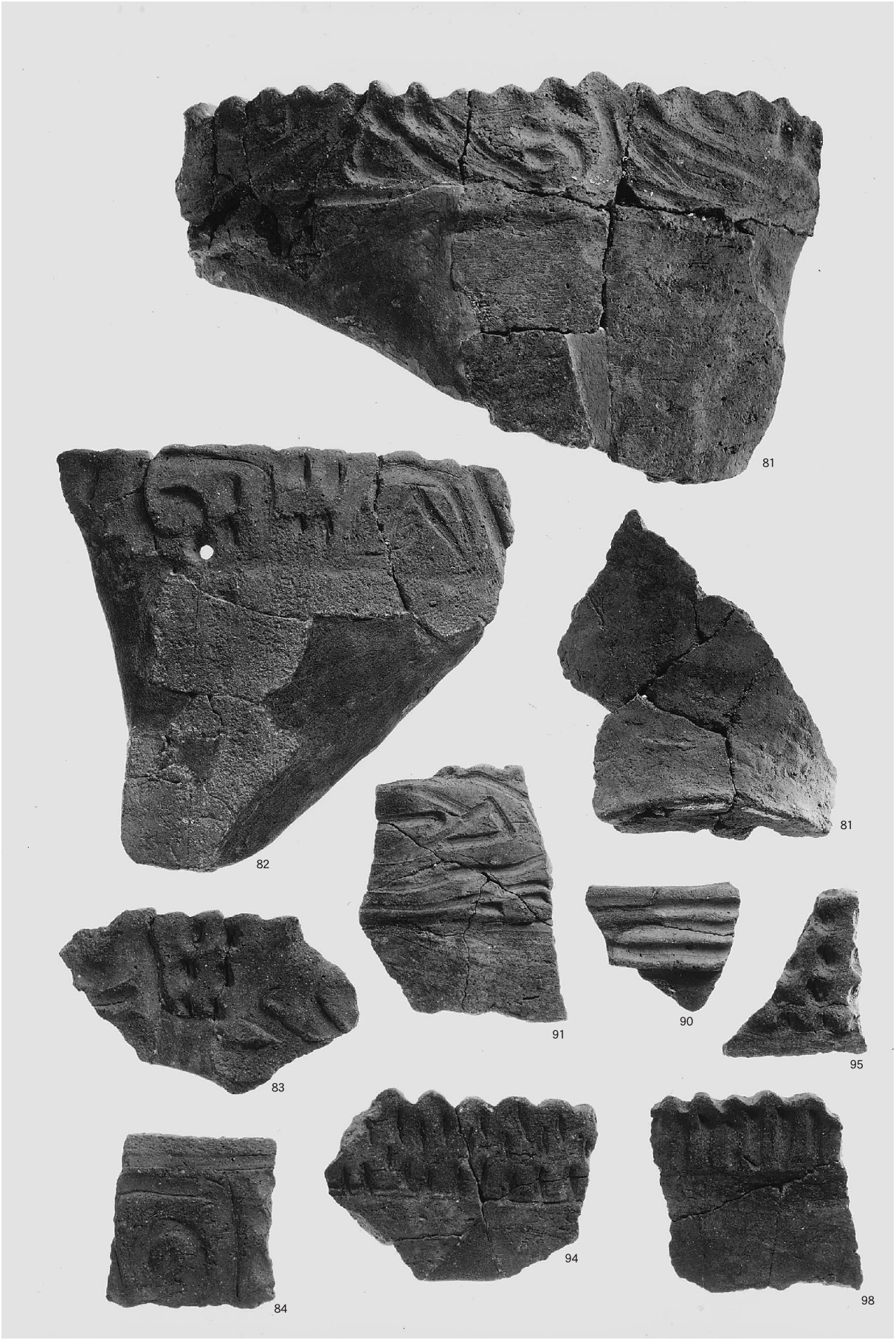


縄文時代早期の土器



縄文時代早期の土器

図版10

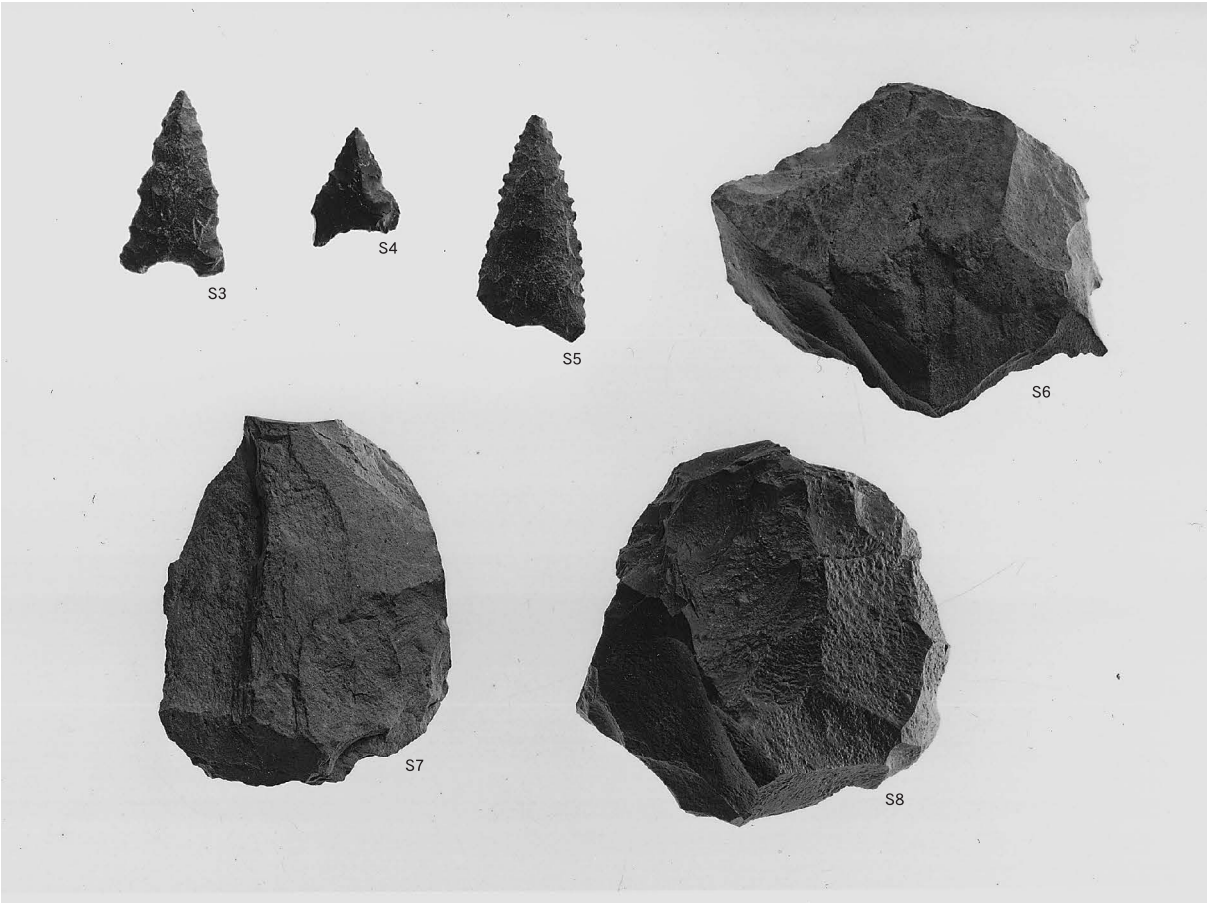


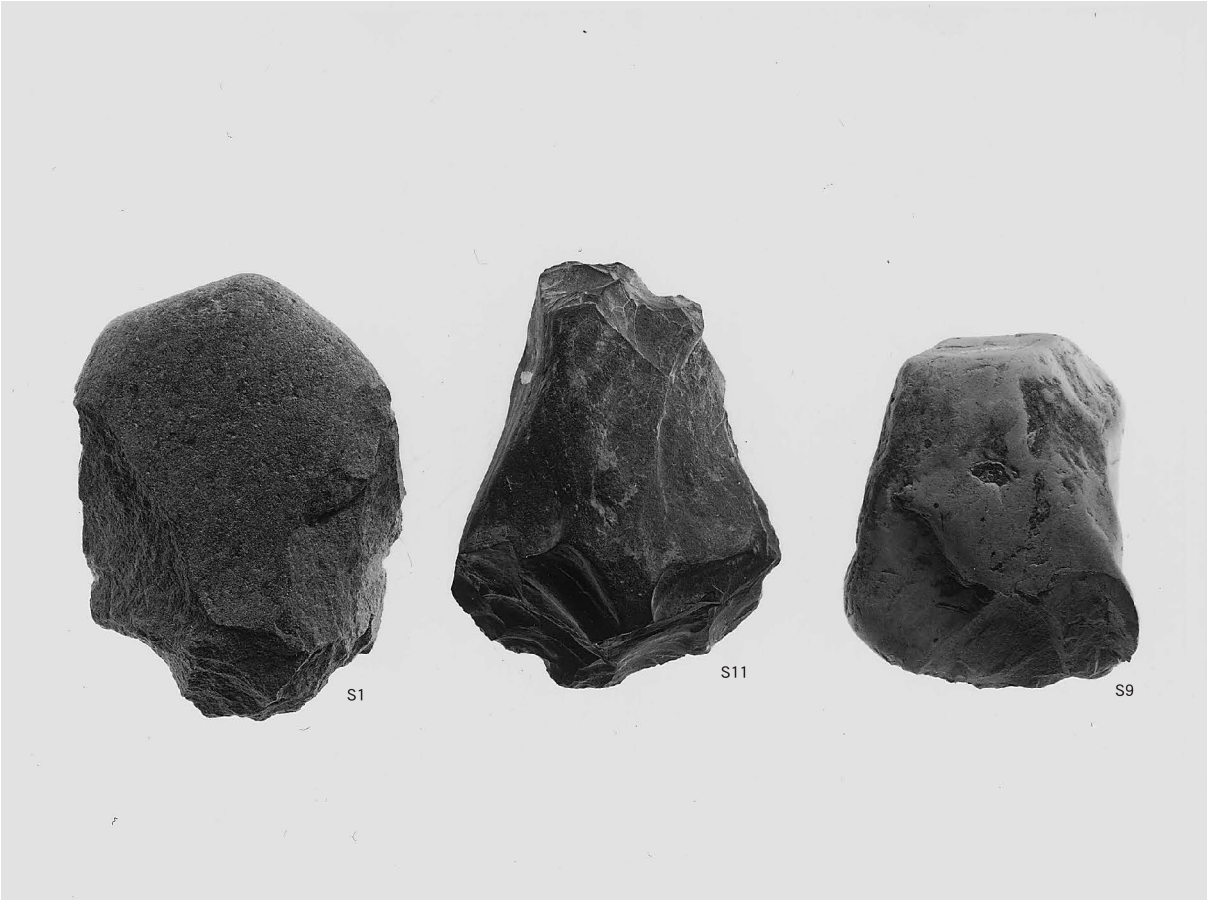
縄文時代後期の土器

122
128
126
127
129
135
134
131
117
114
112
140
143
141
136
139
142
144

縄文時代後期の土器

図版12





石　器

あ と が き

昭和53年だから，今から約25年前のことである。今の運動公園ができるというので確認調査をしていたところ，市営住宅建設地で遺跡が発見されたという。約1か月の調査をした。その報告書はまだ出ていない。申しわけないが，その頃はこうした発掘調査も時としてあった。

先日その時の写真をみた。筆者もだいぶ若い。ところがその風景をみるとその違いには驚く。まるで明治時代と現代の違いほどの差がある。そうである。この原風景は20～25年の間に大きく変わっているのである。

発掘調査の成果をまとめる時，当時の状況を復元することが必須となる。かつては畑の中や森の中にあってそれが割と簡単にできた。しかし，今ではこれが非常にむずかしい。今回の調査でそれがよくわかった。さらにむずかしいのは当時出てきたものと関連して結びつけて考えることが不可能であることである。途中に道や家など推測するのにじゃまなものがあるから。とはいえ，今回は狭い範囲の調査だったため，加治屋遺跡のほんの一部しか把握できなかった。遺跡に対しては申しわけなく思う。

最後になったが，この調査にあたり，工事中断のため段取りが遅れ御迷惑をかけながら，調査中も快くいろいろと協力いただいた業者の皆さん，発掘調査員募集に協力いただいた加世田市教育委員会社会教育課の皆さんや川畑地区公民館の吉見徹郎館長・上加世田敬子主事，発掘調査員の皆さん，整理作業員の皆さんには大変お世話になった。感謝申しあげたい。（池畑）

○発掘作業に従事した人びと

市坪百合子・井出ヶ原洋子・金氣博明・川井健次・五反スミ子・篠原秀治・諏訪園洋子・高倉徳夫・寺内桃代・中村敦子・西御建田茂・二宮久志・久永マリ子・福島リウ子・外園望・前田トシ子・森田幸子

○整理作業・浄書に従事した人びと

川路加代子・新中泰代・野﨑裕子・福山霧子・山元宏子・渡邉公兒子（五十音順・敬称略）

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（82）

加世田停車場線街路事業（加世田市川畑地内）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

加 治 屋 遺 跡

発　行　2005年3月

編　集　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4461
鹿児島県国分市上之段1175番地1

印　刷　青葉印刷株式会社
〒890-0045
鹿児島市武1丁目11-17